

平成二十二年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年（通卷九八三号）

日川協加盟

川柳塔



No. 983

四月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>

お願い

川柳塔社では2010年10月に『川柳雑誌』『川柳塔』通巻1000号記念大会開催に当り『麻生路郎読本』(仮題)の出版を予定しています。

麻生路郎に関する書簡・写真或いはどんな些細な情報でも、お持ちの方は川柳塔事務所までご連絡下さいますようお願い致します。

川柳塔社

(06-6779-3490)

僕はモルモット

— 若田さん宇宙へ —

河内 天笑

日本時間3月16日、朝8時43分、スペースシャトル「デイスカバリー」が打ち上げに成功、日本人初の宇宙長期滞在が始まった。当初2月12日の打ち上げ予定が、エンジンに燃料の水素を供給する弁に問題が判明、五回も延期をくり返しての成功で胸を撫でおろしましたが、ほんとにどきどきやきもきのひと月であった。

今回で三度目の宇宙ですが、これまでは滞在期間が短いせいもあって分刻みのスケジュールに追われたが、今回は約三ヶ月の長期滞在とあって土曜の午後と日曜日は休日。アメリカ人とロシア人と若田さんの三人がジャンボ機ほどの大きさの中でそれぞれのノルマを果す。休日にはカラオケをしたり自国の上を周遊する時は写真をとったりしてストレスを発散させるらしい。

無重力でしかも閉ざされた空間での生活は肉体的、精神的に様様な悪影響を及ぼす。若田さんは自らモルモットとなり骨粗しょう症の治療薬を週一回服用して骨量の

減少を食い止められるかの効果を検証する。また地上の半年分にあたる約1ミリシーベルトの放射線が一日で降り注ぐ宇宙の暮らしに備えて、小型の線量計をつけ被曝量の測定精度を上げる為のデータを取る。これまで飛行士の健康管理は全て米航空宇宙局（NASA）におんぶにだっこの状態だったが、今回からは二週間に一度、精神科医の立花さんとテレビ電話を通して問診を受け、情緒テストなども行われる。なにしろアルコール禁止の宇宙ではストレス発散の機会は限られるので、三ヶ月の滞在中に二回、手のひらサイズの小型心電計を使い24時間連続で心臓の動きを記録。地上に届くデータをもとに自律神経の働きを読みとり若田さんの心を探る。

私達の想像を絶する程の肉体的精神的訓練を積み重ねた上でしか成し得ぬ宇宙での専門分野のお仕事は言うに及ばず、自らを実験台に提供される大きな「愛」のところに拍手を惜まない。若田さん元気で還って来て下さい。

生きてゆく流れを変えるハプニング 天笑

自給率十四割少子化はすむ

食べ放題哀しいひびきもっている

記憶力妻に完封負け喫す

山笑う季節は鼻がつまります



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

人恋し隣へ伸びる豆の蔓

林 力子

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「仏隆寺桜」

■巻頭言 僕はモルモット	河内 天笑	(1)
相似と相違	木本 朱夏	(2)
川柳塔(同人吟)	河内 天笑	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (52)	木津川 計	(48)
麻生路郎句抄		(49)
自選集		(50)
温故知新		(53)
水煙抄	小島 蘭幸	(54)
第二回ごま川柳入選句	河内 天笑	(73)
愛染帖	新家 完司	(74)
檸檬抄「永遠」	高瀬 霜石・木本 朱夏 共選	(79)

相似と相違

木本 朱夏

昨年は小林多喜二の「蟹工船」がブームとなった。今年はどうやら太宰治にスポットがあたる兆しがあるとか……。多分、仕掛け人が居るはずだ。

猪瀬直樹著・小説『ピカレスク』(小学館発行)は、ミステリー仕立ての太宰治伝である。太宰の文学上の師、というよりは私生活上も深い交流のあった井伏鱒二にかなり頁が割かれている。

太宰治は生涯に何度も心中を図ったが、最後の入水心中の遺書に「井伏鱒二さんは悪人です」と書き遺した。太宰の自死に井伏鱒二がどう関わったのか、なぜ悪人と記したのか読み進むうちに、真相があまり出されてくる仕掛けになっている。

『ピカレスク』によれば、井伏鱒二作『山椒魚』『ジョン万次郎漂流記』『黒い雨』その他には種本があったという。『黒い雨』にいたっては、全体の三分の二が被爆者の日記のリライトであるという。

後に井伏はそれらの作品は、ドキュメントであると苦しい言い訳をしたが、当時の文壇はほとんど問題にらなかった。むしろ被爆の凄まじい描写が絶賛されたが、もちろんそれ

一路集	「陽 氣」	松本文子選	(82)
	「達 人」	両川無限選	(84)
	「カリリー」	田中みね選	(85)
初歩教室「楽しい」		鈴木公弘	(86)
秀句鑑賞	同人吟	三宅保州	(88)
	水煙抄	米田恭昌	(90)
■エッセー 新聞小説の楽しみ		藤井則彦	(91)
■各地句会だより ほたる川柳同好会とともに		水野黒兎	(93)
三月本社句会			(94)
各地柳壇(佳句地十選/徳山みつこ)			(98)
柳界展望			(115)
四月各地句会案内			(116)
■編集後記(ひとこと/原 煩惱兄)		希久子・朱夏・恵子	(118)

座右の句

進む道決めるにも運つきまとい

私の句

脈脈と流れる川も人生も

(天 笑)

中村 れんげ

は何人もの被爆者の日記からの引用であり、盗用と指摘する向きもあろう。

短詩文芸にも本歌取りやパロディなど、どこからが盗用・剽窃なのか線引きが難しい問題がある。俳句界で有名なのは中村草田男の「降る雪や明治は遠くなりけり」である。これには志賀芥子作「癩祭忌明治は遠くなりけり」という先行作品があった。「盗作ではないか」と主張した人もいたが、俳人・高柳重信は「それでは草田男が気の毒である。もともと、或る一つの言葉や一つの語句を、安直に誰か個人の所有のごとく考えることが滑稽なのであつてあらゆる言葉は、原則として誰のものでもなく、また誰のものでもあると言ふべきであらう。」と評した。

過去に川柳界にも国民文化祭で文部科学大臣奨励賞の作品が問題になつてゐる。受賞作はことさらに黒髪へ雪ふりたがり

これが水府作「ことさらに雪は女の髪へ来る」に類似していると言ふわけである。

また風のまち川柳大賞受賞作品で句碑になつた「茄子の馬風がふわりと来て座る」にも宮川蓮子の「茄子の馬精霊ふわりと来て座る」に類似している問題視されたことがある。

高柳重信が「言葉は誰のものでもなく、また誰のものでもある」と述べているとはいへ、類似句と暗合句と盗作、剽窃は短詩型文芸の逃れられない宿命であらうか。



河内天笑選

大阪市 井丸昌紀

変わりなく生きてるらしい便りなし

一時のハッピーだった派遣村

麗しい顔だこつてり塗ってない

閃きをじつと暖め先越され

悪役が宝物です大相撲

当たった人いるんだろうか宝くじ

堺市 志田千代

清濁を吞んでゆつくり流れてる

好きな道好きな歩幅で歩いてる

花咲いてぺんぺん草になるナズナ

仏壇の花賑やかににぎやかに

十五歳御飯ではなくメシを食う

くどくどの母よりも父の一喝

尼崎市 山田耕治

異議なしと二次会急ぐ手を叩き

泥棒も躰くような家の裏

生きるため目立ちたくない海の底

克明に残したメモで逮捕状

十しやべる間に夫一返す

灯明の横に飲屋のマッチ箱

豊中市 安藤寿美子

昼の部を見て来た手先踊ってる

ひよつとしてサギ師やったかあの男

深いわけきいたらなんやしいうむない

あちこちが抜けた記憶をかき集め

古びても着なれたコートまた着てる

せつかくの景色にやかましい車

松山市 古手川

大不況ひと息ついている地球

ほくほくの当てが外れた産油国

赤字赤字と黒字の時は黙ってる

地球は温暖化就職は氷河期

限界集落地域ぐるみで生きている

まさかが恐い食べても街を歩いて

光

西宮市 西口 いわゑ

過去は過去やはり日の丸美しい
魂は彼方に飛ばし飲んでゐる
えんぴつとわたくしだけの小宇宙
いたずらなマグマが胸にうずくまる
鰭酒と陽気なビエロとは成りぬ
ゆるやかな春の足音きいてゐる

鳥取市 倉益 一 瑤

知る秘密知らないふりをしてあげる
夫の手帖破れた跡がキナ臭い
落ち椿の赤は未練を招いている
仏壇に告げ口をする肚の虫
淋しくてかまわれたくてするいけず
百面相して終焉のリハーサル

黒石市 相馬 一 花

たつぷりと飲ませてくれぬ妻になり
はにかみの言葉忘れる面の皮
嘘をつく女の顔は美しい
涙には嘘も誠も溶けてゐる
お色気が磁石のように惹きつける
再会の元女房に惚れ直す

岸和田市 雪本 珠子

いつからか心に魔女が棲んでゐる
言いかけた言葉を包む春の風
雨の日はやさしい言葉ほしくなる

恋の女神わたしの胸に火をつける
わたし猫気儘勝手に暮らしてる
何か変ヒトがペットに仕えてる

弘前市 高橋 岳 水

口論になると出てくる津軽弁
やすらぎが欲しくて鉢に水をや
企みがばれてクモの子散ってゆく
吊皮でペーソスが揺れ悔いが揺れ
ワープロの手紙に欠けているところ
一病に触れると光り出すいのち

大阪市 板東 倫 子

つやめいた特選イチゴこの甘さ
辛口のギャグで興じる姥桜
曲者がどこかで狼煙あげている
待てば来る幸せならば待っている
彗星に乗り現れよ救世主
十日戎に貧乏神も顔を出し

堺市 柿花 和 夫

会議後のトイレで啖呵ひらめいた
生きるとは偽装の連鎖かもしれぬ
晩酌二合マンネリなどと言わせない
スカーフの結び目に見るお人柄
宗教の理念よいずこバレスチナ
ウサギにもカメにもあった勝つチャンス

京都市 高 島 啓 子

深ぶかと世間に腰を掛けている
じつくりと煮るふところの深い鍋

無いものねだり丸いポストのある景色

なんとなく枯山水という手足

夕暮れの景色はひとりずつ違う

雑踏をしばらく見てゐるカフェテラス

鳥取県 細 田 裕 花

定年の夫と遊ぶ野菜畑

来ましたと芳名帳に書いておく

過ぎた日も未来も語り合い夫婦

高層の蜂の巣空きが増えて来た

雑草の春をへし折る不況風

前向きに生きる口笛吹いている

尼崎市 加 川 靖 鬼

焼鳥を食べてゼラチン補給する

雨の風と知って囃している蛙

新緑に濾されて風はみどりいろ

タコ焼の蛸は明石の産とあり

ノーベル賞クラゲの知恵もちよつと借り

朝顔の蔓は釣瓶を探してる

檀原市 安 土 理 恵

理不尽な鉄に馴れてくる薔

チェリーピンク浮き足立ってくる日本

結ばれぬ縁もそれはそれでまた

お似合いと言われた仲がぎこちない

空っぽの脳へ蟹ミソなどいかが

おべんちやら男のジャブが効いてくる

奈良県 渡 辺 富 子

戦わぬ男で甘くなる拳

塩胡椒へこむ男へ振りかける

かび生えた初心時々陽に当てる

愛された記憶の残る盆の窪

嘘少し混ぜて本当らしくする

ぴょんと飛ぶ用意している春の靴

和歌山市 古 久 保 和 子

新緑の候で始まる果たし状

街の絵にひとり溶け込む待ちぼうけ

ミシン目の上を抜き足忍び足

古新聞となつて昨日が束ねられ

帽子にマスク街に溢れる正体不明

方向音痴も満更でない春の宵

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

園児バスホコホコ春の匂いする

占いのコイン裏でも晴れてくる

ローカル線トトロいそうな大きな樹

結び目がほどけて春が近くなる

落椿尼さん掃けば絵となりぬ

ケータイを携帯しないけど足りる

三田市 北野哲男

駐車料払うか要らん物買うか
生玉子だけは国産品ばかり

病窓に群れる野鳩の応援歌
脱毛の帽子にカーネーションを挿す
北摂の風に退院日を告げる

八尾市 生嶋ますみ

じいさんが怒鳴るといつも国ことば
捨てて来た故郷の話孫にする
逆上り孫に手本が見せられず
着メロは鉄腕アトム通夜で鳴り

出雲市 岸桂子

目線さえ変えれば広い空がある
その気なら受けて見せます変化球
焦らないことが私の処世術

お正月働く靴と遊ぶ靴
いつか読むつもりの本に笑われる
二十年無事故無違反免許証

堺市 加島由一

ラストダンス踊るお方が見つからぬ
また妻に下方修正する給与
遺伝子を断ち切るようにまだひとり

大阪市 鶴田遠野

使い捨てカメラで撮った恋終る
真夜中の月には嘘を語れない
記念日は口説いた店で食事する

河内長野市 山岡富美子

担当のナースに丁寧なお辞儀
センサードアアの開く手術室
病人に説教される見舞い客

枚方市 丹後屋肇

懐が豊かな亀は急がない
急いだら謀反をおこす膝と腰
贈り物あまり豪華で持て余す
ウイנקを見逃し眼鏡買い替える
一人こけドミノ倒しになる暮し
下戸ばかりお喋りに酔う花の下

吹田市 穴吹尚士

古里の山は変らぬままに過疎
公園の点景となりホームレス
焼け跡が原風景の戦中派
年寄りを邪魔扱いにする日本
言い訳が過ぎて余罪を吐かされる
財布とは相談しない特売日

大阪市 神夏磯典子

戎さんも鬼も氏神さまもヒマ
大臣の癖は漫画にすぐ描ける
にこにこ大きな耳のおじいさん
減ったのを露知りません骨の量
病院の外はマンションばかりなり
酔うてません言う時妻が恐ろしい

西宮市 菊池トミエ

代わり映えなき日課にもある至福
ほどほどに合いの手入れて愚痴を聞く
花買って心の隙間埋めている
人それぞれハンディ負って知らぬ顔
今が好きまだ見ぬ先は考えぬ
知らぬままだ良かった井戸の外

鳥取市 植田一京

華のある人真ん中に輪が出来た
古日記出会いの頃の懐かしき
少々の毒でおいしい味となり

ライバルの笑顔ギラギラ眩し過ぎ
ほどほどと言うのがとても難かしい
もう無理は出来ぬ歳だと悟りだす

大阪市 池上清治

真実に裏打された句に打たれ
裏表ない人生を送りたい
一輪の椿に背筋正される
喜びの兆し蘭の芽急に伸び
裏の裏もつと聞きたい酒を注ぎ
ひど過ぎるオバマと太郎人氣の差

弘前市 高瀬霜石

ライバルだから直球で勝負する
罪名がどんどん増える負け戦
銀行に縁がないからよく眠る
レシートを手渡す一期一会なり
一病にだつていいやつ悪いやつ
歯がいつぱん抜けて善人顔になる

東広島市 福島万年

妻の留守一膳飯に目刺し添え
ストレスを溜めないように声を出す
ベッドから指令を飛ばす回復期
立春の光まつて妻帰る
安らかな妻の寝息を聞いている
箸二膳揃えて洗う春の水

島根県 持田多輝子

大將にしたい男の作業服
どうしての小骨が咽にひっかかる
乾からびた心を癒すノクターン

松江市 三島 淞丘

値下りの話に耐えて稲を刈る
肩書を外して農にカムバック
不況風危機感のない党がある
人間のエゴがひしめく暮の町
はつきりと脈打つ生命たしかめる
風化した無縁仏に花手向け

東京都 清原悦子

皮剥きに始まる母のおもてなし

零れ種鳥の土産で咲いた花

路地裏を曲がってからが懐かしい

日捲りを二枚ちぎって旅帰り

泣く顔と笑う顔あり春の駅

道草で拾った知恵に助けられ

鳥取市 夏目一粹

一呼吸置いてみたけど同じこと

ふと会話途切れて見つめ合いました

心配があると芯から酔えませんが

わが頭脳オンを押したがオフのまま

欲ばかり溜まって間引きしています

幸せな時に不満はつるもの

高知市 小川てるみ

三寒四温うつらうつらの路の臺

ポケットの夢に発芽を促せる

頑張った今日を労る茜雲

人生の余白を埋める酒と詩
独りではないと悟った日の温さ
おおらかに生きて心の皺伸ばす
酒席では恵比寿に変わる鬼瓦
逢いたい人も避けたい人も同じバス
もういいかいまだだよと生きている

樫原市 居谷 真理子

一筆箋あなたにだけはこのインク

得をする時だけ女らしくなる

安全なところから渦を見て独り

不整脈祭り太鼓として生きる

失恋という神様の荒療治

不景気の世も白菜は太く巻く

和歌山市 武本 碧

アラフォーに負けずジョギングアラセブン

向い風吹くと張り切る天の邪鬼

猿芝居だったあの日の早とちり

神様の差し金らしい運不運

真っ直ぐな母を鏡にして生きる

誰にでもある未知数という明日

大阪市 榎 本 日 出

リストラは仕事人間遊ばせる
胡蝶蘭ひとりの部屋にありがた
人は人わたしの生き方は変えぬ
可も不可もなくてちつとも目立たない
こつそりと溜めてばあつと遣いたい
少し捨て最後はみんな捨てる服

豊中市 水 野 黒 兎

一月は少し長めに書く日記
短くて行間ばかり読む手紙
それからね ついでのように頼み事
その腕に抱かれた母を抱く介護
老々の介護に交差するくすり
木魚とは不思議な形ありがたや

川崎市 三 浦 き ぬ

古き良き貧しい昔なつかしむ
夢で会う亡母は丸髻人力車
軒先の日の丸消えた祝祭日
気が付けば亡母の年齢の倍も生き
なつかしい羽根つきの音も夢の中
ネジ巻けば故障知らずの掛け時計

三田市 堀 正 和

一年の灰汁抜きをする湯治宿
大寒に菜の花が咲くお湯の宿
釣船の音に目覚めて朝の風呂

バス待ちに足湯している女学生
漁り火もゆらゆら熱い砂の風呂
マグロからパワーを貰う砂の風呂

倉吉市 野 口 節 子

お仕着せの服にベットの泣き笑い
あれやこれスター気取りの試着室
木綿着て初心にかえる風の中
着崩れたところ無闇に色っぽい
人の世の浮沈ネオンは知りつくす
出来るだけ目立たぬように空気吸う

川西市 西 内 朋 月

棺桶に入るとばれた裏の顔
頭痛消えゆつくり時が流れ出す
外出に武装している花粉症
仏壇へスーパの花あげている
本物と信じ磨いている宝
平凡に見える人にもある魅力

大阪市 谷 口 義

ほどのよい男ほどよく来て帰る
追伸のあたりで音程がくるう
諦めが早く白菜漬けている
約束は忘れお互い様である
春の月見て見ぬ振りをしてくれる
黒の似合う人に一目置いている

松山市 高橋宏臣

高知県 小澤幸泉

ブラックユーモアだあれもいなくなる
人形でないから血圧も上がる
人様のご都合削除キーつくる
神様に背を向けていてお寒い
虹消えて男貧しい荷をおろす

松山市 宮尾みのり

ささやかに「まいど」へ拍手小市民
付き合ひの輪を大切にすることも歳
気配りをされたと後で思い知り
ひっそりと消えるシナリオ書いている
再会へうれしくもあり重くあり

大洲市 中居善信

羽目外すほどの余力はもう失せた
ぎりぎりで耐えているのは自尊心
古希過ぎてても幻ならばまだ追える
畑の隅でスマレが春を告げている
幸せですとエチゼンクラゲ言っている

西予市 黒田茂代

おどり食いちよつと野蛮でちよつと粋
うわの空でクラシック聞く齒科の椅子
自然体サブリメントに縁がない
当世の美学よ雨の日の蛇の目
雪滝花夢の吊り橋いい眺め

運のない人ねと云うて茶を入れる
ある余生ゲートボールを振り向かず
血の絆罪の深さをのぞき見る
トンネルを抜けた空には何も無い
長老という十字架に耐えて春

唐津市 井上勝視

視聴率だけが売りらし評論家
早口で他人を制する評論家
評論家唯我独尊無責任
聞く耳をどこに忘れた評論家
縄のれん次に來たのも評論家

唐津市 山口高明

昭和史の闇に隠れた負の遺産
禪をはいた我が家の頑固者
話の輪に入れてもらえぬ社長秘書
悪戯なお手々と妻につねられる
散々に焦らして返事つめた過ぎ

唐津市 坂本蜂朗

泥んこの児の服を剥ぐ母の笑み
皮肉だと気付かぬ振りをする笑顔
孫が出来ずーっと笑顔の散歩道
どっこいしょ膝もげらげら笑い出す
古稀を越え喜寿の笑顔の下絵描く

唐津市 市丸晴翠

シドニー 坂上のり子

賜杯獲り日本力士の出ぬ不安
親に似たつむじ曲りの孫が来る
自転車が重い体に悲鳴あげ
意気込みにクレームつける老いの脚
立つ位置で幸と不幸が入れ替る

熊本市 永田俊子

砂川市 大橋政良

毎日がありがたい附録の人生
それなりの幸せでいいかすみ草
失敗は私のスパイス手を抓る
毎日が片道切符ひとり旅
B面は欲が渦まく天下り

熊本県 高野宵草

黒石市 佐藤古拙

依らしめず教えてくれる医師に惚れ
春眠と言いつて出来る今朝の暖
植木市庭の狭さで諫められ
宝だと言えば孫等が顔見合う
わが庭を見直すカメラ雪花粧

熊本県 岩切康子

十和田市 阿部進

寒満月枯枝越しに對話する
世界の蘭多々の珍種を見て飽かず
頼まねば気付いてくれず淋しいね
過保護の脚マッサージされ鍛えらる
老化老化聞き捨てならぬ事多し

円高の直撃受ける柳誌代
世の中の汚れを直ぐに吸うメガネ
売り家をのぞき懐視かれる
ああ息子事あれば直ぐ飛んで来る
天才も人の子同じ悩み持ち
風の縄つむじを巻いてからみつく
点滴の数をかぞえている命
嘘つきのうその数だけ皺になる
コンパクト自嘲の声を聞き洩らす
鉛筆の削り方にもある個性
照れ臭いときは鼻かむおとこども
ヴィーナスの臍に張りつくおとこども
女房と母のはざ間でおとこども
人妻に滅法よわいおとこども
やせ蛙じつと見ているおとこなれ
心をつなぎ暮らしを守る老夫婦
時々夢を拾いに図書館へ
まぜ御飯作って孫に喜ばせ
ほろ酔いの母から洩れた祖母のぐち
若者の心が風邪をひきました

平川市 小寺花峯

ストレスも一緒に飲んだ熱燗で
旅に出る種播き少し後にする
還暦は一人の旅と熱燗と
グルメ嗜好舌より先に見る値段
ポケットの中では拳耐えられる

弘前市 須郷井蛙

様変わり店内迷う市場籠
ヒロシマの灰から生きた底力
ワンカップひとつで夫を飼育する
童謡になってしまった労働歌
新聞を見るのが怖い毒地獄

弘前市 櫻庭順風

吐くものがないのに何故か突き上げる
CTで癌とは言えぬ辛い医師
快い食事拒否している腫瘍
胆管に腫瘍があると曇る医師
悪いことしなくてもなる癌恨む

弘前市 相馬銀波

就農は自由で好きな土いじり
肩書きが取れて無欲なふりをする
ゆつくりと出来る事から折り返す
無駄話りんご一個で終れない
帳尻で妻存在感を誇張する

弘前市 今愁女

鶯の初鳴きを聞く春二月
岩木嶺の眩しく晴れて春立つ日
たしかなる春の鼓動よ川流る
少雪に児等かまぐらの夢は失せ
バレンタイン鳥の交わり始めとか

弘前市 富士慕情

地吹雪の中から見えた青い空
遠雷は神のお小言かも知れぬ
手品師はせつせと種を買い漁る
足湯から足を抜けないもどかしさ
余り物集めて老母の温い味

弘前市 岡本花匠

早春の英気呼び込む深呼吸
二月尽供花いきいき墓参り
早春譜味わうようにさくら餅
甘茶酌み極楽気分凡夫の譜
戻り雪太宰マントで散歩する

青森県 松山芳生

称えればちちはは妻に数珠軋む
春が来て猫が哲学してばかり
不器用な指が数えるばらの刺
残り香があしたへ繋ぐ夢つなぐ
中庸の精神壁を破れない

さいたま市 星 野 育 子

国分寺市 野 崎 勝

週一度安否確認されている

留守電を聞いて言い訳考える

宝石で満たされぬのも不幸せ

拳は暴力か愛か線引けぬ

抜け殻が眠り転けてる終電車

さいたま市 八 田 敏

老い独り一人の孫に夢をかけ

介護終え悠々の日々呆けの影

恋の字はまだ忘れずに八十路行く

ミニ盆栽梅木瓜健気春の歌

わが余生花川柳で括りたい

日高市 根 岸 方 子

富士山を拝むと会話走り出す

減量の秘訣を友が騒ぎ立て

前世は蟻かと思う日々暮らし

とまらない咳が真実聞きたがる

鬼の顔覗く女のマスゲーム

八王子市 播 本 充 子

ドキドキワクワクうな重の蓋を取る

イライラが生キヤラメルに溶かされる

もう少しマシなお連れもいたろうに

壇上の花もリースにしましょうか

花畑ママが迷子になりました

古稀近し遊び心はなお盛ん

何年もベッドの老母は四季知らず

年金に生きて不況も関知せず

良き父であったか鏡じつと見る

部屋整理古い写真に滞り

武蔵野市 亀 井 円 女

曾孫が来ると婆さんのうれし泣き

お八つもうまいご飯もうまいえらいこつちゃ

初曾孫ランドセルまで持つやろか

卒寿ならまだお若いと百の方

卒寿そこ命の重さいとしさよ

東京都 岸 野 あやめ

やみくもな政治これでも法治国

浪費するモノが溢れて空曇る

六本木凝ったメイクが競い合う

喪服着た老女グループ姦しい

ですよねえだけで難題から逃げる

横浜市 菊 地 政 勝

選挙前漢字の試験やらせたい

レブリカと見る癖がある絵画展

指しゃぶり終った頃に反抗期

揺さ振りをかけ息切れを待っている

まがい物目利きの網を擦り抜ける

横浜市 小野 句多留

公園を横切る朝の息遣い

横審が朝青龍に耐えている

開店のチラシに出向く無料バス

賀状来ず訃報が届く案の定

ジャンケンで決めたら如何給付金

静岡県 蘭 田 獭 杓

良い人と出合い明るい娘に変わり

番号で呼ばれ素気のない返事

愛嬌の良さで朝から店が混む

水底が手に取るように箱めがね

郷土料理噂通りとほめて出る

富山市 島 ひかる

品格を問われて酔えぬ花の宴

火の恩を忘れたことのない暮らし

しみじみと心にしみる父の書架

人格も磨かれてゆく人の世話

人格が疑われてる言葉尻

大山市 吉 田 幸 子

待望の蕾が冬を忘れさせ

お節介深い絆の盾に遭い

ご近所の店真心がビーンとくる

A T Mとまどう私認知症

喫茶店閉まり行き場のないニュース

大山市 金子 美千代

肩書は世帯主なり肩の凝り

夫には酷だと思ふ独りの灯

政治屋の舌は何枚あるのやら

型替わりする機種だらう値引戦

水墨に色を感じる春の額

大山市 関 本 かつ子

孫の目が次のページを待っている

見た目よりおんぶをすれば空く両手

迷わずに息子のチョコは高い方

お見舞のノック折りを込めた音

この人も失業だろか不精ひげ

可児市 板 山 まみ子

しまったとうっかりのない日はあるか

パリは良いパリに行きたいパリに行く

好奇心詰めて出かける旅カバン

言訳の台詞は三種どれ使お

言い訳をすればすむほど甘くない

愛知県 早 川 遯 行

肝臓を欺し欺してきた酒量

円高の今がチャンスのパスポート

喧嘩しながらも楽しそうな夫婦

年金がいのちの支えとは寂し

作戦の一つに赤いバラを買う

京都市 三宅満子

長岡京市 山田葉子

真相を知らず謝まる社のトップ
二日酔いなんだか街が回ってる
値切ってる妻と他人の顔をする
給付金ランドセルには間に合わぬ
割り込んだ座席なんだか棘がある

京都市 榎本宏子

きついこと優しい顔で言う介護
ひとひらがこの世のわたし万華鏡
少しなら波風あつて出るファイト
見送りに栄転らしい妻の顔
パツと散る桜はきつと聞き上手

京都市 坪井孝一

無遠慮に踏み込んで来る誕生日
平行線妥協めがけて寄りたがる
お賽銭天井目掛け投げている
父だけが我慢をすればいい家庭
プレスリー聞いて昔を呼んでいる

岡岡市 井上森生

七十二歳生きてシニアの国つくり
ゆったりと歩けば富士も屋久島も(一念発起)
是非見たい大島椿に河津の桜
水垢離を二年で喘息追ひ払う(心願成就)
意欲ある限り脳みそ減らぬだろ

ニラメツコあなたとするの駄目みたい
困ったら鍋かおでんにしてしまふ
もしもの時は多分じたばたするだろう
指切りをしたのは遠い恋ごころ
勝負服着て雑踏に紛れこむ

大阪市 川端一步

武器とペンどちらを選ぶ多喜二の忌
子の笑顔国境線はどこもない
春や春好きなことばにわかみどり
替りばんこ こんないことあつたんだ
大阪の水が綺麗なころ生まれ

大阪市 西川更紗

信念を貫く心宝もの
歳月が心の傷を忘れさせ
悔いのない今日一日に感謝する
不景気に負けたらあかん気合いれ
いい目覚め昨日のうつが嘘のよう

大阪市 川原章久

核家族遺産分けには皆揃う
よく笑う母が我が家の真柱
ゆったりと癌と戦い生きてます
笑点の司会急病ギブアップ
何もかも全部話せる妻だから

大阪市 坂 裕之

妹が泣くと兄ちゃん叱られる
氣持ちよく目が覚めた日はきつとい
うちの子は元氣ばっかり褒められる
爺ちゃんが好きと逃げ場を確保する
氣遣った明るさの裏見え隠れ

大阪市 田 浦 實

ほどほどの嘘はかえって良い業
サブプライム金転がしの虚業技
限界など判らないから夢追えた
ママチャリについて道譲り散歩する
汽車の窓闇夜の黒を深くする

大阪市 平 嶋 美智子

百までも生きたいなんて勝手かな
そのわけを知るのは怖いので触れぬ
冬眠しマンネリ化から逃げたいな
ほろ酔いにうれしい月のストーリー
旅ごころ故郷の野山先ずうかぶ

大阪市 津 守 なぎさ

屋久杉のハガキ舞い込む病あけ
旧友と行く温泉で氣を貰う
ふきのとう今年も探す観心寺
歩く事食べられること感謝する
朝寝坊叱るつもりか時鳥

大阪市 大 川 桃 花

春風に誘われ覗く秘宝展
アナログと隅っこに書き迫る国
ロマン追う男は歳を考えぬ
事故米と知らずごめんね仏様
アツという顔で止った電池切れ

大阪市 岩 崎 公 誠

金と欲まみれて嘘も捏ねあげる
益川さん英語嫌いで人気呼び
百年目行け行けどんの総崩れ
難問は袋に詰めてゴミに捨て
くたくたに疲れた夜は熱い酒

大阪市 江 島 谷 勝 弘

お小遣いずっと寒さに耐えている
真面目すぎ遅刻の夢でもがいてる
ごまかさず一途に動く時計たち
カニとふぐとうとう食べず冬終る
こんな世に儲け話がありますか

大阪市 森 田 明 子

懷に眠る悪意を追い出せず
懷に入れると褪せる青い鳥
野良ネコの消息などを思う冷え
婦省子がタイムスリップさせる膳
夫も子も師も友も居てなお孤独

大阪市 近藤 正

ストレスを酒でうすめる花の宴
混迷を開く一手は総選挙
留保金貯めて首切る大企業
ソマリヤへ官費使つて自衛隊
香典は辞退しますに胸をなで

大阪市 小谷 集 一

甘いこと妻に言われた事がない
ナツメロを歌う仲間に同じ過去
閃かぬ脳に頑固が顔を出す
ささやかなイベント妻の古稀祝う
パソコンの麻雀今日の運試し

大阪市 中村 れんげ

手中の娘花婿と言う人さらい
草笛が吹けず仲間をはずされる
消える身を風と遊んだしやぼん玉
夕日あび水面のお堂ゆれ動く
法話する坊の悩みを聞いてやる

大阪市 中村 叡子

お願いと先ず仏壇に祈る日日
しつとりと秋元順子ひとりきく
オバマ氏もスーパーマンは望めまい
結婚に魅力を持たぬアラフォーよ
長寿者が殖えて不思議な国となり

大阪市 岩崎 玲子

つらい日は酒を呷って今日忘れ
酒呑むと声も笑顔も倍になり
呑み過ぎの反省だけはすぐ忘れ
ストレスを酒に包んで溶かしゆく
正直に嘘もホントも流し込む

大阪市 小泉 ひさ乃

ときめきを追いかけている春帽子
努力する汗には風が味方する
子は宝どの子も光るものを秘め
子には子の人生あつて親ばなれ
歯を削る音口あけて聞く入歯

大阪市 松尾 柳右子

大掃除済ませた手にはクリームを
娘の電話今日は一日良い日だよ
思い出の写真見入つて留守の日よ
鼻風邪に外出ひかえ作句する
晴天にどつさり洗濯時間食い

大阪市 津村 志華子

母さんの話はいつも道を逸れ
神さまに勝手な頼み申し上げ
腹の虫抑えてるのにコルセット
ひとりぼち温もり貰う貼るカイロ
焦らずに歩くと杖が言うてはる

大阪市 伏見雅明

親の愛にとつぷり浸りまだ独り
奉加帳夫の見栄を目で抑え
ブロックサイン何の合図かつい忘れ
あれこれと世話焼きすぎて疎まれる
流ちような日本語喋る高い鼻

大阪市 榎本舞夢

福もらう顔顔顔の初詣で
戦火の地子等の瞳は未来見る
反省はしてまずけれどすぐ忘れ
変ろうとしても中なか変れない
やさしさにふれて力が湧いて来る

大阪市 古今堂蕉子

感動の景色絵心詩心なし
雨風に弱い家族のようらしい
バンザイは嫌いだなんとなく不穩
晴雨兼用八方美人みたいだな
冷たさに他人だったと夫見る

大阪市 原田すみ子

寂しいと深爪をする癖がある
言葉の森深くていつも迷つてる
渡る世間鬼も仏も人の顔
未来まで取越苦労してる母
また二人若い二人じゃないけれど

大阪市 升成好

半分の味を知らない一人っ子
カタカナ語溢れて日本語の未来
捕手が出す指一本がドラマ生む
座を制す一言居士の咳払い
空駆ける少年になるゴム風船

大阪市 澤田定子

披露宴仲人さんのうまい嘘
高いビル府庁なると見上げてる
日の丸のただ一旗見る建国日
温暖化不安も凍てぬ冬がよい
抽籤機ころがる玉は白ばかり

大阪市 奥村五月

銭湯で裸で和むお付合い
山ほどの苦労した母あの笑顔
営業で笑顔家では仁王様
会社より父は忙しい台所
雑草もいつかいつかの夢を抱く

大阪市 川久保睦子

ゆつくりとわたしにもどる露天風呂
人間の何とみごとな裏表
ほめ言葉ときどき人を狂わせる
三途の川見た気がします手術台
ぴつたりと風の止まったガン告知

大阪市 小糸昭子

大阪狭山市 矢野 梓

オバマさんホワイトハウス塗り変える

二兆円自腹のように撒く首相

杖ついで銭湯へ行くおしゃべりに

国会の右往左往が恥かしい

クラスターに脅えてるのは子の瞳

大阪市 岡本久峰

なにがなんでも生きよと遠く母の声

シベリアの寒さ骨まで凍りつく

凍りつく仏を土間に積み上げた

竹島を奪い対馬に手をのばす

棒読みで味もそっけもない総理

大阪市 熊代菜月

テレビ見て一人で笑うことに馴れ

知りながら騙されておく思いやり

見上げれば八十路の坂がそこにある

博識の友が主役の旅日記

寒い夜人恋しさに持つ受話器

大阪市 伊藤博仁

はやばやと漏れた内緒に舌を巻く

連れの手が欲しい背中に貼る薬

丸四角掃ける箒は手放せぬ

膝の児がクレームつける読み違い

ギョウザ食べ寝たふりをするバスの中

野仏が寄り添うように春を待つ

冬眠の私を誘う梅だより

好きなものてんこ盛りするバイキング

食べるだけ食べてカロリー気にかかり

いざベンを持つと頭が空になる

和泉市 西岡洛 醉

息災の一病胸に仕舞い込み

終電車そんな昔も有りました

老いふたり真面目に生きる四帖半

寒椿冬の温さにひとつ落ち

足元の油断に老いがけつまずき

和泉市 横山捷也

几帳面に片付けたのに物探し

良い人になりますと言う二十の日

花の名を一つ覚えた万歩計

横文字のカルテ何かが隠れてる

ごみ一つない子供部屋恐ろしい

泉佐野市 山本蛙城

仁王さん力みつづけてしんどから

聞き上手顔一杯が感嘆詞

逆チョコの噂ことしのバレンタイン

温泉の気分で二度も浸かる風呂

花粉どきのど飴店に目立つとき

茨木市 藤井正雄

よそ見して涙拭く間を待っている

大型店出来て流れの変わる駅

狙った椅子若いのが先座る

身に覚えあるので寡黙通してる

搭乗がはじまる一人まだ来ない

池田市 栗田久子

亡くなればみな善人にしてしまう

年齢を昭和に戻し確かめる

ごくまれに思い出されるだけでよい

値引き分ちゃんと元値があげてある

嘘きらいすみれは澄んだ色で咲く

交野市 森本弘風

福は内今年も閻魔来ぬように

スーパ一の巻寿司の山潰れた日

義理チョコも諦めてない七十五

中吊りも歯抜けになっっている不況

吊り橋でひさびさ夫の手の温み

交野市 山川日出子

里帰り未だそのままに亡母の部屋

露天風呂どつぷり浸かり浪花節

郵政も波瀾万丈かんぽ宿

盆の唄ひっぱりだこのお爺さん

電燈のカバーはずした終戦日

河内長野市 黒岩靖博

バブル期に手を伸ばし過ぎツケが来た

リストラで初の解雇は派遣工

携帯を持てば家内の監視の眼

初恋は胸にしまった青春譜

思い出の茶碗が割れて修理する

河内長野市 水谷正子

戦中派蘭よりさくらナンバーワン

夜ざくらに特攻隊の叫び聞く

脳梗塞合図を決めておく夫婦

犬散歩急いでるのに抵抗す

チューリップ二十芽を出し見られそう

河内長野市 坂上淳司

編集子の気骨を綴る囲み記事

㊦が判れば後期高齢者

冬眠用貸穴あると周旋屋

受験期の孫にお百度踏むばかり

ハリーアップ拉致家族には後がない

河内長野市 村上直樹

桜鯛はねて早くも瀬戸は春

生きているサインにどんと開ける窓

逆転のチャンスたつぷりロスタイム

ダイエツト懷ばかり瘦せてくる

金運はないがたつぷり人の運

河内長野市 植村喜代

みな中流といった頃もあつたつけ
その内に神も仏も顔を出す
いつからか怒る顔しか見なくなり
美味く出来たと思つたのに皆残し
不景氣も戦争よりはガマン出来

河内長野市 井上喜醉

飲めぬのに覗いて見たい縄のれん
風に舞う総理は椅子にくらいつき
年金の重荷を背負う長寿国
不況でもロボットだけは知らぬ顔
こりもせず今年も家はトラファン

岸和田市 米富淳風

病み上り何氣無い日も光つて
朝寝坊一日全てずれてくる
付き合いに固い頭が邪魔をする
困つたら神も仏も手繰り寄せ
要らぬ日に不意に出てくる捜し物

岸和田市 原 さよ子

回復の氣力主治医を驚かせ
そばに在るだけで満ちてる老夫婦
帰省して心配だけをおいていく
一言の詫びが言えずに寝つかれず
旧道に折れて馴染みの顔に会う

岸和田市 堤 植代

お手柄のように見せ合う手術跡
話し合うほどに美味しい人の味
好奇心まんまんでまだおとろえず
麻酔され誇りもなにもすてました
ハクションを持って行く場所ありません

岸和田市 林 力子

総理の座がたがた揺れる春の陣
バンザイを何度唱えた戦時中
アイデアをざくざく脳が掘りおこす
大袈裟に咳きこむ妻にタバコ消す
大波も小波も越えて金婚譜

岸和田市 土橋房枝

四月馬鹿あとで笑える嘘ならば
春なのにマスクはずせぬ花粉症
節分に孫を豆まき派遣する
花冷えに持病の一つ起きてくる
故郷の訛飛び交うクラス会

岸和田市 井伊東吉

樹木みなエネルギー溜め春を待つ
列島の自然を冒す外来種
老いの身も軽くて温いダウン着る
平和な日暮れて雨戸の閉まる音
四人目の総理候補に苦慮の党

岸和田市 岩佐 ダン吉

輪を出よう微温湯嫌う僕になる
輕輕に壁だと言わないでほしい
プラスだけ見よう笑顔を絶やすまい
一点を見つめ大勢気にしない
とりあえず進むそれから考える

岸和田市 森元 ふみよ

たいがいのは事は許せる域に入り
永田町オバマ人気に腰抜かす
かあちゃんが六十路の僕にお年玉
すがり付く炬燵振り切りキッチンへ
寒行や托鉢僧の白い指

堺市 和田 つづや

円満と思う繕いあつてゐる
入れ歯には酷な恵方の丸かじり
世をすねてしまう心のほつかぶり
薬指夫に魔除けつけさせる
曇天は殊に尾を引く愛の綾

堺市 近藤 豊子

雨靴のなかまでぬれた水たまり
手をはなされ夢中で蹴った大阪湾
海賊はホテルのような船を拉致
はるかなり富士のお山の春景色
皇后さまマンマ・ミーアへほほ笑まれ

堺市 奥 時雄

紹介のヨイショが過ぎてやり辛い
票ゆえに政治は民に媚を売る
能面の口からよどみない虚言
一線を越えさせるよう仕向けられ
愉快な日時計見ぬまに夜が更ける

堺市 齋藤 さくら

そこまでは頼んでないが断われず
郵政を問うた選挙でなかったか
大臣の言葉に重み感じない
うば車押して爺ちゃん顔になり
大根が何よりうまい齢なり

堺市 村上 玄也

娘等よ笑顔に勝る化粧なし
酒止めと言われた医者に変える父
嫁はんが恐いんかいと酒注がれ
お慕いをしてたと五十年経つて
大阪のおばちゃんオマケには弱い

堺市 西村 りつえ

福は内心の隅の鬼は出ず
春最中不景氣飛ばす馬鹿話
恋に浮き見損なつた金遣い
引き寄せた運を詰めとく玉手箱
小吉も努力重ねて大吉に

堺市 矢倉五月

断りはちよつと間をおき笑顔添え
飛ぶように売れる噂の二三日
顔を見て生年月日念押され
花水木芽吹き自転車出番増え
年自覚しだして忘れ物が減る

堺市 荻野像山

悲しんでなんかしてない貰い泣き
我慢して聞けばリズムの良い軒
還暦で出来た子宝抱き歩き
流感へうがい手洗い欠かさない
浮気とは若さを保つ秘訣とや

堺市 大久保のん子

一言に人の心の裏を知る
音たてて返らぬ時が過ぎてゆく
笑顔とはうらはらきつい目がにらむ
百八十度違った人とまだ夫婦
カタカナ語時代おくれを嘆われる

堺市 源田八千代

2が並ぶ父の命日こびりつき
冬籠り早寝遅起きエコライフ
年寄を梅見に誘う値引きバス
本命も義理も無いけどチョコ配る
新年度受験子二人正念場

堺市 山本半銭

赤鬼と青鬼いつもベアを組み
風袋子鬼の手には余りそう
子を背負う鬼何処と無うかなしげな
高齢の鬼には福の豆あげる
政権が代れば世間変るかな

四條畷市 吉岡修

老人会言うから行かぬ名が好かん
円周率ゆとり教育みんなミス
拗ねてたら幸せのベル聞きもらす
あの世へも迷ったままの顔でゆく
踊り食い純国産に限りた

吹田市 木下敏子

ユーモアが途切れて温い茶を入れる
点と線ゆつくり結び春隣
合す手の皺語り出す立志伝
友垣に包まれホッと深い息
香煙を立てて仏に語りかけ

吹田市 瀬戸まさよ

窓の雪アダムになって歌います
ほえんでダンスするのは古稀と喜寿
子守唄歌い継がれて楽譜無し
コンサート帰りの足はリズムカル
マンマ・ミーア活力もらう中高年

吹田市 山 本 希久子

高石市 浅 野 房 子

春ですな青い地球と戯れる
ころざし捨ててはならぬ石を積み
魂が浮遊している春の海
検査クリア目の前の霧はれる
ワンタッチボタンに頼り過ぎている

吹田市 須 磨 活 恵

うきうきと夢追いかける女偏
余生とや余白を埋める春の旅
何事もくよくよすれば負けになる
石一ツ蹴ったところで晴れぬ憂さ
若牛蒡ほろりと苦い春の味

吹田市 野 下 之 男

色だけで区別をしない鷹揚さ
病院で病気を貰う運もある
黒幕が居るからこの世面白
水割りの手軽な夜が待っている
意地悪なカラスに今朝も起こされる

吹田市 太 田 昭

本心を隠し小さな嘘をつく
爆発の心底かくす薄笑い
人間の朽ちる気配のする地球
空白を埋めた笑顔が白け出す
人間を無利子でばいと放り出す

八十路坂孤独と暇を持て余す
所在なさひねもすうつらうつらする
話しても聞き流されるだけのこと
生きている証ストレス溜めている
マネキンが着てこそ似合う服なのだ

高槻市 執 行 稲 子

ライラック囲い込めて香り立つ
口臭に聞かぬ振りしてそっぽ向く
駐車場人轢いたとは露知らず
リストにはあるはずの人雲隠れ
餌やれぬ老婆を差別するベツト

高槻市 峯 村 勲 弘

しんみりと聴いた説教すぐ忘れ
愛の鞭罪にならないほど止め
ださいとは言えず渋いとほめておく
叩きます髪の毛生えて増えるなら
今が旬過去に未練はありません

高槻市 乙 倉 武 史

意気軒昂まいど一号見習わん
日の丸を背負う器か云々され
漢字ブーム首相一役貢献す
罰当り仏像盗む輩おり
長生きの虫より願ひポツクリ死

高槻市 指宿 千枝子

高槻市 富田 美義

飛んで飛んでタンポポの旅始まるぞ
足とめて湖を見渡す浮御堂

比良山を後に前に橋渡る

菜の花や比良のお山は雪帽子

カサブランカより野に咲く百合がいい

高槻市 杉本 義昭

春風が頬を撫でたら旅に出る

スーパで会いたくもない人に会い

一人住む母から届くつるし柿

別れたりしないと家もリフォームす

ここだけの話が続く梯子酒

高槻市 生田 義一

表情が祖父に似て来た総理殿

やんちゃくれまさかまさかの賜杯抱く

役力士皆外人の場所来そう

きな臭い話膨らむ同期会

高齢者増えた増えたと邪魔にされ

高槻市 井上 照子

春を待つ孫の挙式の日を数え

舌を噛むような名の花買ってくる

漫画本ひげの男が学んでる

澄む瞳偽りのない園児群れ

それなりに色よく老いる心がけ

鉛筆を転がし答え確かめる

閃きを力に変えて運を呼ぶ

臍の緒を切った時から天の邪鬼

白指に止まってからの男運

散骨に夢の名残りも舞い納め

高槻市 佐甲 昭二

初対面の人に仮面を脱がされる

友情の証相槌打っておく

志揺れて抜け穴掘っている

旅支度葉袋を確かめる

古めかしいファッション亡母の形見分け

高槻市 安田 忠子

歳かくしエトはパンダと言っておく

盲腸の手術だったと母に言う

骨折の手術がまんのお正月

手術室片手あずけて一時間

骨折の骨にしみいる寒の入り

高槻市 左右田 泰雄

いずれまた近いうちにと消えた人

小さくして入歯をかばうきなこ餅

どことなく風格のある枯れた文字

特急がとまらぬ駅にある平和

チャンス来るまではじっくり低姿勢

豊中市 藤井則彦

几帳面過ぎてだんだん友が去り
日の丸をちゃんと描けない日本人
折角の閃き消した大くしゃみ
旗色が悪くなるまで澄まし顔
裏声で呼ばれて脈が狂い出し

豊中市 山門タミ

今日もまたあなたまかせの不自由さ
おさそいを受けても難儀な籠の鳥
耐える事口で言うほど楽じゃない
就職へみな東京へ出てしまふ
減食へ間食余計に食べている

豊中市 松尾美智代

ひっそりと集つて咲く枇杷の花
大根がおいしくなつて寒の入り
庭木にも寒肥を入れて春を待つ
炬燵から見てるニュースは派遣切り
二月にはチョコ一色の菓子売場

豊中市 江見見清

大空の風もいずれは帰らねば
お喋りが途切れて寒いねと別れ
十年も最後の花見出来た亡母
診察券預かりますと妻が言い
エンディングノート書いてと急かされる

富田林市 中井アキ

大豆煮る幸せもあり冬籠り
子に残す地図はキツパリ白いまま
ヘルベスを楯に連日怠けてる
不況にも結構強い昭和の子
負けないように笑い袋を持つている

富田林市 片岡智恵子

免状を確かめながら食べるふぐ
忙がしさこぼして続く長電話
地下街の出口ここだと風が呼ぶ
公園のベンチ嫌煙権言わず
汗で得たお金崩れる事はない

富田林市 大橋鐘造

福の神留守の我が家の戸を叩く
目を閉じて闇に心を遊ばせる
如月の月に魂奪われる
好き嫌い無くて淋しい味音痴
雪吊りの縄に任せて春を待つ

寝屋川市 森茜

アルバムにうす墨色の恋がある
寒椿さらり紅ちり敷いて
少欲知足さらりと老いを楽しまん
モンローウオークしてヒルトンのロビー抜け
蠟梅の香に待ちぼうけまた楽し

寢屋川市 太田 とし子

大相撲お色気無視の白と黒
不況にはお色直しの赤を着る
青みどり雨が振り向く傘をさす
白生地のままであなたの腕の中
幾度か戦禍くぐった銀の杖

寢屋川市 富山 ルイ子

竜馬がゆく国思う志士あまた死す
誕生日独りホテルでバイキング
若者の食欲に目を丸くする
黄砂とぶいよいよ春のドラマあく
如月に早や豌豆の花が咲く

寢屋川市 平松 かすみ

真剣な顔が並んだ申告日
時間給ほどの還付へ小半日
バカみたい損を申告しています
一言がこんなに重い一ヶ月
春ですね恋の噂に花が咲く

寢屋川市 森田 麗

マジシャンの正体指の先にあり
美容室は催眠術によくかかる
こだわりの糠床母の手を離れ
亡夫の手帳詰めた哲学子に届き
冬眠を揺るがす春のメール来る

寢屋川市 籠島 恵子

こだわりで買ったお鍋が重くなる
お湯割りの焼酎芯を無くしている
ああ言えばこう言う人と呑んでいる
外出を忘れてゴボウ洗っている
出刃包丁狂った時をふと思う

羽曳野市 吉川 寿美

横文字の溢れる街で立ちくらみ
わたしより先に老いるな影法師
単細胞裏も表もないわたし
B面の顔が案外受けている
手数料おかまいなしの給付金

羽曳野市 徳山 みつこ

もう春ですと沈丁花囁いた
オバマ演説また色褪せる永田町
シャッター通りお国も目下休業中
地震よりバッジ働かない怖さ
普通にくらし監視カメラは怖くない

羽曳野市 三好 専平

夫婦でもお前と呼べぬ風が吹き
四字熟語世相の裏をちよいと撫で
かぎりなく石丸くなる冬の海
輝の手をそつと隠して鯛を食い
介護費を食いものにする獣たち

羽曳野市 安芸田 泰子

金ためて地獄の沙汰を待つている

親離れ子離れ春は騒しい

潮時を逃せば溝が埋められぬ

家中を起して見せる庭の雪

帰省子を迎える陽を吸うた布団

羽曳野市 酒井 一壺

草のないビルの谷間に虫の声

悔んでも後の祭りの保証印

楽をした報いへところん絞られる

今宵また憂さを忘れるジャズダンス

身勝手な祈りへ神もそっぽ向き

羽曳野市 吉村 久仁雄

失業の列にことさら虎落笛

ゆかしさの奥には祖母のモガが見え

同じ空気吸って天地の格差つく

嘘に嘘重ねて論理癖がつく

非戦論まだ人間でいたいから

羽曳野市 永田 章司

甘い声気を付けない金が要る

訳有りをうすうす知って距離をおき

行きづまりチェンジの旗を立てる人

マニフェスト理想の国家書いてある

松明の火の粉をあびて福招く

東大阪市 佐々木 満作

甘い罠に嵌まり出世棒にふる

寄り添うて風雪耐えて共に古希

冬の章ポイントセチアに癒される

理不尽に巡り遭わないよう祈り

物価高大事に使う諭吉さん

東大阪市 北村 賢子

一際光る星へ願いを込めている

何はなくとも身を寄せ合ったうさぎ小屋

無心にメイクする子へ人の眼が囲む

誰か居るだけでなんだかあったかい

マンネリの顔つきあわせ恙無し

東大阪市 久米 奈良子

思い出は箸紙に書く父の筆

鶴ことば判るほどにも鶴を折り

往診の医師はめ給う青畳

湯上りの幸を賜わる肌のいろ

両の手の爪を自分でつめる幸

東大阪市 笠井 欣子

雛人形買うたのしみを娘がくれる

壊れゆく母を宝とそっと抱き

お芋から目がはなせないどんど焼

内定の願い空しい靴の紐

ふと受話器もう友達につながらず

東大阪市 米田水昇

空が好き雲が好き深呼吸する

おしゃれして老いを返上街に出る

握手した手のぬくもりは生き続け

長生きしますます手腕見せる人

風向きはどう変わるのかオバマさん

枚方市 二宮山久

たかが散歩つづける事のむずかしさ

たかが趣味なれど六十路の血がさわぐ

生きている証扼右手が病んでいる

いつもとはちがうルート of 散歩道

旅にでるマップ作りに胸おどる

枚方市 小林わこ

光に風に春がさらさら透きとおる

深よみをし過ぎて蛙池に落ち

鉛筆に深い想いをたぎらせる

ひと言が深いところに渦巻いて

父と子の絆深めるセットプレー

枚方市 寺川弘一

お仕着せの誓詞読んでるウエディング

妻が留守全神経が弛緩する

美しく撮れた写真はよいカメラ

活け造り鯛に合掌したくなる

神主も神さまを見たことがない

枚方市 伊達郁夫

背伸びして庇った母の避雷針

微力でも差し出す片手空けておく

譲られた席に温もり置いてある

先輩に若いと言われ跳ねる古希

後期です絵の具の色を変えてみる

枚方市 安達忠央

横綱に日本人待つ国技館

よどみない選手宣誓見てる母

路地裏も情の温みで冬を越し

人の裏見すかす眼鏡欲しくなる

減多には褒めない人が褒めた裏

枚方市 海老池洋

地方の酒混ざっていても灘の酒

多数決よい決定と限らない

下取りのきかぬ夫を持て余し

長丁場気合入れたり緩めたり

横綱期待どんぶり王子豪栄道

枚方市 森本節子

恢復期春まだ遠い道歩く

デイサービス異なる世界を体験す

結構すぎ今日も退屈して帰る

福豆をつまみ出したらきりがいい

誕生日ひ孫一緒に祝ってくれ

藤井寺市 若松雅枝

一ランク下げて妥協の道探る
春風に誘い出された万歩計
登りより降りに泣いた膝頭
幸せだ真っ直ぐ帰る家がある
面談の前に心の準備する

藤井寺市 俣野登志子

寒い朝お腹空くまで寝ていた
ごまを播る鉢に手伝うちっちゃな手
騙す前に笑ってしまふ四月馬鹿
孫という生き甲斐できてから達者
お久し振り整形したのとも聞けず

藤井寺市 太田扶美代

梅が咲いたら桃色が着たくなる
大阪弁油断できないアクセント
納豆が離れたくない糸を引く
封筒に溜息だけを入れました
マフラーは冬の淋しさごとく包む

藤井寺市 高田美代子

阿呆やなあそないに急いで死なんから
年賀状切手が四枚ほどの福
春場所へ幟ちらほら立ちあがり
追いついて行くのは黄砂杉花粉
好きですと何処にも書いてないノート

藤井寺市 鈴木いさお

醜男よ嘆くな蓼食う虫もいる
隔離され肩寄せ合って吸う煙草
いい夢は妻へ半分お裾分け
ドジじゃない優しさ少し過ぎただけ
ええとこの奥様たこ焼きは食べぬ

箕面市 広島巴子

亀のようそのそ動くランドセル
日本語がきちんとできて花まるに
初恋になるかも知れぬ手をつなぐ
思い馳せタイムトラベル飛鳥の地
春めいて友とべちゃくちやウオーキング

箕面市 出口セツ子

逆チョコに高級品を指定する
同い年の葬儀で明日を考える
ほほ笑みへ笑みが返ってくる温み
結婚もして欲し側にも居て欲しい
輪の外に一人居る子が愛おしい

守口市 井上桂作

アメリカは世界連鎖の火付け役
黙認が米の経済破綻さす
恐慌は苦い歴史の教訓に
喫煙所気がねしないでうまそうに
根回しも知らぬ孤独な人でした

八尾市 宮崎 シマ子

認知の母と居るブランコは動かない
どっちにも取れる言葉で母諭す
母さんのサブリメントで運もらう
わざわざでないと母さん看に行けぬ
祈るたび母はますます小さくなる

八尾市 笹倉 ひろし

合図したように一斉派遣切り
風の子の染みがあちこち校舎跡
白日に己を干して灰汁を抜く
激流に取り残される老い二人
まいど一号余興とちがう真剣や

八尾市 村上 ミツ子

暦の上の春に誘われ旅に出る
不況風エコと吞気で遣り過ぐす
やわらかな言葉へ無下に断れず
文句言うだけの客にも微笑みを
運転は出来ぬ二輪も四輪も

八尾市 吉村 一風

茶柱が立つとひとりで笑つてる
天と地に命まかすに見得をきる
煩惱をなだめるようにひとり言
明日の予定見ながら今日をちゃんと生き
長生きはやっぱり笑いからもう

八尾市 高杉 千歩

真実を書く鉛筆はすぐ折れる
診察券専用カード入れを買い
ちちははの加護ちちははの歳を越え
或る日ふと昭和に還る籠の鳥
方向音痴正しい地図でまだ迷い

大阪府 野田 栄呼

春風に揺らぐ梢がまく花粉
エコ僅か自室ストーブ封じ込め
新聞を喜々音読し脳トレへ
不況時はエコが活躍する好機
道州制切磋琢磨し悠久へ

大阪府 澤田 和重

詰め放題おんなの根性みてしまふ
ずる休み電話に咳を絡ませる
立ち寄った家に見知らぬ人が住む
あなたの愛逃げないようにラッピング
母さんが慰め役で子に好かれ

大阪府 桑田 ゆきの

世を拗ねて巷の風を受け流す
メルヘンの風に彩つけ子に添い寝
神様にそっば向かれた願い事
地域学転がり出たる文化財
妻の腰妙なくねりのフラダンス

大阪府 米澤 俣子

限りある時間楽しいいろで描く

晩学に火を足しながら燃やす日日

押しくらまんじゅう押し出されてから無職

近隣の動きがわかる犬の声

初午のお稲荷さんが混んでいる

大阪府 初山 隆盛

春闘の名と実 春の語り草

大寒を越せば聴こえる春の脈

老いぼつん春の足音聴いている

枯らさないいのちへせつせ水をやる

弥陀の掌に一途にすぎる遍路行

神戸市 山田 婦美子

ありがとうの言葉のもっている絆

荒れた手を見られないようお茶を注ぐ

ごめんねと言えず今夜も寝てしまう

生かされていること知った古希の坂

夢乗せて小さな切手旅をする

神戸市 山口 美穂

生きてます今を知らせるEメール

オレオレの電話がかかるあてがない

物忘れ笑うてすまぬ明日かも

あんな夢こんな夢みな遠うなり

笑い皺思うて笑顔絶やさない

神戸市 木村 貴代子

年玉も食費に化する母子家庭

貧しさと非行循環加速して

鼠小僧永田町にも出てほしい

幸せをベットに頼り老い一人

ユニクロが浮いてデパート沈みゆく

神戸市 伊勢田 毅

単身赴任レシピの本を積んでいる

水面下影武者が待つ総選挙

小雪舞う梅より矢張り酒がよい

添いとげる人とのんびり梅の下

花粉症耐えねばならぬセレモニ

神戸市 両川 無限

冬眠の大地起こしてゆく新芽

水仙の鼓動が冬を割って出る

友達に囲まれている丸い鼻

水を買う暮しに夢が失せてくる

言い訳が過ぎて墓穴を掘っている

神戸市 田中 章子

オリオンを直線で追う露天風呂

追い風を下さい少し変わりたい

テイクオフ楽しむ雲の下と上

天地人恵みを受けて生きている

一つ角間違えたから会えた友

神戸市 山口 光久

尼崎市 林 昭三

潮時を見損なつて慌て者

一呼吸おけば人生変わるのに

変人がどでかい事を遣り遂げる

善悪を聞き分けている耳二つ

骨抜きにされたい人が出来ました

相生市 中塚 礎石

水泡のように消したい過去もあり

耐えることばかりを強いる冬の章

頑張れなどと他人の無責任

円満になって意欲も風化する

疑問符を一つ握って夜が長い

芦屋市 黒田 能子

世の流れ黙って見てはおられない

ソプラノのリードアルトの邪魔をする

間に合わず度胸を決めて遅刻する

小心者で遅刻など出来ません

焦っても仕方がないと自分流

尼崎市 長浜 美籠

現実を思い知らせる歳の豆

日曜日だけは朝寝と決めている

目に見えぬ速さで春の陽はそこに

切り返す言葉を伏せてある余白

こころ静める海の風郷の空

愛用の木の俎の板が可成瘦せ

なおざりにせず四股を踏む神技体

最終は戸籍謄本から消える

耐えてます出て行かれると困るから

遠くても近くに居ても顔見せぬ

尼崎市 春城 年代

そろかしこひいばあさまの文の跡

七輪でお餅を焼いて父母も居て

幼少の亡夫の写真贈られる

思い出をたつぷり抱いてふきのとう

うたが好き演歌またよし外は雨

尼崎市 軸丸 勝巳

土俵上ガッツポーズと言うまさか

やっぱりねお江戸にあった埋蔵金

船を漕ぐ方がヤジより行儀よい

生きる知恵欲しくて句報読んでいる

貸し花壇草ほうほうで主待つ

伊丹市 山崎 君子

梅満開お城ピンクに囲まれて

まだつばみ庭にウグイス今日立春

餅届く従姉の長生き嬉しくて

連だこを一度見たいと亡父の里

五色豆可愛い鬼が拾ってる

川西市 米原雪子

三田市 上垣キヨミ

予報ずれちよつと得した気分する
メモ忘れスーバー出たら思い出し
万歩計春の日差しにリズミカル
キャンプ見て熱い気持で待つファン
試験終え春の日差しに胸を張る

三田市 久保田千代

鍋つつく仲に通じる言葉あり
底冷えて花便り待つ掘りこたつ
世間体あつて私の恋終える
歩きなさい言つてた人がコルセット
館内に残る余韻の名勝負

三田市 臼井二英

大器晩成と勝手に決めている
好きでない事も時にはせんならん
血圧が上がらぬように呑む言葉
適当に遊んでるなあ違い棚
いざという時に走れる靴を履き

三田市 石原歳子

知らぬ者同士会釈の散歩道
牛乳とバナナにかける骨密度
幸せの記録を残す五七五
傘二本干す幸せを噛みしめる
立て札が諦めさせた土筆摘み

予報士が冷える言うから起きられぬ
誕生日自分を祝う上の寿し
一日を堪能見送る夕茜
友還るろう梅活けて出迎える
ランドセル信号渡るまで見てる

西宮市 牧渕富喜子

梅林を抜けた辺りのたこ焼き屋
マスクした人が会釈をしてくれた
同情と思いやりとは似て非なり
ほんものはやはりじわじわ胸にくる
たゆみない自然つるバラ動き出す

西宮市 秋元てる

笑うしかないから笑つてやり過ぐす
チヨボチヨボの友に囲まれ腰が延び
電子辞書曲つた指に味方せず
生き方の下手さ眩しい年祝い
よく出来た話は唾をつけて聞く

西宮市 緒方美津子

玄関に花絶やさない母の真似
日曜日空気ぬくめてくれる孫
夢を生み夢を崩すも試着室
雑穀を嫌がる夫戦中派
訃報聞く先ず享年をききたがり

西宮市 藤 本 直

梅一枝手折つて春は罪つくり
二つ三つ戻つてみたい過去はある
読み違いさておき何かやつてくれ
ブレのない人で単なる頑固者
雨の日は悲しい顔の犬と居る

西宮市 井 上 松 煙

取れたてに舌つづみ打つ旅の宿
落しもの拾うてみるか思案する
先ず産地値に拘わらず確かめる
価値観がだんだんずれてくる夫婦
極楽への法名もらい生きいきと

西宮市 亀 岡 哲 子

生姜湯をふーふーぬくい血が流れ
六甲おろし申し訳ほど寒の雪
まあこんなもんですなあと言う元氣
二府二県うろろろ生きて喜寿迎え
片足で靴下履けてケンケンバ

西宮市 片 山 忠

病名をうっかり聞いてほぞをかむ
百均のグラスぶ厚く割れにくい
大雑把だからストレス逃げてゆく
生気ない顔でこっそり吸うたばこ
元氣かと元氣な奴が聞いてくる

西宮市 山 本 義 子

教育勅語まだ記憶しています歳
同い歳になっちゃいましたおかあさん
月ゆつくり動く朝までお相伴
のほほんとし過ぎましたよ仁王さま
二十四時のコンビニ便利しています

西脇市 七 反 田 順 子

月給日亡父は酒まん買うて去ぬ
若いだすなシャンシャン歩いていなはるわ
一番咲き菜の花持つて墓参り
梅便り聞いて心に花が咲く
ゆつたりと電話している息抜き日

姫路市 古 川 奮 水

立春が過ぎて桜の立話
喋り方ジェスチャーまでも母に似て
誕生日山海珍味天こ盛り
子が下宿二倍になった生活費
当り籤握つたらしい物静か

奈良市 天 正 千 梢

遠回りばかりしている勇み足
天引きに慣らされている高齢者
大輪を咲かす事なく後期まで
一木一草人間もまた一人
無人駅ざぶとんぬくし客二人

大和郡山市 坊 農 柳 弘

み仏に身を委ねたる日の座禪
猫柳春の吐息を聞き流す

アングルをくるつと変えて春誘う

春霞土筆ぬくつと自己主張

給付金賞味期限を抱いたまま

奈良市 米 田 恭 昌

托鉢の裸足の僧に雪しきり

騒がしいカラス死者へのセレモニー

社の人事男も拘ねることがある

食材は国産こだわってきた一途

人間の躰が出来ぬ相撲部屋

生駒市 飛 永 ふりこ

道真の無念の叫び飛梅に

古女房なんだかんだと頼られる

酔ったふり上手に的を狙いはる

プライドの許容範囲が狭すぎる

竹林 わたし丸ごと清められ

香芝市 大 内 朝 子

春いろの心やさしい風が吹く

もう見切りつけよと思うけど未練

ほどほどに出来ず深みにはまる癖

おもしろい言葉に涙もろくなる

ケセラセラ気楽トンボになります

和歌山市 堀 畑 靖 子

節約がやつと数字にあらわれる
百年に一度の喜劇かなこれは

見落しはないかとチラシ見る眼鏡

問題が山積みなのに内輪揉め

天然水買って容器のことと思う

和歌山市 松 原 寿 子

両腕に囲んで母は子を守る

胸元のフリルの衿に棲む炎

出不精の脳がなんだか電池切れ

冬眠から醒めてハートが熱くなる

陰口ぐらいいで挫折はしない女坂

和歌山市 木 本 朱 夏

非常口たしかめましたサンマ焼く

目の前の老いとりあえず棚上げに

月謝払うてニンゲンしています

脳トレの脳へ効かせる塩胡椒

店番に笑う猫いて春うらら

和歌山市 福 本 英 子

脱税は億徴収は円単位

春一番黄砂に先手打たれたり

お灯りが裁いてくれる内輪もめ

長生きをする指紋が消えている

頑張ったらしい墨継ぎきこちない

和歌山市 喜田 准一

文章は冷たい電話なら温い
理が先に立つからいのち干乾びる
遅咲きの花は根っこが張っている
感動も怒りもくれて糧とする
泣くという武器には無防備な男

和歌山市 田中 みね

立て板に水が迂闊を口走る
炬燵の守り終えて午後からマッサージ
潮時を思い止まる日の知らせ
唯一の取柄を生かす国語力
変てこに映る鏡を暇に出す

和歌山市 上地 登美代

これしきと思い直せば頑張れる
ふるさとの話が尽きぬサンマ寿司
わたくしに勇気をくれる春キャベツ
エンドレスの滝のしぶきに宿る神
自分だけの世界で草を抜いている

和歌山市 松尾 和香

決断に迷う行く末子に託す
然りげない仕草なるほど犬も好き
迷う日は亡夫に向かい書く写経
ほやほやの赤ちゃん拳握り締め
物忘れプラス思考で生きてゆく

海南市 堂上 泰女

お隣とタツプリしゃべる散歩道
娘の土産禁じられてる甘い物
五歳児も一葉よりは諭吉取る
エーデルワイスのチャイムに和む里の道
ケータイを持ってそわそわする六時

鳥取市 山宮 愛恵

里芋がふくら冬があつたかい
しあわせ度上げて足腰のびてきた
生活のリズムも変えて翔んでみる
献血に行けた余韻を抱いている
命日に必ず夢をみる不思議

鳥取市 加藤 茶人

天二物 美人に乗馬フランス語
妻として派手母として地味が良い
うれしさの裏に寂しい子の自立
舌拔くがエンマは命まで取らぬ
犯人が隣に都市の疎外感

鳥取市 太田 幸枝

老いた脳青春の恋浮かべせる
元氣だった弟の計報胸震え
たつぷりと花粉まぶしてむず痒い
クモの巣を払い牛乳置いて去く
ハンドルを握ると猫背ピンのび

鳥取市 有 沢 せつ子

新入社みな輝きを持つ蕾
榮養とうがいで風邪を寄せつけぬ
怒らない辞書を相手に日を過ごす
自販機のつり銭違ふ事がない
年毎に明るい色を身につける

鳥取市 永 原 昌 鼓

動物の証喧嘩も恋もする
懸命に生きた証の年金日
八十年生きた証の錆が浮く
生きている証糞尿いとおしい
生きている証川柳ひねる日々

鳥取市 岸 本 宏 章

桜との競合避けて梅が咲く
惚けテスト昨夜のおかず思い出す
新機種が出るたびメカに弱くなる
法律の逃げ道弱者には見せぬ
釣り上げた魚に餌をねだられる

鳥取市 岸 本 孝 子

三浪を大丈夫だと笑う母
宝くじ当たれば貝になるだろう
嫁さんがたまに痴呆のテストする
雪国の雪は遠慮をせずに降る
梅が咲き桜も出番せかされる

鳥取市 福 西 茶 子

大根は百年経ても同じ形
幸せな人は寡黙でニコニコと
深呼吸してお日さまにごあいさつ
導いてください鬼にならぬよう
テレビから天皇陛下拝顔す

鳥取市 奥 谷 彩 子

雪の下新芽溜めてる母の室
人生の双六古希に一休み
歯車もときどき軋む凡夫婦
カタログに女心をくすぐられ
振り込め詐欺もぐら叩きはまだ続く

鳥取市 西 川 和 子

七十年暇も小銭もまだ出来ぬ
興味津津七十路の脳まだ動く
面白くしたくて嘘をちよつと混ぜ
嘘も方便喜ぶ顔が見たいから
カタログに包丁いらぬ調理器具

鳥取市 鈴 木 公 弘

コンビニは高くつくけど雪が降る
まっすぐに滑って脛を打ちました
ウグイスの声待ちわびる梅が咲き
窓あけてごらん土筆が出ているよ
転ばないようカアちゃんの後ろから

鳥取市 土橋 睦子

梅の香に一番鳥も唄い出す
一寸好い話に盛った泣き笑い
物忘れ過去の話題も入り乱れ
元氣だね祖母の料理を褒めちぎる
グループで一日遊ぶボランティア

鳥取市 土橋 はるお

日本が困る高齢者の元氣
待春の小窓しずかに開けてみる
釣人が釣った魚に法螺がある
裁判に持ち込み村を二分かい
ATMに誘われたって行くもんか

鳥取市 池原 天馬

戦後よく耐えて来た祖母の五十回忌
転勤族息子はどこが故郷だ
温暖化それでも灯油多くいる
賞味期限古い和紙ほどいい味に
いくささず深くかかえて生きた母

鳥取市 山本 正光

大山に覗かれている我が暮らし
一滴のしずく導く神の業
八十路いま娘のありがたや
娘の愚痴も介護法だと聞いてやる
まだ少し男のつもり髭を剃る

鳥取市 武田 帆雀

花に眠る男を起すべからず
あのこともこのこともみな別所帯
病院の匂いが嫌い言うとなれず
見せしめに放置してある事故車
お尻をお洗いしましょういい便座

鳥取市 岩崎 みさ江

もう一杯所望をしたい過疎の水
渡り鳥帰る磁石が狂いだす
消えそうなマグマ目覚める美術館
私の磁石は天へ向けておく
来る人もない門灯をもう暫し

鳥取市 吉田 弘子

瞑想がどんどん進み寝つかれず
けどでもが口癖になり老いを知る
ワーキングプア共有の苦を分かち合い
のどかです田舎に似合う寺の鐘
意識して肩の力を抜いてます

鳥取市 春木 圭一郎

解決のできない悩み横に置く
ほとんどは放っておいても苦にならぬ
想定外それでもありのまま受ける
深呼吸つらい気持ちはためこまぬ
目の前にあること一所懸命する

鳥取市 中村金祥

我流でも他人の評価が気にかかる
給付金貰わぬうちにもう使い
子や孫を育て終わって万歳だ
胸を張れ自分で決めた道だもの
崖つぶちに立つと何だか強くなる

鳥取市 宮脇道子

春一番不景気の風飛んでけれ
人が好きさまだまな癖憎めない
堀の鵜が腹一杯に食べている
赤い糸指切りせずにさようなら
天災と経済危機と次は何

鳥取市 中宇地秀四

春が来た春だ春だと黄砂舞う
言うがままならぬ女から誘われる
俺を診る主治医が先に逝きそうだ
翔んでいるそして受身の好い女
総理みて熱が入った塾通い

鳥取市 横田春名

疲れたね神のやさしさ軽く病む
傷心の帰路にまたたく星一つ
牛歩だよまことしやかに怠け癖
老夫婦言った聴かぬと日が暮れる
四月馬鹿忘れ無口のままでいる

鳥取市 山本益子

子供等の赤いほっぺで元気出る
吸って吐く深呼吸して元気付く
ラストシーンマラソン選手大不振り
酒類豊富おつかいさんは迷っちゃう
節分の炒り豆余る大豆飯

鳥取市 平尾菜美

蜂の巣の騒ぎ治めるあみだくじ
正月に引つ越す神の試練かも
巡りくるチャンスへ運の回り持ち
押し寄せる波しゆくしゆくと受け止める
バランスと木の根道でも歩こうか

倉吉市 猪川由美子

世論負け総理のオーラ弱くなり
テレビ画面アナログアナログ気が悪い
漢字本総理ヒントに売れはじめ
いい加減待ちくたぶれる解散だ
何だかんだヒールが居って盛り上げる

倉吉市 牧野芳光

牛の瞳に草の蒼さと空の青
ひと呼吸する間に夕日落ちていく
方言の育つ地域が温かい
マネーゲームが物の値段をもてあそぶ
蜜蜂が春を先取りして回る

倉吉市 山本玲子

米子市 白根ふみ

百までは生きるつもりで散歩みち
胃袋をはらはらさせるバイキング

一病の話で弾む囲炉裏端

母の愚痴聞いているのも安心だ

真つ直ぐな人で変人ともみえる

倉吉市 山中康子

朝一番感情線がよくはずむ

打楽器に負けないように喋ります

ハウスから外界の風をよんでいる

旧姓を名乗り優えつかんすこし

こっぴどくに生まれ会得した作法

倉吉市 最上和枝

ストレスは溜る論吉は溜らない

ゆとりある心笑顔の種を撒く

食品偽装米もうなぎも悪くない

少年の嘘は未来の夢だろう

仏像の目を見て願うことばかり

米子市 門脇晶子

冬になると家族の絆丸くなる

主婦の座を去れば居心地いい家庭

米子にもカメラが回る銀の雨

秋祭り昔に戻る老女たち

大陸をつなぐ神話のもつ流れ

水仙が凜凜しい勇気付けられる

せせらぎにだまっておれぬ露の臺

雪どけにあらゆるものがたゆたうて

祝福の喜寿に足ること分ちあう

少子化の入園ほんそほんそされ

米子市 青戸田鶴

帯きつく結んで晴れの日の昂ぶり

紋付を着ると立派な父になり

やさしい言葉かけ合いながら歩いている

割り切れぬ事いつまでも考えぬ

色褪せた私も春の彩まとう

米子市 光井玲子

老いたなあ脳のバランス崩れ出す

すこやかに今日まで生きて感謝です

草笛がとても上手な老父である

気分の良い日はお掃除も楽しいね

ちりめんの風呂敷むすぶうれしい日

米子市 政岡日枝子

池だつて大波たてて立ち向かう

実家から私の指紋消えている

手放せぬものに木綿の白い色

枕ならべて香港型やソ連型

らしさ持つ男がひとりずつ消える

米子市 野坂 なみ

オバマさんの笛の流れを見守ろう
池の面ざわざわ鴨帰りはまった
ご詠歌の調べで仲間見送った
どの絆とも結びに距離をおいている
一人笛切れぎれ吹いて野末まで

鳥取県 石谷 美恵子

ふた言目には何とかなるが口ぐせだ
秒針は嫌い私を急きたてる
ほどほどに相槌打って慰める
神代からすなわち強いのは女
御破算にしたい関係引きずって

鳥取県 佐伯 やえ

名残り雪掌にうけ花の種をまく
花芽ふくら大山がにこっと笑いだす
のびのび育った子らの気性がやわらかい
回り道おぼえた孫がたくましい
明日よりもきょうをだいじにして生きる

鳥取県 山下 節子

一生を語るに胸が張れるよう
クラス会みんなセレブの顔をして
年金の暮し手詰まり耐えている
かまったら今はセクハラ疑がわれ
ふる里の重み先祖の墓がある

鳥取県 竹信 照彦

紀元節だった建国記念の日
国民の祝日趣旨は問いません
被せ歯が虫歯になっているなんて
歯を削る音で出てくる脂汗
歯医者さん優しい声で荒療治

鳥取県 深田 俱久

朝令暮改首相発言揺れている
折り込みは古紙回収へどつきりと
エコ気分陰でこっそり吸っている
如月の2・26を知っている
今年はネ昭和八十四年です

鳥取県 北村 稔

母さんの立ち話には時間ない
これ以上無駄省くところありません
骨ひろう時は何故だか涙出ぬ
無事卒業職はなくても胸を張れ
ダイエット焼芋の笛じやまをする

鳥取県 盛田 夢路

きついけど有るだけいいさこの仕事
遂に來た俺も週休七日制
キッチンもマネーゲームの皺寄せか
しかめつつら隠せぬ地球温暖化
後前に着ててだあれも気付かない

松江市 川本 畔

病む人へ星の話をしていたり
見えぬ嘘へ水仙の春の確かなり
フルートの音色美し深夜便
庵の淵を賑やかにして関西弁
三月へ喜びの声包むなり

松江市 松本 知恵子

みずいろの春へ膨らむものがある
いそいそとタマが小春の外へ出る
危機管理工事現場の笛の音
詐欺事件お金と欲の吹き溜り
ギブアップしそう介護と子育てと

松江市 安食 友子

労わりを吐きあっているバーボンよ
まだ深夜彼の世の人が楽しそう
生き様の意力あるらし花芽さん
しみじみと峠を知らす五臓六腑
百歳の頑張りやさんに敬礼

松江市 津川 紫見

本音より先に冗談言ってみる
ゆとり持つ心で入れた茶が甘い
飛ばされた大地でこぼれ種が咲く
呑み込んだ言葉がこわく長い夜
職安でOB会が開けそう

松江市 銭山 昌枝

栄転の噂は風に攫われる
空想の膨らむ部屋で船を折る
新米の巫女がマニユアル読んでいる
太陽に晒され自白した土竜
五十年連れ添い怒る種も絶え

松江市 小川 注湖

給付金どうやら丑に乗ってくる
門札を横文字に変え後を継ぐ
病床で反省してる自己管理
千鳥足家計簿広げ叱られる
振る舞いの陽気な裏に持つ悩み

出雲市 石倉 芙佐子

さくらさくらばつと見事に咲いてみせ
さよならを今日受取っていたポスト
山の向こうに飛び去ったまま青い鳥
再会を約すことなく散っていく
幾度か送り迎えて来た桜

出雲市 多久和 敬子

どうしても心の鬼が離れない
鍵穴をこっそりのぞく鬼が居る
さりげなくお茶で紛らす痴話喧嘩
せかせかと動いて今日の幕を閉じ
パーマ屋の椅子で世間が良くわかる

出雲市 小白金 房子

叱られた小猫と春の暖をとる
垣根ごし呼んでよばれる農のお茶
日に幾度だんだん言って日が暮れる
地下足袋の軽さ誘われ畑仕事
餌代金払い暴落牛の声

出雲市 森 茂美

銀世界牡丹の新芽耐える夜
寒風に背中押される無人駅
オバマさん地球の人氣集めてか
衰えを感じる足が雪を踏む
春よ来い桜の古木呼んでいる

出雲市 園山 多賀子

合掌の十指の中に陽が沈む
毎日をスタートにして日々新た
負けて勝つことにも狎れて卒寿とや
落語家は羽織脱ぐのも芸のうち
好き嫌い個性は枉げぬ方がよい

出雲市 富田 蘭水

立春の声が視界を変えてゆく
立春の声きき卒業はや胸に
炬燵守りけって畑の土を嗅ぐ
あせるなど日々じっくりと冬充電
和布刈神事赤フンドシの海水雨

出雲市 伊藤 玲子

神様のオマケこの世のパスポート
風花に巻^{けんらん}織汁の輪が和む
桃の花びつくりさせる戻り寒
人並の幸願おうか恵方巻
鬼の面被ったことが三度ある

雲南市 毛利 幸

人の裏嗅いであれこれ囃し立て
手帳には書けないことを秘めている
弁当に母の願いが生きている
じっくりと丑の歩みを真似てみる
ほんのりと色香漂ういい女

島根県 伊藤 寿美

この胸にも鬼が一匹居るのです
朝刊の「親鸞」を待つお味噌汁
老人力に意地悪をするこの世
千年紀寂聴源氏読み返す
冬晴間墓参の杖も久し振り

倉敷市 撰 喜子

昇りつめ偉ぶり梯子はずされる
寄り道の好きな靴はき立話
絵に音楽酔いしれひまのない余生
割り勘に余りの出ない工夫する
善行を冷やかに見るホームレス

真庭市 福嶋 智恵子

節分の鬼と仲良く住む暮し
喜寿の坂命消える日考える
三姉妹老いて益々母に似る
声までも母そっくりの長電話
一時を首引つ込めて亀になる

真庭市 国米 きくゑ

春風にお地藏様も笑み給う
明日は読めぬ今日という日を大切に
まだまだと後期高齢種をまく
募金箱氣持をそっと入れておく
未来読み平成維新誰が成す

美作市 大石 あすなろ

再会の喜び鼓動とり戻す
水加減火加減おんな雪の日も
雑音の中にふわーと紛れ込む
ラララと春は彩から音符から
満天の星から降って来るもしも

美作市 福原悦子

胸を張り信念を行く父だった
再会へ照れ笑いして名が出ない
結ばれた糸が奏でる披露宴
サンキューと笑顔の孫へ諭吉さま
ゆつくりと競うと視野が広くなる

竹原市 石原淑子

来る来ない思わせぶりな小糠雨
森作る農業男の夢弾む
チョコ贈る可愛い妻になつてみる
挨拶も出来ぬ園児と若いママ
孫の瞳の無限の夢を信じよう

竹原市 岩本笑子

ホットカルピスやつと一日締めくくる
返事する猫ですじつと目を見つめ
母子草春はどこまで来てますか
寒椿その生き様を窓越しに
生真面目に薬を飲んでガン退治

竹原市 時広一路

どの愛もみな受け入れるこぼれ種
イエスノーその中間は無いだから
休肝日まだ作れない作らない
割り算の九九を知っている歳よ
音程の狂いも風呂でなら許す

宇部市 平田実男

いつからか嫁が仕切っていた我が家
離婚して翔んでいる人萎える人
好物を出された箸が良くしゃべる
善人の仮面着けてる気の疲れ
目で食べて香りを食べて口で食べ

美祿市 安平次 弘道

口論になると政界かましい
裏切っていないが溝が深くなり
白髪染め気分転換などいかが
妄想が広がりが明日が怖くなり
なるようになる空っぽの頭でも

東かがわ市 川崎 ひかり

放つとけぬ性格だから忙しい
天下りたつぷり吸った甘い汁
裏表ない人なんて化けものだ
極楽は寢床で手足のばす時
夫婦して湯タンポしてるエコライフ

東かがわ市 伊勢 八重子

凜と咲く母が好みの黄水仙
ハイポーズ皆それなりに撮れている
長風呂を覗いたらしい娘の気配
雑炊で見事に締める鍋奉行
聞き分けの無い児に戻る認知症

東かがわ市 原 賢

貧富の差増して世渡り重くなる
気まぐれが過ぎて冷たい風に逢う
蹠いた石からもう生きる知恵
この人と想うて添うた妻と居る
自分史のところどころに消せぬしみ

几帳面ですがボイ捨て常習犯
シンブルな祝辞に心こめられて
シンブルな服装だけど人目引き
成人を祝う国家が病んで居る
豆まいて不況の風を追いかう

(前月号) 藤井寺市 若松 雅枝

風に山の枯葉が騒ぎ出す
椿咲く父が愛した冬の庭
定退の夫へ妻の感謝状
カラオケを唄う夫婦に春近し
ライバルと鉢合せしたくじ売場

東かがわ市 清川 玲子

第一回 どぶろく誌上全国川柳大会

応募期間 平成21年3月1日～6月30日

締切日 6月30日(当日消印有効)

投句料 千円(定額小為替・発表誌呈)

賞 市長賞・他各点30位迄呈賞

宿題と選者 (2句吐詠み込み可)

札幌川柳社	岡崎 守俊
川柳人社	岳 俊介
川柳宮城野社	若山 大介
NHK川柳学園	大木 俊秀
川柳研究社	西来 みわ
川柳えんびつ社	脇坂 正夢
なごや川柳社	松代 天鬼
川柳塔社	西出 楓楽
光川柳社	早川 双鳥
川柳せめんだる社	古谷 龍太郎

投句用紙 便箋 ため書き、楷書、〒・住所・電話・氏名

投句・連絡先 〒028-0516 遠野市穀町6-17
鈴木南水 電話0198-62-4843

主催 遠野川柳会

『どぶろく』

川柳塔の

川柳讃歌

⑤②

木津川 計

人間の欲に詐欺師の腕が鳴る

三好 專平

「オレオレ詐欺」に強い大阪のオバチャンが巨額サギ事件にこのところコロコロだまされてゐる。「関西一の女相場師」の投資話に乗って15億円が、「元バレーボール全日本女子代表」なる女実業家に73億円、経営コンサルタントが持ちかけた未公開株に2000億円以上……。損する話には警戒するが、儲け話となるとオバチャンも目の色を変える。

「盗つ人の種は尽きまじ」は石川五右衛門の台詞だが、詐欺師を育てる土壌は肥沃だ。

三億もいらんと母が言う師走

坂 裕之

欲の皮のつっぱった、そんなオバチャンの多い巷に、これはまた控え目でなんと遠慮がちなお母さんのいることか。

恥ずかしながら三億が欲しくて毎年十枚を購入……。昨年、商店街のクジ売り場で当

選番号の読み取り器で調べてもらったら、窓口のおばさんが「おめでとうございます」と言うから、「ええっ!?」と聞くと「一万円が当りました」。あのときほどがっかりしたことはない。やっぱり僕は三億円に当たりたい。

素うどんは温い財布のとき食べる

岸 本孝子

清貧を絵に画いたよと言うか、体現してると言うか、孝子さんこそ清貧のおひとなのだ。清貧は貧乏ではない。財産は沢山あるが質素に暮らしているのである。けつしてケチでなく、場合によってはじーんと使う。だから孝子さんは財布が寒いとき天ぷらうどんを食べる。

温い財布のときこそ始末する。「論語」が言うてましたなあ。「疏食を飯し水を飲み、脰を曲げて之を枕とす。楽亦その中に在り」

も一人の僕が背を押す背をなでる

高橋 宏臣

行くか行くまいか、買うか買うまいか、受けるか断るか、「永ろうべきか、死すべきか、それが疑問だ」(「ハムレット」)。洋の東西を問わず、人間は判断に迷う動物である。だからこの句の中身、格別に新鮮なのではない。が、背を押すもう一人の僕がおり、それとどめようと「背をなでる」僕がいる、という表現がフレッシュなのである。

なるほどと思わせる表現を生み出した。記憶力に対しては忘却力というふうな。

誠実に老いて悲しき認知症

板東 倫子

退陣するブッシュ大統領を中に、歴代の米大統領が勢揃いした。バブッシュ、カーター、クリントン、そしてオバマの中にレーガンが居ない。認知症を全米国民にテレビで告白、表舞台から消えた。病状は相当進行しているであろう。映画俳優から州知事に、さらに世界に君臨した大統領への道は、「誠実に老い」たと言うより「きらめいて老い」たのである。だから、いつか、もって瞑すべし。が、誠実に生きた小市民の認知症は辛い。

昨日より優しさプラスして明日

両川 無限

クイズのような句である。「昨日より優しさプラスして今日」なら判る。「今日より優しさプラスして明日」でも分かる。昨日と明日の間の今日がなぜ無いのか。

察するに、無限さんかこの句の御仁は、強いはかりで優しさに欠けたのである。痛く省りみ、昨日までの生き方を明日から変えようと決意したのだ。それは昨日より今日、今日より明日という今日明日の態度でなく、未来志向の在り方なのだ。敬意を表したい。

《上方芸能》誌発行人

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

大 空

恋ごころ

云い出したからには女強しとも強し
金ですむ恋もさみしきもののうち
もう未練ないが糸屑とてやり
別離の言葉に深酒しなさんな
きつと来てくれと仲居の年増なり
慰謝料の月賦と言うがおかしくて
未だ慾あり水晶の数珠
人妻とあまりに近い膝となり
人妻のてかてか光る鼻の先

地でゆくか舞台か恋の成駒屋
薄情と云はれうなずく薄情さ
媚薬の如く炬燵蒲団が眼に迫る
ほほえめばほほえむ恋の川田順
情痴の果てのひとり飯炊く
椅子の背にもう青春は消えていた
秋さらり銀の襖のものおもひ
わかれたらとも思ひ死んだらとも思ひ
幻の黒髪となり脚となり
だらしなさいっそ死のうかだれと死の
あきらめていたと思ふに死を選び
人妻よ不惑とはかなしくもあるかな
雨風が逢いたいこころつのらせる
名を捨てて十七八の恋もせむ

自選集

前 ともつ

政界混乱日差しの中で日向ぼこ
B M I 計算器呼ぶダイエツト
締切りの半日前を守る主義
一生分酒は飲んだと言ひ聞かす
恩師として恩師を仰ぐ夢の中

三 宅 保 州

文字どおりあきまへんわという不況
アホにならなれるがバカになれまへん
大船に乗つて私を見失う
生粋の国産品だ俺だつて
電子辞書どうあろうとも広辞苑

宮 口 笛 生

八十五何時の間にやら高齢に
死んでゆく夢おどろいて目をさまし
まだ死んでたまるか悪い夢ばかり
俺先かお前先かとよみの旅
米寿まだ残っているとねらつて

宮 西 弥 生

森 下 愛 論

八十田 洞 庵

両 川 洋 々

筋ばかり通し和解に繋がらぬ
許してはもらえぬ過去も美しい
山笑う山が動いて花便り
閉じ込めたわたしを笑う蕾たち
摩訶不思議秘めて季節の音たしか
降る雪を彩どっているネオンの灯
目に青葉相も変わらぬ町に住み
とほけたる返事も春の宵なれど
茶柱が立つたと朝のひとときよ
ふと触れた女の肩の堅さ見る
古日記つなげば夢がたんと出る
駅伝の襷でつなぐ若い汗
賽銭は百円手頃と決めてある
燃えつきた男だ花道などいらぬ
アラビアの夜も満月だったよね
寡婦のハートが自然発火をしよう
亡父がタネまいた花だぞ凜と咲け
僕の五体が千切れるほどに君を恋う
裏口で罌を仕掛けた手を洗う
一度だけの人生だから君を抱く

阿 萬 満 的

べらべらと喋る中味のない話
自問自答広がる視野はたかが知れ
電池切れに似てマンネリな日が続く
雑魚の意地騒ぎたてても無にひとし
浮かれ過ぎた駄洒落梯子外される

板 尾 岳 人

見つめられはにかむように咲く桜
背かれて暗闇に散ってゆくサクラ
真白な風に吹かれた恋ごころ

熱演の汗で緞帳濡れている (長男創路 新国立劇場出演)
頂点を狙う主役と監督と (沖縄国際映画祭)

奥 田 み つ 子

変身を考えている 春うらら
熟年の恋 真剣で清らかで
熟年の恋 純粹でいとおしい
熟年の恋 ゆとりある思いやり
熟年の恋 究極の愛なのか

河 井 庸 佑

原点に戻って策を練り直す
世渡りへ負けて勝つこと身に付ける
ポーカーフエイス怒りを胸に畳み込む
ライバルの意見真摯に受け止める
再びは来ぬ今日を無駄にせず

川 上 大 輪

しあわせの隣がボクの指定席
懸命に水母も生きているんだな
よく寝たな餃子の皮に包まれて
いい味が出るちよい悪なんだろう
貯金箱は空っぽのまま春になる

木 村 あ き ら

バアちゃんのヘソクリ ランドセルに化け
後を追う幼児残してママ出勤
カアちゃんに叱られてなお母のヒザ
カアちゃんも着飾ってゆく入園式
バアちゃんと母ちゃんもゆく参観日

小 島 蘭 幸

不動心 大仏さまにいただいた
色紙一枚合掌をするところに置く
バレンタインチョコやがて妻からだけになる
長女から速達で来たチョコひとつ
愛犬チョコは僕のストーカーになった

小 西 雄 々

待っていた卯月ピンクの風誘う
古希すぎて喜寿の峠も見えてきた
杖をつく元隊長へ眼を伏せる
訃報欄たしかめ友を消す名簿
一番星故郷の母はもういない

齊藤 嘉

湿っぽい顔は似合わぬ恵比寿様
雪しんしん口に蕩けるスチューベン
寒雛ビヨビヨいのちの音を抱く
久々のスキー美味しい握り飯
苗床のほどよい温み芽が育ち

塩満 敏

この夏はお墓参りに行きたいな
メダカ達温い春を待っている
新名所鶴彬句碑仲間入り
燕達温い日本を待っている
老夫婦曾孫の誕生待ってます

新家 完司

なつかしいにおい色町宿場町
でかい音出さぬと飛べぬヘリコプター
完璧な笑顔あちゃんから学ぶ
明日は雨あたる予報がつまらない
百科辞典めくって無知を思い知る

恒松 町紅

何気なく自慢話になっている
肝心な話そらした臍曲がり
同じことまた聞かされた電話口
旧友の電話病に勝つ話
ほどほどという手加減が決まらない

津守 柳伸

限界のある人生をおおらかに
引き出しをいくつも持つてマイベース
編み針のひと目ひと目に宿る愛
裏表晒し細腕時化の中
年輪を刻みつづけている居職

遠山 可住

足で閉めたとこを見られていた不覚
一〇五歳あつからかんと母笑う
宝くじにかけてみようか給付金
吊橋が怖い男で見直され
漢字では読めずローマ字でわかり

都倉 求芽

瞑想の彼方で芽吹く春の森
春一番午後の日脚が特に伸び
春の午後鬼の軒が聞こえる
花道がない満開の花の下
出来そうでなかなか出来ぬ以下余白

土橋 螢

門を抜いて雪おんなを入れる
色とりどりの鳥が舞う天地人
叫春の呻きを忘れないように
花が散るように死ねたらと思う
少年にもどる葉をのんでいる

中原 諷人

いっぽんの絆に幼虫の小部屋
余裕ない儘に徹夜の辞書めくる
周りみる余裕や枝垂れザクラ咲く
贗作の生命じゃなし父母の子だ
生き残りかけるリハビリ続の続

西 出 楓 楽

肩の力抜くと胃もたれ消えていた
気掛りをいっぱい溜めて懐手
美しい日本語に会う小津映画
べんちゃらに乗って低温火傷する
地球の未来よりも日本の明日

仁 部 四 郎

六曜をのせた手帳にプレミアム
六曜が出てない辞書も売れている
友引の日だが市長も来た葬儀
仲人の希望でやはり大安に
仏滅で安い式から五十年

林 瑞 枝

あけぼのの澹刺昇る陽を拝む
封書から友の情愛溢れ出る
雛人形の囁きひそか蔵の奥
神ぞ知るわが筋書きの花手桶
桐の葉の招きに蝶のひと休み

温故知新

福 島 鉄 児

気まずさはゆうべのままの膳に座し
金はないけれどぶつきら樺が好き
割引をされて聞いているとは知らず

福 田 丁 路

我が道を行かんと家出したものの
顧みて恥なき身とは笑わせる
情熱の詩人黙って呑むばかり
春の宵魔術の様にすられたり

不 二 田 一 三 夫

人妻の読んだら焼けと云う手紙
三流館夫婦仔犬を抱いて来る
手にとつて見れば桜のわびしさよ
豆腐屋がつかめば豆腐堅く見え

藤 井 春 日

言うならば優待しろとの謎だった
茶話会と言うにビールの用意もし
お遍路の杖も花咲く方へ向き
指定席まで買うとるに来てくれず

— 合同句集「私達」—
昭和三年発行 選者麻生路郎



小 島 蘭 幸 選

大阪府 尾崎 ゆめ

一センチ角度を変えて見えた事

優しい人だストライクゾーンが広い

ダイエット CO₂も私も

ビールの泡がこぼれる前に妥協する

水かさが増すまできたら別れよう

私の事情さておき桜満開に

雲南市 武島 ちよえ

米寿とや義姉は私より元氣

優しくて老いの速度が早くなる

遠からず春だと木洩れ日の笑顔

忘れずに天満宮の梅は咲く

バレンタインチョコ渡す人もう居ない

多忙です家もわたしも修理中

紀の川市 辻内 次根

独り居て楽な姿勢は前屈み

小康を保ち忘れている薬

鈍らにならないように正座する

全身が温くなる自己暗示

太陽に透かすと今の僕が居る

余生とは行火を抱いて独りいる

竹原市 國實 力

貧しさもあって楽しい鬼は外

理屈ぬき味噌汁うまいのは二月

ひと冬のドラマが終る給付金

仕事着が似合う家計を忘れてた

八十を医者が見つけて診てくれる

窓叩く風にときどき返事する

大阪市 吉田 富美

花吹雪仏も人も立姿

在ってなき如く座って桜守

地球儀の点ともならず土筆つむ

考える眼をして魚拓医院春

青春の心の刺がまだ抜けず

お母さん私傘寿になりました

シドニー 三谷 たん吉

やつと出た注目浴びる日本力士
希望さえ持てば人間生きられる
幸せはいつも帰れる古里か
天下り世襲消えればいい日本
気負わずに自然に話せ聞いてやる

メルボルン 藤原 ポン吉

金融危機人もおかずも減ってゆく
リーマンの魔法で世界金縛り
出来る事背筋のばして前を見る
こんな世の未来を照らすわらい声
辛くとも耐えて慣れればまた歩く

札幌市 三浦 強一

終の宿貧乏神が出て行かぬ
徳利の底を叩いている未練
定年へ故郷回帰の血が騒ぐ
整形の鼻も崩れる温暖化
世界不況へ妻もいっぱし評論家

草加市 飯土井 健翁

戦争は嫌い外地で生き延びた
何も彼も億劫になった九十八
線香の煙ゆらゆら妻の顔
一日を書斎で暮らす老い独り
夢に見る妻は四十の若き顔

横浜市 川島 良子

合格へ十五の春が踊ってる
簡単に妥協はしない太い首
宿題が遺っていますまだ死ぬ
迷路かもボクからキミへ続く道
イチニッサン声掛け合って立つ介護

横浜市 長島 亜希子

孫お受験注射マスクをさせられる
絵馬にまで情報保護のシール貼る
流行をちよつととり入れまだオンナ
レシビ切り抜いてるだけで出てこない
日が伸びて帰宅時間が遅くなる

豊橋市 藤田 千休

天下り渡る世間の水甘い
太陽の塔に孤独を垣間見る
毒のある言葉をしゃべる隙間風
省庁の風に推されて渡り鳥
白魚の指が耕すプランター

京都市 清水 英旺

敬老バスで天国巡る夢を見た
ろう梅の蕾は春のつばみです
百キンは駄菓子屋に似て面白い
古日記読めばその日々とおしい
文豪の墓供花もなく寂として

篠山市 谷田多美子

岩出市 村中悦男

思い出を支えに今年の味噌つくる
柚子風呂につかり今宵は女です
人情の昔ばなしを聞くこたつ
日々好日大スター並みのスケジュール
履歴書は大学院卒職がない

和歌山市 福井菜摘

繕っているのに過去が顔を出す
右へ倣えすればよかった四面楚歌
喜怒哀楽夢を刻んで来た手相
幸せは両手で囲むほどがよい
スイッチオンズームアップでくる記憶

和歌山県 森下よりこ

不況風には鈍感ですよ農に生き
一人ぐらしが続いてわがままになった
頼もしい孫年玉を貯めている
横綱にガッツポーズは似合わない
一人炬燵で食べ過ぎているつるし柿

紀の川市 吉村幸

予感的中はやばや春の使者が来る
フルムーン貼ってアルバム重くなる
再会の余韻も挟む写真集
孫はもうまとわり付かぬ変声期
ガスマスクではありません花粉症

安心と筆圧ほめる娘の返事
年ですねカルテにまでも書くのかな
末席の問いが会議を盛りあげる
アルバムの二人笑顔もセピア色
不景気に電源切りに回る妻

大阪市 山本加お里

花や木に元気をもらうウォーキング
植木鉢みみずも添えて種をまく
生かされてお陰さまでと歎異抄
雑踏で友の帽子が見え隠れ
寒椿花は落ちても咲いている

大阪府 神野千恵子

酔うほどに脳はどんどん冴えてくる
友からの電話日差しが温かい
力点がぶれたか腰が重くなる
現実も夢も壊してゆくネット
ゼロの数あなたに用は無いという

大阪市 平井露芳

巡礼が先鞭つけたウォーキング
布袋さんメタボなんかは気にしない
何時の間にバリアフリーになった道
新聞はしっかり読めと医者と言ひ
九条をのせてソマリヤ沖に出る

豊中市 谷川 勇治

河内長野市 木太久 正一

給付金隠した罫が見えている
定年や踏まれた靴を磨いてる
洪水も渇水もある僕の川
病床へ重たい嘘を置いてきた
あと何泊させてくれます地球さん

豊中市 源田 啓生

節分のときだけ鬼に出て貰う
ルノアール私の落ち付く場所がある
ポケットに鮎玉がある雪の道
三億円埋めたいけれど庭がない
一枚の絵手紙が撒く紅椿

八尾市 松葉 君江

追ってくる老化に甘え許されぬ
新年へ心の捻子を締めなおす
弱音など吐けぬ八十路のメッセージ
いい人を止めると楽に生きられる
趣味さんまい乾く心にうるおいを

吹田市 早泉 早人

白黒をはつきりせずに丸く生き
生きてゆく重みに耐える寒椿
いつまでも若くありたい影法師
平熱に戻りタバコの味がする
貧乏を知らぬ議員の格差論

散歩道花壇の中に春の色
愛犬のシャンブーカットに送迎車
大好きな百歳の顔生き上手
ファックスで孫から誕生祝くる
夕食のメニューあれこれ鍋にする

藤井寺市 伊藤 アヤ子

紅梅はうぐいすの声聞きたがる
朝もやが去って街並動き出す
病人はこの世の中の真ん中に
にぎやかに騒いで帰る見舞客
病室の灯り落してから冴える

神戸市 山崎 武彦

宇宙から見れば国境なき地球
栄転と言われ地方の旅がらす
春ですね本社の椅子が動き出す
人形を抱きしめ母は子に還る
埋蔵金そろそろ掘れとポチが鳴く

神戸市 早川 孝子

楽しみをポケットに飼うおじいさん
社会人育てるバトン渡せない
何度でもリフレッシュして前を向く
沈黙を守る男の背筋伸び
受験生一途な瞳春掴む

神戸市 木村 忠 義

忘れないように楷書で文字を書く
近ごろは飯よりおかずたと食べ

温暖化蟻も心配する未来

人を気にすると自分見失う

表題にひかれて買った本多し

加東市 安 達 厚

金が金呼ぶのか出費かさむ日々

兄の逝くよう働いて働いて

表札と仏壇が消え過疎すむ

雪国の恐さ知ってるから恐い

ケイタイも持っていないかと孫笑う

鳥取県 斉 尾 くにこ

孫と言う母と娘の逆転の鍵

わが道を娘の人生と重ねてる

人ごとと聞けばわたくしへの苦言

成長の止ったままの制御盤

プチ自慢してほろ酔いの雲の上

米子市 吉 田 陽 子

音のある平和家族が出入りする

手術室出れば私は変わってる

いい電話だった根雪が溶けて来る

メモ通り買物出来るポチと住む

便利屋の私会社が離さない

松江市 相 見 柳 歩

手の甲も磨く未来へ続くよう

大厄を乗り切るために牛になる

書くことを続けて漢字検定へ

セレブなら冬眠だってできそうだ

まだ青い油は切れていないから

府中市 藤 岡 ヒデコ

まんべんに日差しいつ来る給付金

人混みに少し疲れるマイペース

看る方の愛の根気はひるまない

我が顔は見えぬが老いた同級生

お見舞いの帰りに思う明日のこと

竹原市 土 井 輝 恵

青い瞳の孫の写真を持ち歩く

無農薬虫愛しくて汁に浮く

炊き出しに何処にも一人お姑

話があるから寄ったんだろに言わず去ぬ

皆勤賞貰うほど行くボランティア

宇部市 高 山 清 子

変り身の早い男の立ち泳ぎ

買って来てもたもたしてる電子辞書

潤滑油程度の世辞で丸く住み

戦争は嫌だが飲めば出る軍歌

プライドが投げたタオルを掴まない

大洲市 花岡 順子

札幌市 小沢 淳

リードする人へ黙って付いていく
からからに脳も乾燥してきたな
狸寝入りそつと毛布を着せかける
バーゲンを買いはくはくの母である
ちつばけな私を笑うクジラ雲

福岡県 林 さだき

ごった煮の鍋に個性が見え隠れ
降る星と守り続けている棚田
人よりも脚よくあがるケアハウス
熱燗の夫にも捨てた夢がある
おでん鍋妻は異国に行つて留守

唐津市 北村 松風

妻と旅五体満足荷物持ち
散歩道土筆夕餉の膳に添え
言い訳はしません弱いから敗れた
雨の夜は運転しない喜寿を過ぎ
カーラジオ運転中は休みです

唐津市 吉富 節子

ライバルも居ないと闘志狂い出す
川柳に生きる楽しさ教えられ
面接で昔の友が試験官
薄れゆく記憶に残る母の海
嫁褒めて老後を頼む姑の知恵

あちこちとぶつかる内に丸められ
バーゲンは女史もおばんも主婦の貌
仮面つけ偽装の街に馴らされる
発酵をさせて品質アップする

佐渡市 高野 不二

在宅は中から鍵を掛けている
銀行で今月号も見て帰る

同じギャグ今日の仲間を笑わせる

明日の天気位は俺にでもわかる

栃木市 岡野 すみれ

なせばなるそんな世の中には遠い

飾らない言葉で叱る師が恋し

胸こがす人が映画の中にいる

春風は貧富の差なく吹くらしい

昭島市 野口 忠

タイミング合わせ三時に客が来る

定年後まずは味噌汁づくりから

初物をたつぷりと食う医者嫌い

古い二人捨てるリストで揉めはじめ

東京都 高岡 弥生

病氣して子の心配が良薬に
気の弱い犬は小さな犬に吠え
温泉に行けぬかわりに風呂に塩
患者から感謝をされて幸もらう

東京都 井上 つよし

反芻と牛歩で老いに立ち向い
心ゆるして語れる友が先に逝き
噂をしても影も見せない福の神
ライバルの弔辞に並ぶ美辞麗句

横浜市 巖田 かず枝

バス電車座りたがるの足と腰
息子の声を毎日聞いて備えとく
国会で漢字読まされ情けない
負けてみて痛みが解る人となり

北名古屋 片岡 文男

宴会でメタボ対策一日延び
留守独りストーブ消して陽と耐える
ケーキまで節分巻と乗ってくる
孤独さの行き着く先はケータイか

岐阜市 平野 あずま

卒業はしたが学びに終らない
晩学へ牛歩が続く田舎道
プランター並べて自給率上げる
ケータイの届かぬ場所であ堵する

八王子市 上原 酒坊

つまらない芸でも笑う娘が不思議
彼岸過ぎ家の墓だけ花がない
肺ガンを知らぬ親父は煙草吸う
空腹に耐えて望んだメタボ診

藤沢市 加藤 スズコ

紅を引きおしゃれ気分如初鏡
元旦に集う家族の祝船
おしゃれには無縁も母の笑い皺
手をつなぎ死線を越えた子も初老(北満よりの引揚時)

日立市 加藤 権悟

腕白が叫ぶと消える蜃気楼
乙姫に会うかも知れぬ蜃気楼
神童も怪童も発つ春の駅
窓際の椅子に眩しい若い風

静岡市 渡辺 芳子

バランスが合わぬ心とからだです
初鏡どうにもならぬおばあさん
姉弟の絆を思う年が来た
アルバム若さに出逢う外は雨

三田市 辻 開子

立春を元気に迎え介護中
道の駅地場産信じ日参し
暖房費診察代にかえられず
年金のわくで予定はたててるが

三田市 福田 好文

迷彩服着ると鉄砲欲しくなる
ドイツ語でなくても読めぬ医者
の文字好き嫌い無しに育てた大家族
発表会舞台の妻に目を見張る

橋本市 石田 隆彦

悪友に会えば目覚める遊びぐせ
窓際で今は陽気にビエロ役
頭髮につづき奥歯にがたが来る
出雲弁連ドラに乗り飛び回る

和歌山市 坂部 かずみ

炬燵から飛び出しチューリップ畑
冬の夕日色鉛筆も敵わない
終りだと思いたいのに咳続く
三日目で夫の文句が増えだした

和歌山市 堀 富美子

身の丈で生きるシナリオ選っている
笑い種分けてほしいと友の訪う
もう少し夢追いたいと夫の墓
痛み知る仲間に今日も癒される

和歌山市 磯部 義雄

愛猫の一周忌にはかつを節
重かるう六十億人踏む地球
今生きているから出来る深呼吸
足取りが重い病院前の下車

和歌山市 根田 よしこ

不況風中流気分ふっ飛ばす
お嬢さん育ちにだつて意地はある
しゃあないわ老母の口ぐせ得心す
米みやげ孫の顔見に定期便

和歌山市 土屋 起世子

子のテスト見ながら友の点を問う
ケセラセラ就活の孫達しい
舗装などされてなかった山の道
身辺の整理三日でやめました

紀の川市 北山 絹子

強情な父の血筋を受けている
エンビツが一本あれば友が出来
退院へ嬉しい父の赤いシャツ
折り返し点で息切れしてしまう

紀の川市 宇野 幹子

走らねば外反拇趾が疼き出す
油抜きされた男で味がない
盃の中で答えが浮き沈み
スリ硝子隣の花はよく笑う

田辺市 大峠 可動

大寒や大河になった失業者
捨てられて男つぎぎ野に堕ちる
哀歓を吞んで目覚める労働歌
熊野路の奥にも光り神の宿

海南市 小谷 小雪

ポケットに春の息吹を持ち帰る
梅活けて万葉人の気骨知る
ポケットに元気な声を詰めておく
子に指摘されごもつともだと思ふ

大阪市 西脇義祐

遠足で拾った破片弥生土器

美人だなはつと息飲むニユーハーフ

懐しや時計質入れ飲んだ日々

お役所が弱者の痛みなお扶る

大阪府 小栢こずえ

気づかずに言葉の罪を犯してた

日常を離れ我が世の夢クラブ

嫁の手前うまい言わずにたんと食べ

来年は出来るだろうか行事終え

大阪府 坂口公子

どこがどうあつてもと言うスケジュール

怪我をした蟄居の身にも春の襟り

ちよつと転んで百年目という涙

詮なくも杖をつかせる家屋敷

大阪市 橋村容子

福豆を食した鬼が笑い出す

炬燵から動けない身が疎ましい

バレンタイン財布の紐がつい緩み

焦つても日進月歩追いつけず

大阪市 萩原大朔

創業の理想も揺らぐこの不況

贅肉を削ぎ取るように社員切り

うすうすは罨と知りつつ乗る誘い

引退し今や天職風呂洗い

大阪府 畑中節子

新しい風邪が薬と鬼ごっこ

お互いに拗ねる事ありひとり言

柚子きざみ一人夕餉も手をぬかず

人参が人参色に折れたがり

大阪府 高木道子

なんとなく白け顔した招き猫

マンションのベランダにある喫煙所

スクラムを組んで雑草陽に媚びる

定年のおまけ人生野良仕事

大阪府 安藤なつこ

両の手を合すとそこに神宿る

えべっさんだけ繁昌ではあきまへん

いい笑顔それだけでもうポランティア

わがままな親でかしこい子に育つ

大阪府 西川冷子

詐偽団の手練手管に立ち向かう

焼山の芽吹く季節のわらび取り

合成写真うっかり影で見破られ

オバマ節期待してます好景気

大阪市 太田としお

バカヤロー新聞なんか信じるな

バカヤローオバマが日本救うのか

バカヤロー家に鏡はないのんか

バカヤロー妻に言うたらえらいこと

大阪府 若月 祐作

八十路坂気楽に歩こ最後尾

不況でも気楽そのまんまを生きる

食つて寝て気ままにメタボかかえこむ

ふるさと納税気持をこめて青い空

大阪市 吉川 弘泰

頭下げ桜トンネル恋の風

梅が散り桜が咲いて嫁ぐ娘に

春風に紋白蝶の夜叉の舞

巣立つ子に幸多かれと桜舞い

河内長野市 針生 和代

喜寿でさえ煩惱いまだ埋もれず

恥かいて人間ぐんと幅を増す

所得格差努力だけでは報われぬ

小川となり大河となつてゆく滴

河内長野市 辻村 洋子

思い出のページにはさむ恋しおり

胸がキュン思い出します過去の人

酔うほどに嬉しくなつて帰路忘れ

脛かじりすっかり大人の顔になり

河内長野市 内海 綾乃

杖と傘両方持つて歩きたい

手をつなぎ見て気持ちよい老夫婦

障子越し日の出さしこむ枕元

ウグイスが梅咲く時分来てほしい

河内長野市 宮守 正博

指きりの小指が嘘を見抜いてる

この仮面墓までもつて行くつもり

始末書の数えは男の向こう傷

行くあてもないのに天気予報みる

河内長野市 山本 莞子

撒くほどはお金無いから豆を撒く

土筆の子かくれんぼせず出ておいで

冬の旅京の空には傘似合い

閻魔様ウインクしたら逃げてつた

八尾市 前田 紀雄

財界に物が言えない大政党

蟹工船派遣社会に生きている

初生りの風呂吹き大根酒進む

馬耳東風政治災害派遣切り

八尾市 田邊 浩三

魂胆はホワイトにある孫のチヨコ

いつ咲こか頭痛める蕾たち

訴える地球の涙ゲリラ雨

親友も敵の一人になる入試

八尾市 中島 春江

えらい人最敬礼も板につき

追儼式演技の下手な鬼もいて

一人寝の眠りをさます猫の恋

友の計を聞きたる夜の肌さむし

八尾市 寺川 はじむ

ライバルと情け酌み合う定年後
節ぶしのネジが知らせる古希の坂
面白さちょっぴり添えて来る噂
年玉へやっぱり論吉幅効かす

羽曳野市 森 下一 知

螺子ひとつ転がるままの古い住まい
家計簿に知恵を絞った染みがある
血の通う痛みを分かつワークシエア
職探し職に体を当て嵌める

羽曳野市 仲谷 真一

おみくじが吉で今年も始まった
宝くじ三千円当りプチピンク
麻生さん不幸の手紙書いている
正月だ松の位を食べへに行く

羽曳野市 松本 静子

水仙に囲まれている石仏
寒い日はおでんにしよう酒を汲む
露の薔ほろにがいけどなつかしい
故郷の川大滝に虹が出た

羽曳野市 宇都宮 ちづる

痴呆症錆びぬ思い出持っている
元氣だと職場閉鎖の友が言う
突き進む知事をいつしか支持してる
政界に変の一文字待ち侘びる

堺市 近藤 治子

すみません喉につかえる我の強さ
すみませんで済まない事も有るのです
母の供湯治宿までバスに揺れ
早い目に出たが乗り越しギリギリに

堺市 大隅 克博

まいどですあの文法が解らない
醜名^{しづな}だけ見ると勝てないはずがない
野良猫に間の取り方を学んでる
秒針を手本に今日もマイペース

堺市 羽田野 洋介

ふたりだけの秘密楽しむじいと孫
初詣であの大吉は今どこに
二次会へまともな芸は不必要
怪しい仲いいえこれでも夫婦です

枚方市 二宮 紫鳳

幸せをくれる笑顔の孫が来る
歌声に笑顔をのせてボランティア
誰にでも好かれる人で芯がない
梅の香に春の便りがいさみ足

枚方市 河田 洋子

嘘つけば顔にすぐ出るうちの人
勧誘に嘘を並べてお断り
あの世まで心に秘める嘘もある
ライバルがあつて楽しむ習い事

枚方市 小川 良吉

微笑んで荒れた世癒す摩崖仏
神の御手漏れた僕にも明日がある
仏前にやましい心消えていた
神の国戦に負けて蘇る

枚方市 坂本 ミヨノ

古希の集い返信少し電話吼え
友情に心打たれて神参り
冬がまし夏がましだと医者通い
四方の神感謝の日々を老夫婦

藤井寺市 吉田 喜代子

節分の鬼も仲よく輪に入れる
三寒四温厚着が急に重くなる
思いのまま動かぬ筆に出る吐息
失策を笑う自分が可笑しくて

藤井寺市 津田 シルク

ビル林立いやしの色がみあたらず
リゾートの話白紙で山は山
春炬燵草餅があり笑い声
体重計こわれていると思う日も

藤井寺市 増井 ヨシ枝

へそくりを隠した場所がわからない
温もりを残して母の形見分け
傷つくから期待するのはやめておく
墓場まで持つて行く嘘ひとつある

吹田市 二宮 栄子

もう泣かぬ女になって一人住む
方言の姉からもう里ごころ
健康と句のねた捨て来た梅田
本命のチョコはあなたに供えます

吹田市 中村 十八娘

義理チョコがひよんな事から共白髪
活火山不平不満は私にも
梅便り待ち侘びているスニーカー
男傘未練一つをゴミの日に

寝屋川市 小嶋 みさと

白百合の香りほのかに部屋に満つ
背に負うた孫の挙式の晴れ姿
支給日を本人よりも知っており
梅咲いて心華やぎ若返る

寝屋川市 岡本 勲

気付くまで待つてやるのも思いやり
植え替えもつぎ木もできぬ年になり
若い頃が見たいと鏡のぞいてる
少子化で定員割れで再募集

豊中市 藤沢 長一

石仏歴史街道無事祈る
夫婦旅茶漬で終る我家好き
梅香る花に顔寄せ深呼吸
別れ際あつさりすぎて熱がさめ

豊中市 荒巻 夢

連れ合いと伊万里の皿で食むおせち
子も孫もみなわれを抜く背くらべ
化粧して母の形見の桐筆笥
幸福論読んで遠のく青い鳥

岸和田市 中岡 香代

ペットから激励されて出る散歩
通販のカタログを見てグルメ旅
ハンドルをもつと苛立つのんびり屋
ざりざりでなければやる気起きぬ癖

高槻市 片山 かずお

バイエルから抜け出せないでいるピアノ
心からのお詫びにしては頭が高い
チンをして食べてと妻に羽が生え
流行を追わぬ老舗の心意気

池田市 上山 堅坊

初恋は死ぬまで脳裏離れない
酔うほどに自己中になる友を避け
おみくじは信じないのに気にかかる
雑草は必ず育つ国にいる

門真市 矢阪 英雄

陽を選び背中を伸ばし大地ける
横たわる猫背の家系愚痴言わず
陽をうけて背中も丸く円満に
気にして猫背以外は不満なし

泉大津市 助川 和美

母卒寿祝える私七十歳
腐るほどあると言いたい金と愛
今年のおせち老母に合わせた嫁の味
ニュー嫁に息子の嗜好教えこむ

富田林市 古田 千華

シャキシヤキと菜の花漬けが似合う朝
あきらめず言葉の苗木植え続け
さりげなく地図渡された失意の日
スピードを押えて長いお付き合い

泉佐野市 稲葉 洋

うたかたの内定だった弥次郎兵衛
春彼岸すくめた首がまだ伸びぬ
真ん中は落ちつきません大広間
灯明を消して地獄の闇妄想

茨木市 島田 誠一

家事ひとつまかせぬ亡母の甘い下手
子の世話になるのが嫌でランニング
手術台逃げだせぬかとふとよぎる
おだやかに見えてチクチク刺がある

箕面市 寺井 柳童

綱の意地終って見れば手に賜杯
古寺訪ね歴史街道一人旅
母校から届く苦節の百年史
ロボットに子育てされる日も近い

奈良市 矢野良一

降る雪に風情を増した散歩道
万歩計歩数が増える春陽気
重低音心身酔わすジャズ喫茶
リタイアに写真の顔も間延びする

奈良市 尾畑なを江

早起きでふと良い事を思いつき
生き方が母に似てきた三姉妹
窓際へ移動したのでうたた寝す
成る程と納得のゆくあの親子

奈良市 岩本浩二

肩並べメールで会話女学生
酒タバコ気にせず老いて医者知らず
猫舌のパパでも熱燗だけ平気
宇宙葬空の仏に手を合わす

奈良市 阿部茶々

人形寺へ感謝の供養お雛様
笑いたいけど笑えない給付金
チエゲバラその生き様に喝采を
内緒にと言った話がやってきた

奈良市 辻内げんえい

陪審員もしも当たれば喜んで
蘆薈は飲んでからしてワイン通
時代劇見て長火鉢出してくる
過疎の村仲間はずれとなる怖さ

京都市 藤井文代

不況風停めるは神か政治家か
辛抱と我慢を着込む処世術
白黒がついても黒が白着てる
鍵渡す女心が罪つくる

生駒市 小西稔

大掃除余分な物も捨てにくい
スポーツも余分な事で世が騒ぐ
年老いて甘える相手妻一人
ペットより甘える心教えられ

篠山市 永井かほる

種注文何時まで出来るふと不安
豆料理手間ひまかけて作る幸
この寒さも菜園ぐりんたつぷりと
夏トマト冬小松菜に感謝する

尼崎市 河津正治

人一倍働いて得た自負を持ち
潮時を模索しながら時が過ぎ
貫いた真面目が父の自負だった
手料理の味引き立てる箸捌き

尼崎市 藤岡りこ

魚市場喧嘩腰だがいきが良い
リーダーの素質がのぞく変わり者
変るトップに世界平和を期待する
おばさんパワー土産物屋も音を上げる

尼崎市 小池 幸子
振り返り過去をざんげの老いを生き

今一度鍵確かめて床に着く
手に馴染む筆をえらんで今日の楽
派手目好き娘のお古と言っておく

宝塚市 丸山 孔一

創業祭なんでこんなの買ったのか
影法師たまにや一人で生きてみる
愛犬を抱いて見上げる眼が可愛い
生きてます妻の寝息に安堵する

西宮市 石野 照代

天下りこっちの水も甘いぞ
嫁行つた娘の部屋にも豆をまく
母と娘と会話はなやぎひな飾る
法事すみさびしく広い部屋となる

三木市 山口 久子

如月は節分立春まだ寒い
総理殿安心する日何時ですか
四面楚歌横綱強く切りぬけた
リハビリの自転車こぎが夢に出る

三木市 広瀬 房江

腕に縋りかけて寿司巻く鬼は外
振り袖の二十歳の孫の初化粧
よい音を聴くハッピーな聴診器
ハンカチもパンツも綿で恙ない

加東市 黒崎 美紗子

臘梅のかおり寄道させる朝
寒いほど元氣が出ます球遊び
踏まれても花芽いっぱいタンポポよ
寒梅の元氣もらいにバスツアー

加西市 金川 宣子

ネクタイをはずせば妻に締められる
娘の家に行くと片付けして帰り
人生のクライマックス波静か
デバ地下の試食で小腹満たしてる

明石市 梶谷 和郎

加齢臭生きるがための技と知る
首相より博士の方に夢がある
種の保存進化続けるDNA
うまくいく今日も一言少な目に

美作市 小林 妻子

気前よい返事も当てになりません
とりあえずど忘れのまます握手
漫画ネタばかりが切っている世相
リストラへ忠義の首も切りおとす

府中市 馬場 利子

年金でつなぐ暮らしに課税する
菜の花へ黄色の蝶の舞い上手
孤独さに風の絵皿に花を盛る
幸せの答えをくれる春便り

府中市 岩本雅代

病名を伏せて介護に笑顔する
麦飯を食べてつないで今至福
百均でまさかと思う人と会い
一本のマッチが欲しい老いの夢

竹原市 若年幸子

逸速く春つかまえる花時計
夫より犬が大事と言う平和
箱入りにしすぎて虫に狙われる
雛飾り想いしじみ七十年

竹原市 六田半徳

麦の芽を踏んで根張りの蟹歩き
早春の麦踏み作業温くなる
世直しの風よ吹けふけ休耕田
苦勞した亡祖母の笑顔を懐かしむ

阿波市 三浦千津子

穏やかな話にしよう年の功
見ぬ振りの母の眼時にこわかった
生き方を変えるドライな風にのる
人生行路幸福駅はまだ遠い

香南市 近森功

絵手紙の一句が温い母の文
一服を缶コーヒーで妻は呼び
外出用三面鏡で顔を選ぶ
長生きの褒美難聴白内障

香南市 桑名孝雄

やんごとないお方で国が治まらぬ
これしきの不況戦後に比べたら
くじけるな敗者復活戦がある
呆けという手管もあつた老いの知恵

山鹿市 阿部ミツ子

働いて働いて今米寿なり
友の主今逝きしなり寒の月
吹きまくる不況の風よいずこまで
連呼する小さな町の顔ぶれや

今治市 渡邊伊津志

こだわりの一つに月は見栄張らぬ
前向きの氣力に変える見栄を持ち
ほどほどの見栄は貴重なエネルギー
受け止める側の力を問う作家

唐津市 岩崎實

老妻の童女となりて雛と坐し
己が名を呼んで一人で語りかけ
すつきりと目葉落ちた今朝の春
裏街道金のめぐりのとどこおり

出雲市 川島和歌子

煩惱という重い荷物に生かされる
行き詰り思案にくれて膝を抱く
早春の障子に朝日動き出す
雪こんこマンガ一冊読み終わる

松江市 松浦登志子

まつたりと紅茶の色に溶けていく
還暦が喜寿と米寿の祝いする
一割の手土産持つて寄付依頼
つれあいの営業用の笑顔見た

松江市 山根邦代

ストープより日差しが誘う散歩道
飽きもせず漢字パズルに夢中です
ふかふかのコート薄手に替えて出る
バレンタイン上げたい人は遠すぎて

雲南市 渡部好榮

よろよろと冬のゴキブリ今日も生き
よく噛んで食べて元気な牛になり
過疎に住む鴉は過疎に語りかけ
それなりの暮しになれた長電話

雲南市 福岡博利

童歌ふんわりこころゆらぐよう
仁多米のお餅こんなに長くおび
米寿です九ちゃんの歌で万歩計
同窓会くわだてるもの居なくなり

雲南市 菅田かつ子

はかなくて美しすぎて落椿
背伸びしてみてもこの頃届かない
また役者揃い話に花が咲く
おしゃれして七十五歳の好奇心

安来市 原 煩惱児

ああ傘寿多病息災日々牛歩
半年を宇宙で暮らす憂さ晴し
雪求め元気な孫と雪合戦
腹の立つ話はしない聞かぬこと

倉吉市 藤井 美津恵

外は雪花屋は春の真っ盛り
節分の豆は袋に入れてまく
立春を過ぎた日差しに日やけどめ
振り込めの詐欺の講習真剣に

倉吉市 前田 喜美子

文明が真綿で首をしめて来る
雪深しんカタログを見て夢の旅
お神酒ならほんの少しと下戸も呑む
荒れる田畑切なく見てる老夫婦

倉吉市 酒井 芙美子

倦怠期抜けて温かフルムーン
賑やかに笑ってすごす三世代
どうしようもしも癌だと言われたら
子供には苦勞かけたくない老後

米子市 小塩 智加恵

平坦な道は笑顔を振りまいて
元氣だと時計の針が早くなる
不況風年金生活よけて吹け
残された時間大事と時計買う

米子市 見山温子

山の柿取る人もなく雪帽子
バイキング不思議と腹の底がない
老いたかな午前様にも怒らない
雪が降り隣近所が遠くなる

境港市 中井虎尾

美術館出る人の顔芸術家
様子見に梅二つ三つ冬の晴れ
内定が取消しとなり泣いている
外人のうまい日本語俺の負け

鳥取市 谷岡清子

すっぴんで歩く心はさわやかだ
脳にごみ溜まったらしい次が出ず
うつうさを経に託して逃がしをる
こっそりと金のなる木を芽も出ない

鳥取県 岩崎和子

コーヒーの香り求めて美容室
九つの病氣征服生甲斐に
ダイグイと魅かれた人とまだ一緒
入浴中足屈伸にマッサージ

鳥取県 西谷悦子

やり過ぎの肥やしの結果今の世か
ときめきを覚える空の蒼さなり
今に咲きそう蕾うきうき愛でている
真っ白のまま汚れたくない器

鳥取県 岡村孝明

歯と歯茎磨き老いても歯を守る
学歴は無いが資格はたとある
大吉を信じ不況の社を興す
人の心裸にさせる縄のれん

鳥取県 加賀田志延

江戸城を朗朗渡る詠進歌
国沈滞せて唇には歌を
地吹雪を冬の目玉にする津軽
道行きの佳境へ散らす紙吹雪

鳥取県 田口清帆

オバマサン世界平和を待っている
ありがたい年金生活潤滑油
人生は虚実まるごと愉しんで
貧しいが笑顔の妻が宝です

鳥取県 岡本幸枝

もつともな理屈息子に諭される
病室に歩けぬ夫を残し出る
生かされて心機一転立ちあがる
新しい年に奇蹟と夢がある

鳥取市 近藤秋星

菜の花の天ぶら春をもう食べた
二年ぶりノロウイルスの御訪問
食堂を閉鎖にさせたウイルスよ
春が来て毛糸の帽子とも別れ

鳥取市 山口 千代子

我慢しろ貝になれよと脳が言う
共稼ぎ寝てる子起す身の辛さ
お守りか父母よりはるか長く生き
毎日の不況テレビは見たくない

鳥取市 坂本 智子

積怨もこれも人生歩む道
恋人と楽しみながらタンゴ踏む
高く飛び鳥になりたい道はなく
夫婦とは言葉少なくて阿吽

鳥取県 下田 茂登子

悩むより言つてよかつたお月さま
ここ一番無口になつて時を待つ
五十歳おんな盛りを光らせる
一日をテレビと暮らす雪の中

鳥取市 高浜 勇

揺らいでる柱に子らは寄りつかず
雪雲と青空天で綱引きす
まき餌してまんまと税をつり上げる
公認が欲しくて口に蓋してる

鳥取県 飯野 菖子

様々に揺れた世界も年が明く
情熱をいっぱい見せた寒椿
サンキューと手を上げ少し若返る
ほどほどにしておこうかな明日がある

鳥取県 橋谷 静江

年かいな昔話が懐かしい
世の中の変わり行くさま見る元氣
捨てかけたごみをエコだと持ち帰る
子や孫の笑顔に出合う日曜日

鳥取県 大塚 美代子

初詣で秘めた願いを絵馬に書く
掛け替えたカレンダーから春が来る
七福神のせて漕ぎ出す年男
真白な雪にとんどの火が燃える

鳥取市 大前 安子

雛飾り桃は寒風受けて耐え
登り坂分けて背負った人と老い
夫婦坂ガッツポーズで橋の上
お互いの丸い背にある人生路

鳥取市 津村 律子

議事堂がブレる議論に泣いてます
塩掴む力士の向こう別嬪さん
おべんちゃら分かつていても成るその氣
よい人よりも言われてみたいいい女

お願い

川柳塔への投句（川柳塔・水煙抄・愛染帖・
一路集・檸檬抄・初歩教室）は毎月15日必着で
締切っていますので日曜日、祭日に拘わらず締
切りを厳守して下さい。

第2回「オニザキ」ごま川柳「入選句発表表」

川柳塔社主幹

河内天笑 選

ご応募ありがとうございます。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

小粒でも元氣貰えるごまパウー
すりごまをお助けマンにしている妻
ひと振りのごまの元氣を貰う朝
すりごまと薬確かめ旅支度
金平もごまめもごまが助演賞
卵かけご飯に海苔とすりごまと
だんじりの休憩ごまの握り飯
ごまよごし春の香添えるふきのとう
健康を願って母のゴマ団子
弁当を開けてびつくりごまハート
鍋囲みポン酢の中にごま香る
ごま和えのほうれん草は無農薬
みそラーメンすりごま浮かし味が生き
ほうれん草ごまであえたら食べてくれ
おにぎりの中からゴマがコンニチワ
ごま塩を忘れず入れる非常食
ひと味を助けてもらうごまのコク
ごまパウー祖母ご自慢の肌の艶
食卓に何時でもごまが置いてある
健康と美肌へママの胡麻尽くし

【準特選】

ゴマ和えと煮魚が好きばあちゃん子
みんな好きゴマを切らしたことがない

【特選】

レシビまで添えて娘へ送るごま

犬山 関本かつ子	大阪 西出 楓楽	大阪 岩崎 玲子	河内長野 山岡富美子	寝屋川 富山ルイ子	河内長野 村上 直樹	香芝 大内 朝子	河内長野 坂上 淳司	八尾 田邊 浩三	八尾 井上登美子	八尾 八倉知佐子	札幌 小沢 淳	大阪 井丸 昌紀	八尾 井上登美子	河内長野 山本 莞子	寝屋川 籠島 恵子	鳥取 斉尾くにこ	岸和田 次井 義泰	堺 志田 千代	豊中 松尾美智代	堺 羽田野洋介	豊中 源田 啓生	豊中 江見 見清	京都 三宅 満子
----------	----------	----------	------------	-----------	------------	----------	------------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	------------	-----------	----------	-----------	---------	----------	---------	----------	----------	----------

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50余年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわりの、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーション・セールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

愛染帖

新家 完司 選

枚方市 寺川 弘一

ボディビルカ仕事の為じゃない

(評) さまざまな器具を使い、時間をかけて見事な筋肉をつけても、力仕事をせず「見せるだけ」ではエネルギーの無駄ではないか。

和歌山市 古久保和子

名も知らぬ島よりゴミもどんぶらこ

(評) バスポートがなくてもゴミは平気で国境を越えて来る。椰子の実ならロマンチックな詩になるが、ゴミは自治体を泣かせるだけ。

豊中市 水野 黒兎

目の底で蚊の飛びまわる古稀の春

(評) いくら追い払っても逃げず「しつこい蚊だなあ」と思っていたら飛蚊症。待ちかねた春というのに鬱陶しいことである。

堺市 奥 時雄

老妻に甘えてみたら喜ばれ

(評) 大方の女性は母性本能をくすぐるように甘えると喜ぶ。ただし、甘え過ぎると「頼りない男!」と馬鹿にされるから要注意。

坂出市 綾井 嘉彦

このころは家計簿なしのあるがまま

(評) 家計簿をつけると無駄な出費を抑えることはできるが少し窮屈。あるがまま安穩に暮らしても破綻しない分別のある歳になった。

吹田市 太田 昭

剥製になった鷹から睨まれる

(評) 剥製になっても鋭い眼光の鷹。「充実した一日であったか?」「何か一つぐらい善いことをしたか?」と、問いかけてくる。

豊橋市 藤田 千休

国会に乳母日傘が群れている

(評) 立派な政治家になって国民のために働きたい!という志もなく、成り行きで親の地盤を継いだだけの頼りないほんばんたち。

鳥取市 津村 律子

まっすぐに歩けることが羨ましい

(評) 「まっすぐに歩ける」「しつかり掴める」「おいしく食べられる」など当然のことが難しくなっているから健康のありがたさが分かる。

池田市 上山 堅坊

この世から消える姿が描けない

(評) 事故で死ぬのか? 病気で死ぬのか? それさえも思い描けない。ひよつとしたら死なずにずっと生き続けるのかもしれない。

和歌山市 福本 英子

五本指上手に履けた今日は吉

手の届く位置に耳かき置いてある

西宮市 片山 忠

自画自讃まだ百メートル走れます

年寄りがみんな座れるいい車両
草餅とお茶でほっこり子と会話
コンロにもお風呂にも言うありがとう

大阪市 大川 桃花

給付金振り込み口座作り待つ

奈良漬がいい味になる寒の明け
平成の貧乏昭和ほどでなし
反対の拍手も少し混じって

三田市 堀 正和

小宇宙向こう三軒両隣

時節がら義理チョコ配り止めにする
風上がる空の青さを測るよう
シャカシャカと菜の花あえに胡麻をする

藤井寺市 太田扶美代

総中流だった時代が懐かしい

大不況強欲どが夢のあと
健康で指先にまで力湧く
よたよたと老いがわたしを包囲する

海南市 小谷 小雪

デザートにサブリメントと葉あり

プラネタリウム深い眠りにさそい込む
河内長野市 黒岩 靖博

健康で指先にまで力湧く

和歌山市 木本 朱夏

よたよたと老いがわたしを包囲する

枚方市 丹後屋 肇

衆目にテンション上げる街宣車
富田林市 片岡智恵子

絵馬の数すでに定員超えている
枚方市 海老池 洋

賑やかにテレビをかけてひとり飯
樺原市 居谷真理子

天上の白は母なる人の骨
島取県 石谷美恵子

拝んでも神はビリオド不意に打つ
米子市 青戸 田鶴

赤い靴はいてさつそうとはゆかぬ
日本丸の行方心配せぬことに
海南市 三宅 保州

生きている意味を問われてうろたえる
新しいタオルに顔を引つかかれ
堺市 志田 千代

誤診百していつぱしの医者になる
けもの道軽三輪が走っている
島取市 岸本 宏章

重宝な一身上という都合
医者通いできる元気な足がある
大阪府 米澤 俣子

生きている証石鹸すぐ瘦せる
成人式の晴れ着に負けぬ熱帯魚
大阪市 萩原 大朔

眠いのに入ると目が冁える
目に浮かぶ撫でたいような里の山

和歌山市 上地登美代

一適の水にも騒ぎだす油
峠から春が揉み手で降りてくる
弘前市 高瀬 霜石

甘栗でだいたい女たまされる
口酒はごめん尻尾が生えるから
堺市 矢倉 五月

どっちでも良いからハイと言っておく
食べ物のコマーションならよう解る
島取市 平木 公子

息子らに内緒にしてる医者通い
メモ眺め記憶回路を繋いでる
香南市 桑名 孝雄

太平洋があるのに僕は釣り嫌い
藤井寺市 若松 雅枝

どう始末しよう筆筒の晴れ着たち
妻子には解らぬ僕のデリカシー
唐津市 山口 高明

不器用な自分をやとと自覚する
紀の川市 紀の川市 籠島 恵子

びつたりの時間通りに過疎のバス
早蕨がグーの形で背伸びする
高知市 辻内 次根

生活大国などと言った頃もある
豊中市 池田市 上嶋 幸雀

年賀状が教えてくれる友の無事
松尾美智代

八王子市 播本 充子

目立っても目立たなくても年会費
吹田市 早泉 早人

忌憚なく話ができる酒の席
藤井寺市 鈴木いさお

まだ酔うておらんぞナムギナマタマゴ
京都市 高島 啓子

一時間読まれ新聞よれよれに
堺市 羽田野洋介

堂々と日の丸出すぞ祝祭日
島取市 岸本 孝子

梅干によく似た皺の顔になり
神戸市 山口 光久

迷うたびひらいています歎異抄
大阪市 谷口 義

マスクして降参はまだしていない
リハビリで小豆こきになめられる
奈良市 岩本 浩二

練炭の豆煮る音に童唄
倉敷市 撰 喜子

お袋のおでんが酒をうまくする
島取市 田村 邦昭

びしっとするキムチ口中太さわざ
大阪市 柴本ばつは

字幕頼りにテレビ見ている老いのイス
八尾市 吉村 一風

長電話耳かえ手替え椅子に座し
奈良市 尾畑なを江

大阪市 井丸 昌紀
マニユアルが閃きの芽を摘んでいる

西宮市 藤本 直

雨の日は私も犬も哲学者

寝屋川市 太田とし子

ぱつと遣う金は生氣に満ちている

高槻市 片山かずお

耳もとでささやかれると好きになる

西宮市 緒方美津子

長生きをしたら弔辞も花も減り

寝屋川市 岡本 勲

鬼門に尻向けて巻き寿し丸かじり

八尾市 生嶋ますみ

恵方巻き一本平気だったのに

島取市 土橋 螢

春分の日に夕顔の種を蒔く

大阪市 西川 冷子

花粉飛び黄砂も連れて春が来る

河内長野市 坂上 淳司

古稀傘寿従え卒寿湯浴み旅

吹田市 中村十八娘

噂話だけして帰る万歩計

弘前市 相馬 銀波

朝刊の見出しも愚痴が多すぎる

堺市 山本 半銭

封じ込めた愚痴が発酵する気配

和泉市 横山 捷也

パソコンに馬鹿にされてる古稀の坂

唐津市 井上 勝規
孤食増えいただきますが消えてゆく

シドニー 坂上のり子

大雪になつてテレビ見てる汗

大阪市 小谷 集一

老人になつたなどとは思わない

八王子市 川名 洋子

ラッシュ時に行楽帰り小さくなる

河内長野市 村上 直樹

生はじめを止めたらとれた肩の凝り

西宮市 牧瀬富喜子

友は皆出払っている木曜日

札幌市 三浦 強一

居酒屋の没句供養は懇ろに

箕面市 広島 巴子

帰宅待つ二十三時の大あくび

羽曳野市 吉村久仁雄

草笛が宴芸となる都会

河内長野市 水谷 正子

敬老のまんじゅう二つこり食べ

鳥取県 竹信 照彦

煙草止め気になつてきた血糖値

京都市 三宅 満子

えべっさんもこの不景気に困り果て

海田市 堂上 泰女

不況風私の家の戸もたたく

堺市 加島 由一

はかなげにしなやかだけど妻つよい

鳥取市 倉益 一瑤
虫害に反抗してる肝の虫

日立市 吉成 ます

命まで取らぬと病同居する

岸和田市 土橋 房枝

刻む音ないキッチンに電子音

堺市 荻野 像山

いつ逝つてもそうか程度の年になり

八尾市 村上ミツ子

空つばの頭へ何をつめようか

和歌山市 喜田 准一

立て板に水へ返事がずれてくる

西予市 黒田 茂代

年賀くじさえ一枚も当たらない

大阪府 澤田 和重

ライバルに煽られやる気湧いてくる

鳥取市 有沢せつ子

饅頭を食べ緊張がゆるみだす

大阪府 初山 隆盛

ベンチャーの社長机に招き猫

高槻市 安田 忠子

免許証身分証明のみになり

和泉市 西岡 洛酔

雨しどストレスひとつ背なに負い

紀の川市 宇野 幹子

募金箱素通りをした今日の悔い

大阪市 坂 裕之

太陽と母の温もり着て眠る

大阪市 榎本日の出

堺市 村上 玄也

香芝市 大内 朝子

東かがわ市 川崎ひかり

吹田市 穴吹 尚士

藤井寺市 高田美代子

交野市 山川日出子

和歌山市 磯部 義雄

大阪市 田浦 實

紀の川市 北山 絹子

唐津市 坂本 蜂朗

大阪市 津村志華子

寝屋川市 森 茜

大阪市 伏見 雅明

松江市 川本 畔

和歌山県 森下よりこ

鳥取市 武田 帆雀

東大阪市 北村 賢子

岸和田市 森元ふみよ

宇部市 平田 実男

松江市 松浦登志子

八尾市 田邊 浩二

西脇市 七反田順子

美祿市 安平次弘道

和歌山市 松尾 和香

神戸市 山崎 武彦

大阪府 小栢こずえ

大阪市 榎本 舞夢

八尾市 宮崎シマ子

篠山市 円増 純子

東かがわ市 木村あきら

長岡京市 山田 葉子

松江市 相見 柳歩

大洲市 花岡 順子

大阪市 奥村 五月

倉吉市 野口 節子

奈良市 矢野 良一

堺市 西村りつえ

京都市 坪井 孝一

生駒市 飛水ふりこ

羽曳野市 森下 一知

堺市 近藤 治子

第33回 全日本川柳2009年札幌大会

日時 平成21年6月28日(日) 午前10時開場
会場 京王プラザホテル札幌 2F エミネンスホール
〒060-0005 札幌市中央区北五条西七丁目一

交通機関 新千歳空港からJR札幌駅(快速エアポートにて約36分) 札幌駅より徒歩5分

宿題 第一部 4月15日締切(当日消印有効)
宿題 第一部 高校生・一般の部

「岬」赤井 花城選 「牛」辻 晚穂選

「彫る」井原みつ子選 「広」い 大野 風柳選

「ボテト」米島 暁子選 「広」い 岡崎 守選

「自由吟」田辺 進水選

専用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。

投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛郵送または郵便振替口座へ送金のこと。(当日消印有効)

投句先 小中高生は投句料無料。
〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

TEL 06(6352)2210 FAX 06(6352)2433
(社)全日本川柳協会 宛

郵便振替口座 0097019-13575

宿題 第二部(当日投句、11時10分締切)

「像」熊谷 岳朗選 「走」る 西出 楓楽選

「自然」一島田 駱舟選

第二次選者 今川 乱魚 大木 俊秀 佐藤 岳俊

参加費他 四、〇〇〇円(参加費二、〇〇〇円、昼食他二、〇〇〇円)

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳札幌大会実行委員長 石井 有人

△表彰式典・前夜祭ご案内▽

◎表彰式典 平成21年6月27日(土) 午後5時半

(功労者・大会十年連続出席者・川柳文学賞)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場

会場 京王プラザホテル札幌 2F エミネンスホール
〒060-0005 札幌市中央区北五条西七丁目一

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)

大会・前夜祭のお問い合わせ先
〒069-00813 北海道江別市野幌町31-21

浪越 靖政 方 日川協札幌大会事務局 宛

TEL・FAX 011(389)5340

携帯電話 090-5222-5373

大会・前夜祭参加費の送金先 4月15日締切

郵便振替口座番号 02740-3-65843

日川協札幌大会事務局

△宿泊・観光ご案内▽

宿泊 京王プラザホテル・札幌グランドホテル他

宿泊料金・一泊朝食付・税込み 11,000円〜16,500円

航空・宿泊パックもあります。

観光▽運河と硝子の街 小樽を巡る

6月27日(土) 12〜17時 札幌駅北口 鐘の広場 12時集合

最少催行人員 35名様

▽旭山動物園・世界遺産の知床を訪ねる

6月29日(月)〜30日(火) 32,000円

ご宿泊ホテルへお迎えに上がります。

宿泊・観光申し込み・問い合わせ先

トップツアー(株)札幌支店 担当者・岡本 康佑

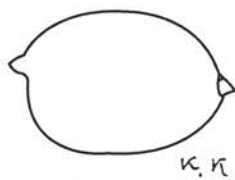
TEL 011(242)1167 FAX 011(222)4357

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

投句数 698句



「永遠」 高瀬霜石選

永遠に愛するなんて下手な嘘
永遠に平和は無いと知る地球
九条を永遠に見守る彬の碑
永遠の愛三食昼寝留守が良い
永遠に続く我が家の団子鼻
不老長寿の葉あつても飲みません
永遠に円周率を書いてやる
永遠の謎戦争が起きるわけ
永遠の愛が荷崩れしてしまふ
神さまは永遠というカーテンの中
写経百卷永久のいのちを予約する
カブセルを埋めた母校が消えてゆく
永遠は一瞬にあり花の芯
永遠の話なるほどお坊さん
永遠の愛をハワイへ置いてきた

岸和田市 雪本 珠子
大阪市 鶴田 遠野
弘前市 福士 慕情
鳥取市 加藤 茶人
黒石市 相馬 一花
大阪市 谷口 義
豊中市 藤井 則彦
唐津市 仁部 四郎
大洲市 中居 善信
枚方市 寺川 弘一
弘前市 高橋 岳水
今治市 渡邊伊津志
豊中市 居谷真理子
豊中市 江見 見清
藤井寺市 鈴木いさお

「永遠」 木本朱夏選

鶏と卵の謎がまだ続く
大海は語る現在過去未来
永遠に疑問は続く空の青
永遠に生きたいなんて恐ろしい
永遠に月曜の朝やつて来る
信じてはいないが永代の供養
永遠に円周率を書いてやる
永遠に続くだろうかルート3
母の子でありたい次の世も次も
バイブルに永遠誓い生き難い
永遠に馬鹿で通したがんこ爺
永遠に染めない白は白のまま
永遠という名の顔でいる美人
輪廻転生今度は月で恋をする
満ち引きが続く裏切り劇つづく

鳥取市 岸本 宏章
松江市 三島 淞丘
篠山市 二階 幸子
寝屋川市 森 茜
鳥取県 斉尾くにこ
三田市 堀 正和
豊中市 藤井 則彦
大洲市 花岡 順子
鳥取市 福西 茶子
岸和田市 土橋 房枝
豊中市 藤沢 長一
大阪市 川原 章久
和歌山市 磯部 義雄
篠山市 遠山 可住
黒石市 佐藤 古拙

南極の水もそろり解けてくる
 永切のライバルですか神同士
 永遠にチャンスが来ない訳は無い
 信じてはいないが永代の供養
 永遠の謎ですモナリザも妻も
 永遠にタイタニックは海の底
 永遠の愛が家裁で揉めている
 永遠に何か足りない玩具箱
 永遠に疑問は続く空の青
 一瞬も永遠恋に落ちたとき
 永遠の愛を語って腹が減る
 永遠に持続させたいほっかほか
 永遠に続く男女のジャンケンポン
 永遠の愛を神父は信じない
 永遠にゴキブリを追う蠅叩き
 お多福の面永遠に外さない
 永遠に忠実なのは犬ぐらい
 永遠のぼくのテーマはモテること
 仮面もワタシになって剥がれない

秀句

弘前市	今	愁女
三田市	北野	哲男
高槻市	佐甲	昭二
三田市	堀	正和
池田市	上嶋	幸雀
日立市	吉成	ます
岐阜市	平野あすま	
松山市	高橋	宏臣
篠山市	二階	幸子
豊中市	水野	黒兎
大阪市	川端	一步
神戸市	山口	光久
横浜市	小野句多留	
大阪市	板東	倫子
和歌山市	福本	英子
大阪市	川原	章久
京都市	高島	啓子
三田市	白井	二英
犬山市	金子美千代	
鳥取市	岸本	宏章
和歌山市	古久保和子	
大阪市	神野千恵子	

流暢な関西弁は不朽なり
 語り継ごうか父の自慢の武勇伝
 貧しさが代代継がれいく家系
 永遠に貧乏神と待ち合わせ
 永遠の平和願って銃を向け
 語り部の涙よ永久に反戦歌
 永遠の謎戦争が起きるわけ
 今ここで立たねば永遠の不発弾
 永遠は宙のどこかの落し穴
 永遠の長さがわかる歳になる
 永遠の大地になつてくれる母
 永遠に何か足りない玩具箱
 陽はすでに西 永遠は遠すぎる
 永劫のライバルですか神同士
 とわの若さ神よ終身刑ですか
 永遠は一瞬にあり花の芯
 永遠にトムとジェリーという夫婦
 永遠に忠実なのは犬ぐらい
 永遠に山から出られない木霊

「秀句」

大阪市	升成	好
枚方市	小林	わこ
大阪市	近藤	正
大阪市	高木	道子
竹原市	六田	半徳
河内長野市	村上	直樹
唐津市	仁部	四郎
京都市	都倉	求芽
大阪市	岩崎	玲子
寝屋川市	籠島	恵子
海南市	堂上	泰女
松山市	高橋	宏臣
米子市	政岡日枝子	
三田市	北野	哲男
長岡京市	山田	葉子
橿原市	居谷真理子	
和歌山市	古久保和子	
京都市	高島	啓子
東かがわ市	清川	玲子
和歌山市	福本	英子
八王子市	播本	充子
河内長野市	山岡富美子	

誹風柳多留一篇研究 44

増田 忠彦・山口 由昭
小栗 清吾・伊吹 和男
山田 昭夫

清 博 美

328 揚詰めの座敷赤子の声がする

増田 揚げ詰めは、「特定の芸妓や遊女などを連日独占して遊興にふけること」。

吉原、昼の妓楼座敷の景。遊女は昼下がりの束の間のなぐさみごとで、他人の赤ん坊や幼児を借りて相手にすることが多い。たまの居続け客よりも一歩進めた連日の揚詰めの客、遊女も気兼ねのない間柄であらう。向こうの赤ん坊を借りてきて、座敷にその声がする。

わつちかうみんなした子だとつれて来る

安七楼 4

かした子にうつり香の有中の町

拾七 6

揚つめと相談をする取上婆々

露丸明三 大 1

あげつめへ引合たる取あげは、明二松 2

右の3・4「揚詰」とことわる句には、座婆が配されている。これは遊女が馴染み客の子を孕んだというものであらうか。自分が通うか通わないかは別にして、長期間遊女を仕舞って店には出させないといった大尺客もいた。仕舞を受けて寮に下がつている遊女の臨月が近づいた、妓楼から呼び出しを受けて出向いた客が座婆と相談をしているという句。

ただ、主題句は単なる昼座敷の揚詰め客でよいように思う。

小栗 賛、もう一つなつとくがいかねが……。清 賛。

329 俄雨不二を目あてにかけつける

増田 俄雨と越後屋の貸し傘。通町からは富士が見え、駿河町の両側を占領する越後屋と富士というのも江戸人自慢の景であった。俄雨にあつて貸し傘を借り、富士をめがけて通りをかける。遠く空は晴れて富士が浮かんでいるのであらう。

ごふくやのはんじやうを知ルにわか雨

明五梅 1

山口 賛。なれどいかにも作った句です。

小栗 賛。富士→駿河町→越後屋だけの句で、遠景の富士山は不要と思う。

清 同。

330 どくだてのやうに初会ハ喰ぬなり

増田 毒断では、「病気の折、身体害としたり、薬効の妨げとなる飲食物を避けて食べないこと。どくだち」(日国)

吉原で初会の女郎。ツンとしてろくに口もきかず、引付け以外は壺もつき合わないし、箸を持つこともない。部屋持ち・座敷持ちといった格のある遊女の場合であらう。

初会からくわせてたいこ式分貰い

安元梅 2

清 賛。

331 ふきとばしそうなさむらい吾人連

増田 貧乏侍の年礼。「吹き飛ばされそうなのは子供であろう。常雇いの小侍ならまだよしの方で、日雇いかあるいは実子を供に仕立てることもあった。

正月八またへゆのしむ小さむらひ

安八板5

清 賛

332 馬をしよつたが一生のふ人から

山口 ふひとがら【不人柄】は、人柄のよくないこと。人品のよくないこと。行いがよくないこと。(日国)

「馬」には動物の馬以外に①めくりカルタで青札十一に対する異称、②「付け馬」(吉原の遊客で、勘定が足りなかったり不払いの場合、娼家が勘定取りのためにその客に付けてやる日雇い)の略、③月経のこと、(以上「江戸語の辞典」)④丙午に生まれた女性、⑤芝居の馬の脚の略、⑥姿形の大きなものの例え、⑦将門や信長の異称、⑧浅草馬道の略(以上「川柳大辞典」)など江戸特有の意味を表すものに枚挙の暇がない。その取り方によって当然句の意味が違ってくる。

動物の馬を背負ったのは「鶴越え」の畠山重忠で、本句に似合いそうな気がするが、物語、芝居等で重忠はむしろ忠臣、善玉で、悲劇的な最後を別にすれば「不人柄」と言う形容は当たらない。

先人の解も多岐に涉っているが、筆者は「二生」に意味を持たせて、「丙午の女は男を喰う」という俗信を下敷に、「丙午の女を女房にして苦労した。あるいは短命だった。これも本人の徳のせいだ。」と解しておく。

二三人乗り人をおとす丙午

宝13宮3

丙午一ツ生くらひ年をと

宝13鶴1

小栗 不明。礎説のようなことか。

増田 道鏡をしよつた女帝はいけませんか。

清 不明。

333 二人りとも帯をしやれと大屋いひ

山口 大家は地主から長屋の差配をまかされている管理人で、家賃徴収、生活規律の管理などを行っており、「大家と言えは親も同然」という言葉の如く、長屋のあらゆる場面にでてくる存在である。句は長屋の間男の現場を押さえた場面で、亭主も加えて大騒動になっている所へ大家がよばれ「まず一人とも帯をしろ」とその有様をたしなめているのである。

先ッへのこぬいてのうへと大家い、

末四26

小栗 賛。亭主が間男を処断しても罪にならぬために、証人として大家が呼ばれる。

清 賛。

334 しほたれたれい人シの居る神楽堂

山口 しおたれる【塩垂れる】は、貧相になる。みすばらしくみじめな様子になる。なえる。れいじん【伶人】は、音楽を奏する人。特に雅楽を奏する官吏。楽人。(日国)

大きい神社では専属の神子がいって神楽を奉納するが、

弁天のよふだとはやる神楽堂

五〇23

のように参詣人を集めるために容色の良い神子を選んだようである。舞う神子は若い女で、後ろにいる太鼓や笛の楽人はその亭主であったり親であったり、一族で固まっていたようでもある。

かくら堂太鼓はおやに笛は伯父 宝13桜1
華やかな神子に対して楽人の方は地味で何となくしょぼくれて見えるのであろう。川柳では亭主のケースが多い。

神楽堂あほしを着たが髻と見へ

三4

清 賛。

陽 気

松本 文子選



孫たちが陽気をつくる小宇宙
雪も花もみんな踊りの輪に入る
はつとする社内陽気な笑い声
お酒飲めると聞いた時から陽気です
ばんばりの下を陽気に通り返け
幸せは陽気な人が傍にいる
真ん中に陽気な老母の居る安堵
持つ物を持って陽気な鳥になり
後編は少し陽気に生きてみる
嬉しいことだけ書き溜める日記帳
只酒で陽気に騒ぐ無礼講
ほろ酔いのマイクが長い数え歌
アルプスの滴が落ちる日の陽気
晩酌の前のわたしはよく動く
母さんが陽気だったら要注意
不況でも陽気大阪の女たち
華やかにはしゃぐあなたは本物か
ひたすらに笑った後の孤独感
ゴミ出しと知って陽気に鳴くカラス
わだかまり春の陽気にボンと解け
三月の雪陽気に垂れてゆく
見舞い客来ると陽気に振る舞える

照彦 英子 弘一 弘泰 アキ 菜丘 活恵 セツ子 一花 銀波 (宮)弥生 霜石 としお 倫子 のり子 章子 美龍 陽子 ふみ 淳

陽気には成れぬ日本の未来像
陽気な家に住みついた福の神
太陽と握手したくて弾む毬
サクサク絵馬が陽気な声をあげ
晩酌の後は陽気な父になる
雨の日は陽気な人の傍に居る
悲しみを陽気な孫にすくわれる
太陽のかけらが君についている
口笛で呼んでね窓を明け放つ
青大将すつぱり脱いだこの陽気
クラス会ラストは河内音頭です
陽気に生きりや運も味方についてくる
陽気な子いて救われた災害地
児のコート脱がせば少し陽の匂い
飲みなはれ陽気になれるお酒なら
佳

高明 彩子 あすま 妻子 玲子 節子 直 葉子 ばつは 泰女 まみ子 哲男 みね 圭一郎 伊津志 美津子 一粋 (志)千代 忠 森田明子 天 軸

私の陽気 おとなりの陰気
告別の写真陽気な顔のまま
お日さまに十二単衣を脱がされる
医者だけは陽気じゃないと困ります
二人とも陽気次々客が来る
太陽がほほえむ下で布団干し
老いてはおれぬむつくりと春の土
陽気な人は幸せに見えてくる
メリーウイドウ私には待つ人がいる
二人の境地 達人だけが知る
お喋りの達人妻を見て思う
達人の腕が宇宙へ夢飛ばす
達人の武蔵に学ぶ心技体
達人の芸を盗んで独り立ち
達人の腕は小細工などしない
道極めた人の厳しい目の光
達人のこだわりベルシヤ猫と住む
達人に出会って落ちた目の鱗
この人がまさかと思う筆捌き
達人のジャムパン少し値が高い
達人へ挑む嘲笑浴びている
ベイゴマの達人が居る路地の奥
達人のオカリナにコンドルが飛ぶ
達人にも色々あるぞ朝寝坊
達人の芸消えた火を点らせる
定年後農の達人目指す日々
達人と言われたからの転び癖
世渡りの達人敵と手をつなぐ
達人と言われ孤独に馴らされる
その道を極めてからの風当り
達人とおだて修羅場に送り込む

達 人

両川 無限選



いさお みね 黒兔 准一 政勝 弘子 帆雀 輝夫 慕情 公誠 扶美代 雅枝 くにこ 章久 伊津志 東吉 柳弘 富子 一風 幸雀 大朔

言い分けの達人となり自己嫌悪
 達人は昼あんどんと言われている
 ロボットも達人の技盗めない
 達人は達人の顔していない
 十年は早いとカンナ肩が言う
 達人と言われる人の無頓着
 食うだけの達人ならば家に居る
 達人の読みが外れている不況
 指笛の達人小鳥呼び寄せる
 達人の味より妻の味が合う
 生活の達人が住む過疎の村
 達人は普段ボーとしています
 やりくりの達人ついに音をあげる
 達人の住まいは路地の突き当たり
 達人と呼ばれ達人らしくなる

佳

達人が妻のパートで暮してる
 達人の域で社長のア来節
 達人と知らず説教してしまう
 達人になれないでいる不整脈
 達人の漣いた和紙には斑がない

人

燃え尽きてこそ達人の域に入る

地

達人と言われるまでの親不孝

天

おこりなどない達人の手の温さ

軸

達人の剣はこころを写し出す

武彦
 志千代

カロリー

田中 みね選



秀四

明子

美籠

直

遠野

霜石

雅明

アキ

弘一

強一

陽子

次根

茂代

一粋

哲男

宇野幹子

カロリーを氣にかけてたら食えませぬ
 結果よく久しぶりだねロース肉
 菜食も良いがパワーが出てこない
 うまいもの食べるカロリーなとうふふ
 パワフルな人が菜食主義という
 老いふたり低カロリーのボンコツ車
 カロリーだ血糖値だと日が暮れる
 ああ時代カロリーオフが売れている
 カロリーはどうでもよろし旨いもん
 店屋物食べてメタボの枷を負い
 おかわりは駄目とあつさり断わられ
 病院食慣れた頃には退院へ
 カロリーなど母は我流で子は育つ
 お喋りでカロリー消費しています
 カロリーは言うな食べたいもの食べる
 カロリーはともあれ母の塩むすび
 低カロリー分るが食べた気がしない
 低カロリー体重計が狼狽える
 完食後それでカロリー気にしだす
 カロリーを計算されて腹が減る
 ぜんざいの甘さ控えて食べ過ぎる
 カロリーが拗ねて食べても肥らない

ふみ

悦男

東吉

順子

充子

花匠

不二

弘子

孝一

茂代

修

菜摘

好文

絹子

小雪

雅明

登美代

カロリー計算脳のいうこときかぬ口
 低カロリー何だか元気でてこない
 カロリーのために犠牲になる料理
 カロリーの足りぬ男の不発弾
 不器用なカロリー胴にへばり付く
 カロリーはあと一口を思案する
 行く先のないカロリーが住むメタボ
 カロリーをエステサロンに捨てに行く
 ジョギングをしたからケーキ食べられる
 ガス電気カロリーあげて温暖化
 株価ほど下がらぬメタボ持て余す
 カロリーが箸の先まで迷わせる
 寄せ鍋の底にカロリーたむろする
 悲しみの時もカロリーちゃんと摂る
 重湯から粥カロリーに生かされて

みつこ
 章子
 黒兎
 玄也

扶美代

政勝

美千代

裕之

幸雀

光義

美久

雅枝

彩子

善信

明子

幹子

キヨミ

満子

アキ

帆雀

志田千代

軸

天

青虫ではないぞと父が叫んでる

カロリーなんて話題にさえもその昔

軸

天

カロリーなんて話題にさえもその昔

初歩教室

題 — 楽しい

鈴木公弘

形容詞を出題しました。形容詞は名詞の修飾語ですが、それゆえに名詞の部分の説明（わかりやすく）することはとも言えます。

また、形容詞を名詞化する（たとえば「楽しい」を「楽しみ」に変える）ことによつて、作者の感情をコンパクトに表現することも可能になります。このようなヤジロベエ的な役割を担う形容詞をいかに使いこなすか、まさに川柳づくりの楽しみの一つと言えましょう。

〓 中八の句 〓

原 愚痴ばかり言つてて楽しいはずがない 秋 星
添 愚痴ばかり言つて楽しいはずがない
原 人生のハンドル楽々廻らない 道 子
添 人生のハンドル楽に回らない
原 クラス会楽しく幼な日呼びもどし 節 子
添 クラス会楽しく子らを呼び戻し
〓 自分なりの定義づけをした句 〓
楽しみは夫と働く野良仕事 利 子
楽しみは家族の夕餉グラス酒 周 子

楽しみは自己満足のボランテア 昇

楽しみは最後に残す卵焼き りこ

楽しみは友へ届ける花だより 智 子

楽しみは旅立つ前の地図遊び 孝 明

楽しみを与えてくれる句会の場合 堅 坊

楽しみは飲み食べしゃべる旅の夜 かずお

楽しみは量より質の夕餉です 智加恵

自分にとつて楽しむとは、という観点からの句ですが、むしろ、このあとに続く具体的な楽しみ方を川柳家の眼で描くことが求められているのです。

〓 気になる句 〓

KYな喋り楽しい人と寝る 志 延

このKYは「空気が読めない」と読む流行語。時事吟は句が命です。

宿敵の鼻を明かしてはくそ笑む 光 弘

仕返しに成功したようですが、宿敵にも武士の一分を認めてやってはいかがですか？

旅立ちに楽しかったと妻が言い ちづる

妻の臨終に立ち会つた際の光景でしょうが、この句の作者は男性ででしょうか、女性ででしょうか。妻〓自分が自分の死と対峙して述べているのだとしたら、異様なほどドラマチックですし、別の夫婦の話だとしたら句そのものが他人事になってしまいます。作中の主語が誰であるかは大切な要素と言えましょう。

ハトかネコ見てる時だけ楽しい世 たん吉

厭世感のただよう川柳ですが、句意から判断すれば、上五は「ハトとネコ」と描くべきでした。

囲碁出来る楽しさ皆に教えない 綾 乃

釣り好きな方は「釣りの醍醐味教えない」とおっしゃるような気がします。そういう意味から、この句の「囲碁」は流れます。

楽しいと古稀を過ぎても言えるかな 孔 一

下五に使つた「かな」は、いわゆる切れ字感覚ででしょうか、それとも疑問符代わりでしょうか。いずれにしても、この句は結論を述べていません。未確定の句は想像の域を出ませんので「真情美」の真を満たさないことになります。

楽しさを実感出来る幸がある 忍 人

どんな幸かを明かさなければ読者には通じません。

五人組お喋り好きの食事会 嘉 彦

この五人には「たまたま気の置けない仲間」以上の意味はなさそうに思われます。たとえ

ば女性が三人集まれば「姦しい」代名詞となるように、川柳に数字を使う場合にはそれなりの意味が内包されていなければなりません。

〓 「も」の効果 〓

楽しいと暗示をかける旅もある 宏 造

笑い声絶えぬ楽しい犬も住み ミヨノ

式場も二人で決めて愛らし さだき

主張の効果を高めたいときに「も」を使う場合があります。前の二句目、三句目がそれに当たるでしょう。情景がよく見えます。しかし「その他いろいろ」と思わせて逃げるときにも使います。一句目の作品がそうです。したがって、助詞としての「も」は慎重に用いなければなりません。

Ⅱ工夫をすればよくなる句Ⅱ

原 ライバルがあつて楽しい趣味に更け 安子
添 ライバルがあつて楽しい趣味になり
原 趣味ありて余生楽しく日々至福 ます
添 趣味に生き楽しい日々の至福なり
原 自分史の楽しい場所にする葉 陽子
添 自分史の楽しい場所には忘れない
原 鉢植の梅を楽しむ堀こたつ 志郎
添 鉢植えの梅を楽しむ堀こたつ
川柳では口語体表記が原則です。
原 収穫の夢見て楽しい自家菜園 紀雄
添 収穫の夢が楽しい自家菜園
原 遠方に心飛んでる旅支度 隆彦
添 旅支度こころは遠い空にあり
原 受験生もうすぐ春よ桜咲く 冷子
添 受験生楽しいサクラ見に行こう
原 楽しいのは必ず苦しみが 稔
添 楽のあと苦が追いかけてくるといふ
原 夫との旅の楽しみ両手空く 文代
添 夫の手に荷物預ける楽な旅

原 楽しい話連れて行くバスの旅 照美
添 バスの旅楽しい話連れてゆく
原 船酔いで楽しい旅がだいなしだ 勇
添 船酔いの前は楽しい旅だった
原 陽光を浴びて種まく自家菜園 こそえ
添 陽光を浴びて楽しい春の種
原 飛鳥路のれんげ楽しい鐘の音 弘泰
添 飛鳥路をゆけば楽しい鐘が鳴る
原 二人旅楽しい日々はすぐ終る 長一
添 二人旅楽しい日々はすぐ終わり
原 好きな趣味楽しいあとは請求書 清
添 楽しんだ影追いかける請求書
原 楽しそにモテたモテたとラッパ吹く くにこ
添 楽しそうにもてた男がラッパ吹く
原 楽しくてはまり込んだよ趣味宇宙 タカ子
添 楽しくて趣味の宇宙にはまりこむ
原 百均でもりもり買つて楽しい日 みち代
添 百均でもりもり買つて楽しい日
原 姉妹会話を話がとまらない 宣子
添 姉妹会話を話がとまらない
原 投函終えてはととコーヒー飲む至福 律子
添 投函を終えてコーヒー飲む至福
Ⅱ佳句Ⅱ

顔の皴笑し辛さ仕舞い込む
結局は楽しい人で終わる恋
楽しさを半減させて雨が降る
重ねる程に宴会場になる法事

初恋の友と再会古稀祝う エミ
丹精のかいあり蘭の花開く 美紗子
夫の留守友と楽しむ長電話 房江
家のこと忘れちゃべって飲んで食べ 亜希子
朝ドラが今日の楽しさ置いてくれ 雅代
同窓会楽しいはずがぐちばかり 久子
親切にすれば楽しくなってくる 克博
生きている限り楽しい夢を追う 絹子
わくわくと未知へ飛びたつ竹トシボ 幹子
我が子寝る布団に入る楽しみよ 弥生
青空を楽しんでいる握りめし イセ
孫が来て楽しい渦を巻き起こす 治子
不況風楽しい老後吹きとばす 正二
春のスカーフ楽しい恋をしています 菜摘
楽しくてやがてさびしい花の下 大朔
Ⅱ今月の推せん句Ⅱ
招かれてディナー楽しむ薄化粧 宮川 俊子
貴婦人の微笑が見えます。
サスペンス読んでいるうちに家事忘れ 岡野すみれ
のめりこんでゆく顔が見えます。
愛犬が散歩楽しくしてくる 磯部 義雄
信頼のたすなが見えます。
Ⅱ私の句Ⅱ
バーゲンの目つき楽しい幕を開け
利権さがしの劇場を楽しみがり
(登載漏れは役員が対応させていただきます)

秀句鑑賞

同人吟 三宅保州

— 3月号から

麻生路郎祖師が標榜された「川柳は人間問

治の詩である」「命ある句を創れ」という姿

勢は、作句はもちろん選や鑑賞においても指

標とすべきことだと思えます。このことを念

頭に置いて、「思いや訴えがあり、作者の存

在する句」を、句想のジャンル別に鑑賞させ

ていただきました。しかし、千六百九十五句

の集句から僅かな鑑賞句を選ぶ至難さを痛感

するとともに、多くの力作に接して改めて川

柳の魅力に陶醉させていただきました。

健康問題を詠んだ句が多数ありました。

切実なテーマを、ユーモアに仕立てたり、

深刻な実感句に心を打たれました。

あやふやな予防注射を打っておく

高島啓子

ロボットにだけは看取られたくはない

高橋岳水

深呼吸して血圧をまた測る

江見見清

体調がよくて人間ドック入り

山本玲子

つかい棒の母を奪ったつむじ風

山本希久子

直截的に詠むことを避けられた哀しみに、

かえって心を打たれる思いがします。

着ふくれてとうとう牛になりました

川本 晔

「食べてすぐ寝ると牛になる」という言い

伝えの本歌取りの感がありますが、それを超

えるかいぎやくさに惹かれます。

エスプリをちよつときかせる春帽子

山岡 富美子

三月の風はおんなを桃にする

白根 ふみ

本号が届く頃は春めいて、畔さんの着ぶ

くれも解消されましたか。そして、富美子さ

んはエスプリを利かせた春帽子で闊歩されて

いるのでしょうか。ふみさんの句の見つけと

比喩のすばらしさと、一字の無駄もない句姿

に酔いしれさせていただきました。

KYとは漢字読めないことらしい

安田忠子

玉葱がころがっている派遣村

木本 朱夏

親戚に九十歳が四人いる

堂上 泰女

時事吟については賛否両論がありますが、

句の命が長くて作者が存在する句であれば川

柳たり得ると思います。いわゆるサラ川など

の時事吟もどきの句が、時事吟の格づけを低

くしてしまっているのではないでしょうか。

忠子さんの句は、もちろん、空気を読めな

いの「KY」を、漢字を読めない総理の「KY

Y」になぞらえたもので、アイロニーがたっ

ぷりと利いています。ただ、何年後も句意が

通じるかどうかという懸念はあると思います。

朱夏さんの句は「玉葱がころがっている」

という具象にすべてが語られ、「玉葱」はお

そらく路頭に迷う失業者の擬人化でもあり、

文芸性もある時事吟だと思います。

泰女さんの句は、高齢化を端的に見事に詠

まれています。数字を使った句は「動く句」

になりやすいのですが「九十歳」も「四人」

も、それほど高齢者が多くなっているという

ことで、決して動かない句だと思えます。

美人だが少し気になる喉ぼとけ

鈴木 いさお

喉ぼとけのどんでん返しが何とも酒脱。

招かざるお客が酒の肴褒め

石原 歳子

雲掴む話に一度乗つてみる

山口 光久

最近の川柳界では、いわゆる上質のユーモア句が少なくと言われており、大会等でもユーモア句が上位に採られない傾向がみられます。一方で、いわゆるサラ川やマスコミ川柳といわれる類では、駄洒落や語呂合わせや狂句まがいの句がばつこして、川柳というのが誤解される要因になっていると思います。

ここに掲げた三句は、川柳本来の上質なユーモア句であり、川柳古来の風刺や穿ちも兼ね備えて味わいのある句になっています。

次は、川柳の素材は身近にくらでもあり、しかも大上段に振つかぶつて詠まなくても、むしろ「軽味」な味付けをすることで、味わいのある佳句になる見本のような句を選びました。

株価より風呂の水もれ気にかかる

柿花 和夫

株価と水もれという二物衝撃の効果。

あらかたを済ませばしもやけが痒い

森 茜

一段落すると些事でも気にかかるもの。そのことを見事に具象化して詠まれています。

結露拭きながらかきろい待っている

籠島 恵子

結露拭く気持ちに应运えてくれる曙光。

日々好日白紙が続く日記帳

安雲田 泰子

書くことがない平凡な幸せも句材に。

几帳面に洗濯ものが干してある

黒田 能子

洗濯物の干し方まで句材になるのです。

言うことも途絶えて雨の音を聴く

長浜 美籠

風景まで見えてくる句は佳句という見本。

「百歳になつても恋をしていたい」という句があるように、万葉集にも恋の歌が圧倒的であり、古今東西ラブは永遠のテーマのようです。次はラブソングを鑑賞しましょう。

アテンションブリーズわたしと飛んでみませんか

川久保 睦子

字余りも気にならぬ表現とリズム感です。しなくても良い喧嘩までして夫婦

久保田 千代

この喧嘩は仲が良すぎてした喧嘩でしょう。

奥さんの名前で着いた喪のハガキ

永田 章司

他人には愛の終焉、二人には永久の愛。

くだけちゃってあなたに刺さりたいガラス

居谷 真理子

ちらちらと白い恋人降ってきた

生嶋 ますみ

男友達もう許される歳であり

田中 章子

噂の人とお食事をしたのはホント

鴨谷 瑠美子

どうしよう君の笑顔に一目惚れ

渡辺 富子

結びに、その作者の生き様が伝わってくる句を四句鑑賞させていただきました。

鱗落ち風の動きがよく見える

大橋 鐘造

「鱗落ち」は人生の転機等ででしょうか。見えなかったものが見えるのは遠観でしょう。

踊いた位置にもどってみたくなる

太田 扶美代

深みのある思いを、むしろ簡潔に詠んで、それからの余韻までもうかがえると思います。

常識の殻を背負って生きている

大石 あすなろ

まさに殻に例えた比喻が効果的。

舞い落ちるまでのドラマを演じ切る

川崎 ひかり

舞い落ちるまでを精一杯演じたいものです。

水煙抄

秀句鑑賞

—3月号から

米田恭昌

誕生日まだ覚えてた妻がいる

小林 妻子

勿論ご主人の誕生日の事であらう。何年添うていても、お互いに誕生日を覚えてくれている伴侶がいると言う事は幸せです。「妻がいる」に熱い感謝の思いが伝わって来ます。

義理の通夜ただベコベコとして帰る

國實 力

「ベコベコ」がとにかく面白い。誰にも経験あるだけに。故人とは別につきあひはなかつたし、話すこととてない。聞こえるか聞こえないような声で、ぼそぼそお悔やみを言い、誰にもベコベコして早く帰るに限りります。

玄関でぐったりしているババの靴

辻村 洋子

外交マンなんでしょう。歩き疲れた働き蜂のババの靴が、玄関でのびています。ぐつたりと疲れたババの姿が浮かびます。

割り勘と聞いてブツブツ言う財布

岩本 浩二

下戸の私はそれでもマイクを持つたか、食べるかして元を取っている。が酒豪には負けまです。擬人法の「ブツブツ」が面白いですね。

餅焦し雑煮の香り引き立てる

前田 紀雄

喧騒の都会もさすがに元旦は静かです。そしてリビングから雑煮の香りと共に、お餅の焼ける焦げた匂いが、老人にレトロなお正月のムードを演出してくれるのです。

絶対に妻に研がせぬ出刃包丁

丸山 孔一

研いだ包丁で何をされるかを川柳的に、オーバーに危惧してのブラックユーモア句ですが、「深夜」時妻が包丁研いでいる」かも。

一浪は一年長生きすればよい

渡邊 伊津志

成程こんな慰め方、励まし方もあるんだなあと教わりました。

年金の暮らし一から一を引く

辻内 次根

偶数月に入る年金も、右から左へ出て何も残らない。残らないだけならまだ良い方、余命を計算し、預金を切り崩して生活している方も多いと思うと、さみしい限りです。

古火鉢も都会へ出ればアンティーク

辻内 げんえい

お宝はないか屋根裏まで探し

阿部 茶々

私宅の火鉢も二度の引越で消えてしまった。今は探す屋根裏もない。旧家の屋根裏には火鉢よりすごいお宝が潜んでいるかも。私はひやかしのふと覗いた時代屋で、レトロな物に触れ、ひと時快い郷愁に浸ります。

饅頭が二つずつ減る老夫婦

谷川 勇治

八十路坂賞罰なしの二人連れ

岩崎 和子

平々凡々にして、健康で仲の良い老夫婦を垣間見ました。「二つずつ減る」が健康的で愉快ですね。半分こしてまで仲良くお幸せに。

紅白よりナツメロが好い年の暮れ

矢野 良一

視る気せん言つた紅白最後まで

源田 啓生

紅白も年毎興味失せる老い

高山 清子

何気ない句ですが、どの句も歌好きの高齢者には共感する句です。興味無くせば頭の老化が進みます。ナツメロでノスタルジーに浸るのも老化防止の一つです。

新聞小説の

楽しみ

藤井則彦

明治・大正期の画家伊藤小坡に「つづきもの」と題する長閑な絵がある。届けられた新聞を広げて小説に目を走らせるこの女性の仕種には、現代人が失いかけているこのころの豊かさがそこはかとなく漂っている。

私はこの三十年來、朝夕刊含めて毎日六七篇の新聞小説を読んできて、先頃その累計が二〇〇篇を超えた。最近図書館などで二三日分まとめて読むこともあるが、とにかく小説が続いて読むことがとても楽しい。

人間誰しも、たまに非日常の世界に入っては魂を揺さぶられ、そこで勇気を得たり喜びを感じたり、あるいはロマンや夢をかき立てられたいと思う。そのためにはちよつと気分を変えてみる方がいいのだが、新聞小説こそ自分の引越しにはうってつけであり、時にこのころの飢えをも癒してくれる。

小説の筋書が混線しませんかとよく聞かれるが、中身も文体もみな違うのだから、そんなことはまず起こらない。

新聞小説は普通の小説とは違い、読者に向かつて「現実」を提示するものである。政治欄や経済欄、社会欄と並行しながら同時に読める、言ってみれば人とお喋りをしながら読める気楽さがある。ひとときお茶を飲みながら、あるいは居酒屋の片隅でストーリーの話題に花が咲くのは新聞小説ならではである。作者の熱い息吹とビリビリした緊張感が小説の行間から伝わってきて、連載が始まると「面白い」「面白くない」「こういうものが読みたかった」などさまざまな反響が新聞社に寄せられるのも特色の一つである。

そしていよいよ筆が進んでくると、作者を離れて一人歩きする人物の生き方を毎日たどることができものがまた新聞小説の愉悅である。読後の余韻と明日へのつながりを残しながらふと途切れる文章はいやが上にも読者の想像力をくすぐり、いつの間にか無意識のうちに人物や状況について自分なりの像を結ばせてしまう。それに毎日の紙面を飾る挿絵も新聞小説にしかない魅力である。小説の情景

を彷彿とさせるものもあれば、主人公の心風景をあぶり出すような抽象画などいろいろあるが、いずれにせよ迫力に満ちた挿絵を眺めているだけでも楽しいものだ。川柳の作句でいろいろ考えあぐねているときに、新聞小説に見え隠れする人間心理や場の雰囲気などは正に奇貨居くべしである。

問題はどの辺りから読むかであるが、新しい小説のスタートを待つか、あるいは二週間に一度くらいは載る「あらすじ」に目を通して上でそこから続きを読んでいくのがいいと思う。どうせ一冊の本になるのだからそれを読めばいいんだと言う人もおられるが、残念ながら新聞小説の醍醐味をご存じないのではなからうか。

因みにこの三十年間で私なりに印象に残っている新聞小説ベスト5を最後に記します。

遠藤周作「女の一生」(昭和五五―五六)
宮尾登美子「序の舞」(昭和五六―五七年)
曾野綾子「時の止まった赤ん坊」

(昭和五八―五九年)

灰谷健次郎「天の瞳」(平成六―七年)

佐伯一麦「鉄塔家族」(平成十四―十五年)

(特集) 原稿募集

テーマ父を語る

六月号掲載の特集原稿を募ります。

亡父、義父、或は在世の父についての想い、エピソード、思い出等何でも結構です。同人の御応募をお待ちしています。

四百字詰め原稿用紙一枚半～二枚(六百～八百字)

タイトルは別につけて下さい。

締切り 四月十五日 本社事務所宛

但し原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

あかつき川柳会
5月句会

日時 5月8日(金) 14時
場所 住まい情報センター(地下鉄天六3番出口)
兼題 「クレオン」 「実」

投句先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14
「合掌」 「時事吟」

江島谷勝弘

「各地句会だより」掲載について

川柳塔社の小集句会の紹介・アピール・会の様子などお書き下さい。会員の集合写真を添えて下さい。順次掲載させていただきます。

行数—たて20字×54行(1080字)

募集

第7回「川柳展望」現代川柳大賞

対象/新作10句

応募は一人一口に限りです

表題をつけて下さい(無題も可)

用紙/B5判原稿用紙(便箋も可)をタテに使用

(応募用紙をそのままコピーします)

応募料/千円(会員誌友以外で発表誌必要な方は二千元)

締切日/2009年5月31日

宛先/〒567-0009

大阪府茨木市山手台4-6-3-101

川柳展望社

表彰/現代川柳大賞 1名 記念盾と副賞3万円

同 準賞 若干名 記念盾と副賞1万円

同 佳作 若干名 記念盾

(審査員)

金築 雨学 草地 豊子 佐藤 岳俊

新家 完司 高瀬 霜石 津田 暹

吉崎 柳歩 天根 夢草

■各地句会だより

ほたる川柳同好会

とともに

水野 黒 兎

平成四年、豊中市蜷池公民館での橋高薫風先生の川柳講座を機に井上直次初代会長ら同好の有志によって同好会は発足しました。以来十六年余、去る二月に記念すべき二百回目の月例会を開くことができました。その間五年の節目ごとに合同句集を発行することとし、平成十九年の五月には第三句集を発行致しました。

発足以来薫風先生にはずっと顧問をしていただき、平成十七年の先生のご逝去まで時折句会にご出席いただいたり、懇親会にご参加いただいたりして、同好会の歴史にとつて誠に貴重かつ有難いことであります。

公民館活動の枠の中の同好会であり、会員一同和気あいあいの雰囲気の中で月一度の句会と有志による勉強会を続けております。

わが同好会の特筆すべき自慢のひとつは「ほたる川柳同好会の歌」を有していることではないでしょうか。三番までの歌詞のうち、三番を抜き出してみます。

戯評に本意をばせて



時空貫く人生譚

感性香る文芸の

裾野広げるこの集い

右脳のサロン 柳友の会

(会員、椋山祥風作詞)

懇親会の折などに、主として「ああ紅の血は燃ゆる」(別名「学徒動員の歌」)のメロディで高歌放吟します。このメロディからもお察しのごとく会員の平均年齢が七十歳を超えていることは間違いないようです。句会の後の喫茶店では従軍時代の思い出も続々、大阪や豊中への爆弾攻撃の生々しい話もあって、やつと古稀になったばかりの若輩の筆者などは圧倒されてしまいます。とは言うものの会員の気は若々しく、苦難に当たっても

癌告知亭主真青妻自若

肋骨

としゃれて見せ、日常の生活においては

花のある暮しは絶てぬ花鉢 桂子

と詠んで瑞々しく、また最近の句会では

Truth or not history repeats itself ※ 勝

と英語の句まで飛び出す柔軟さであります。

これからも会員一同、明るく川柳を楽しみながら三百回目の句会を目指したいと思っています。

※本当か否か歴史は繰り返す(黒兎記)

本社三月句会

三月九日(月) 午後一時
アウイーナ大 阪

三月の句会は難祭に因み、主幹以外は女性五人の選者が華やかに壇上に立ち、九六名の出席で開催された。

お話は伊達郁夫氏。レジュメが配られ、本題に先立ちこのお話を担当することになった経緯につき十八年六月の朝日新聞記事が発端で、次に城北川柳へコラム執筆、更に会社OB会(東京、大阪他)で講話と次々広がってきたことを軽妙な語り口で紹介された。

「呆け防止と川柳」というテーマで ①脳トレが今ブーム ②高齢者の認知症が増加 ③脳の老化は前頭前葉の機能低下 ④脳の活性化は脳のドーパミン分泌・脳の快感から ⑤脳科学の第一人者茂木健一郎氏の学説に基づく事例をあげ、脳の強化学習は、脳を活性化する原点になり、創作活動が脳を喜ばせる。⑥省略 ⑦川柳は前頭前葉を活性化させる。一句の達成感が脳を喜ばせ、ドーパミンを出し脳の回路が強化される。

⑧更に句会では競作による刺激効果があり積極的な参加が有効……。川柳にはまり、脳を若返らせ、川柳の輪を広げ、楽しめたいと、約四〇分のお話をスマートフォンに結ばれた。

月間賞は西出楓楽さん(大阪市)に輝く
(公誠記)

(司会)美龍・昭 (脇取り)山代・葉子
(受付)すみ子・麗 (清記)光久

席題「合格」

大内 朝子選

太郎ちゃんも一郎ちゃんも不合格
着メロの小躍りしてるサクラサク
合格の絵馬はそのままほつとかれ
満十三歳で予報士になった
四浪でやつと合格できました
すれすれの合格点で夫婦する
定年の料理に妻の舌鼓
合格に入学金のしかかる
検査パスしたはずなのに汚染米
につこりと主治医合格印を押す
合格通知きて逃げ腰になってる
サクラサク子より親が泣いている
甲種合格南の空に散華する
合格の二字に念力かけている
血の検査無事に済ませて飲んでいる
不合格犬もしばらく寄りつかず
合格へからだ全部で声を出し
合格の孫の知らせに泣く財布
アラフォーが今日も見合いで不合格
合格をしたら卒業して欲しい
かあちゃんの顔でパスしたお近付き
合格に嬉し悲しの要介護

蕉子 昭 鬼 天 笑 光 久 焦 子 尚 士 昌 紀 啓 子 理 恵 美 龍 准 一 いさお 紀 乃 朋 月 見 清 正 雄 弘 風 則 彦 山 代 像 月 月

札束で合格させた罪と偽

チャレンジが好きで資格はたんたくつ
ごみ出しも合格点をもらつてる
毒入れた合格品もあるお国

合格はした学校名ないしよ
三十年やつと嫁さんらしい味

主夫合格スーブの味をはめられる
おばあちゃんの御百度きめあつたよう
キュービッドのめがねに叶いチャンスくる
あきらめた合格神に助けられ

佳 鐘三つ鳴らし人生狂い出し
合格はしたが親父が派遣切れ
恋人を父が認めた娘の涙
着物の仕立て三重丸の亡母の糸
合格へあたり一面春になる

人 全粥になつて主治医のVサイン
バスしたらもう忘れてる神のこと
生きてることが合格だと思ふ

天 軸 合格の男に会えぬままひとり

兼題「隣」 森村 美花選

お隣の犬に土産の午前さま
回覧板隣が元気なのを知る
迷つてる間にわたしが古希隣

公 誠 哲 男 葉 子 像 山 楓 楽 月 子 たもつ 耕 治 修 日の出

保 州 一 歩 尚 士 美 花 富 子 (矢) 五 月 淑 子 保 州

雅 明 時 雄 美 義

美 義

美 義

美 義

お隣のくしゃみ聞える春となり
お隣も元氣出窓がすつと開く
隣の市までたらい回しの救急車
手術から戻らぬお隣のベッド
同郷の隣人垣根越える仲
エンジェルの隣で爪を研ぐサタン
お隣は出来たお人で肩が凝る
気がつけば隣に妻がいてくれる
隣には核持ち飢える国がある
垣根ごし話が弾む春うらら
居眠りの少女に肩を貸してやり
お隣も向かいも店を畳みはる
給付金隣の町しか店がない
場所とりがいらぬ隣の花見酒
お隣は珠子ちやーんと呼ぶ八十路
隣とはシツプ貼り合う仲でいる
お隣にヘルバーさんがいてくれる
ロボットの隣で縮こまる未来
冗談がうまい隣の若夫婦
隣から匂のこぼろがお裾分け
釣れすぎた太刀魚隣から届き
お隣へ何でも喋る換気扇
大声で勝手口から来る隣
お隣はバラわが家には葱坊主
うちも隣もそのおとなりも老いひとり
美女が来て欲しいと願う横の席
母さんのイビキ隣で平和です
隣の前救急車いま停めてある
美しい隣は花も奥さんも

見 清 直 樹 幸 雀 保 州 ルイ子 いさお 深 雪 朝 子 ダン吉 千 枝子 朋 月 尚 士 求 芽 像 山 光 久 日の出 希 久子 幸 雀 美 智子 正 天 笑 富 美子 寿 美 一 風 淳 司 舞 夢 雅 文 真 理子

お隣に漏れると噂走り出す
お隣の幸せ布団干してある
恍惚と隣合わせの物忘れ
ライバルの隣で技を盗み見る
住
お隣がなぜか気になる若夫婦
隣から今日もいかなこ炊くにおい
隣まで春が来ている雨の音
隣家から貰う葉つ葉に春が萌え
温もりを隣の人から貰う
人
お隣へ元氣知らせる雨戸開け
地
親戚も無いこの町がだーい好き
天
一線を引いて隣と仲がよい
軸
両隣老老介護という日本
兼題「ベール」 志 田 千代選
物忘れ脳がベールに包まれて
本命はベールに包むチョコレート
目に見えぬベール貴女に近づけぬ
ベール被つてはる訳ちよつと考える
ベール上げ新婦にやつと出る笑顔
純白のベールに頬が染まつた日
秘密ひとつベールに包み嫁ぎます
結婚後すぐにベールを脱いだ妻
おとむらい死因にベール掛けてある

集 一 千 枝子 尚 士 朱 夏 たもつ 見 清 あやめ ふりこ 天 代 耕 治 日の出 たもつ

ベール取り女は寡婦の面をつけ
酔いを借りベールをぬいで言う本音
時はお風呂しきにもなるベール
ベール脱いで本音同士の付き合い合い
ベール脱ぎだせば倦怠期の兆し
銀行がベールの下に着た鎧
封筒のうすもいというベール
思惑をベールで包むのし袋
ほんとうの素顔ベールのなかにある
年の功ベールかぶつてアホになる
飯面とベール知らない内に使つて
夜のベール下りて私を取り戻す
自分史にベールをかけた跡がある
顔の皺ベールでふわり包みたい
ベール一枚かけて何とか嫁姑
回想に霧のベールがまといつく
花嫁のベールは甘い香りする
まいど一号宇宙のベール脱ぎに行く
折角の美女勿体ないねブルカ
遺跡群古代のベール解きほぐす
御高祖頭巾の主を詮索せぬことだ
名が知れてベール剥がれた私生活
皇室のベールに揺れるプリンセス
佳
ベールの下きつと美人と思いたい
カーテンの陰ならキスも待つてます
ホームレス歌人のベール覗くまい
仁徳隣そつとベールの裾が良い
古都ロマン飛鳥美人がベール脱ぐ

更 紗 靖 博 欣 子 ルイ子 玄 也 尚 士 真 理子 富 美子 寿 子 日の出 一 風 好 洋 美 智子 美 義 美 龍 房 子 郁 夫 像 山 保 州 俣 子 淳 司 喜 子 シマ子 桃 花 郁 夫 いさお

人

薄いベールの奥に秘めている黙秘

昭

地

それとなくベール脱がせる聞き上手 (矢) 五月

天

生命の神秘やはりベールに包みたい すみ子

軸

母さんもベールを脱いでイブになれ

兼題「手ぶら」

板東 倫子選

売り切れと手ぶらの妻が荒れてます

美義

平服に手ぶらとあつて迷い出す

時雄

手ぶらなら乗れたと悔やむ終電車

庸佑

手ぶらでいい母は笑顔で待っている

美花

今おとこ捨てて来ました手ぶらです

准一

正義感手ぶらのほうへ味方する

正義

歯ブラシを持って手ぶらでやつてくる

哲男

おばあちゃん手ぶらで来ないから好きヨ

像山

手ぶらでも酒を出す客出さぬ客

昭

手ぶらですがお嫁に行つていいですか

深雪

着の身着のまま引き揚げてきたあの日

勝弘

気が利かぬ女房の手前あるだろが

麗

手ぶらでよいその一言で五十年

楓

手ぶらですみんなと握手したいから

真理子

手ぶらだよ君抱きしめる両手だよ

鐘造

正直に手ぶらで行つて恥をかき

千枝子

百までも手ぶらで訪ね合える仲

尚士

古里へ手ぶらで帰る派遣切り

瑠美子

愛だけでよいと言つたのどなたです

弘風

身ひとつで帰つといでと里の母

あやめ

猿との差人は手ぶらを淋しがり

洋

カメラだけ残し土産も宅急便

弘風

傷付いたブライド捨てにゆく手ぶら

無

春うらら手ぶらがよろし花の道

(矢) 五月

何よりの救い手ぶらでよい冥土

保州

手ぶらでは行けない頼み多過ぎる

千里

スタートは手ぶら同士の四疊半

集一

身ひとつで嫁に来てから五十年

則彦

皆手ぶらよ真に受けたのは僕一人

桂雀

武骨に生きて門前払い食う手ぶら

幸

道頓堀手ぶらで一人散歩する

洋

終電車手ぶらで下りた棚のもの

一風

近所まで来たと手ぶらで飲みにくる

佳

悪友が手みやげ下げて来る不気味

善純

揉み手するために両手は空けてある

淳司

手ぶらでは行けずさりとて断れず

玄也

あれこれとさけて行つたが今日も留守

月子

手ぶらでは困つてしまう手の遣り場

淳司

手ぶらでは帰さぬ母の深い愛

寿子

夢掴む両手はいつも空けてある

富子

手ぶらで来てくれて仰山飲んで去に

天笑

幸うすき友を手ぶらで帰せない

軸

兼題「明日」

山本希久子選

明日からは来なくていいと言ふ不況

保州

視界不良明日の医療も年金も

富美子

明日できる事は明日にする役所

昌紀

明日からやめる酒です今日は飲む

月子

明日になる前にゴメンナサイを言う

(志) 千代

飄飄と生きて明日を疑わず

幸雀

明日があるあしたがあると歳をとり

尚士

明日がまた目覚めるよう床につく

焦子

腕白が駆け出していく明日の空

正

明日からは後期高齢仲間入り

弘風

若者に明日のない日を作らない

あやめ

老いの知恵明日へ後悔持ち越さぬ

楓

ごめんねが言えず明日の絵が描けぬ

玄也

嫌なこと明日へのばす癖がある

柳伸

朝星夜星明日の祈りが深くなる

ダン吉

明日という言葉にいつも救われる

天笑

主治医でも明日を約束出来ません

富子

誤字脱字増えつかすからつる明日

舞夢

明日のあしたと言わず今からつてゆく

一步

日本のあしたを背負うランドセル

無限

思い切り泣いて明日を晴れにする

美籠

サブライズ期待してます明日こそ

集一

恙無く一日終えて明日を待つ

直樹

燃えるものまだあり明日を待つ新芽

靖博

明日はあす今日一日の花咲かす

(奥) 五月

絶望はするな明日も日は昇る

公誠

浮き沈み笹舟明日へ舵をきる

千枝子

産声が宇宙の明日の虹を描く
サヨナラの後につづけるまた明日
へこたれず目線まっすぐ明日へ向く
春うらら明日へつなぐ種をまく

郁夫 理恵 哲男

佳

明日へとつづく眠りをうたがわぬ
ひたひたと波打ちぎわに寄せる明日
手つかずの明日がにこり立っている
びっくり箱から飛びだしてくる明日
明日と言う未来にいつも救われる

理恵 啓子 富子 啓子 朝子

人

電子レンジで明日の予定を温める

朱夏

地

また明日へ傘の雫を切っておく

無限

天

明日のページまだ真っ白で待っている

一風

軸

不たしかな明日へ訃報風に舞う

兼題「気合」

河内 天笑選

太陽と風の気合で咲くさくら

希久子

粛粛とさくらの舊気合満つ

(笑)五月 富美子

開花日へ気合をためる花前線

美花

花見弁当主婦の気合いが入れている

淳司

立つ時も座る時にもドッコイシヨ

加お里

草原で産まれてすぐに立つ気合

修

とうちゃんに気合をかけるのも内助

朋月

初対面なのに気合が合う屋台酒

保州

それにしても気合入っている府知事

千恵子

中小企業の気合で回るまいと号

激安のチラシに気合い入る朝
決戦の朝はやっぱりの飯
母さんの気合を貰う塩むすび
乾杯に気合入らぬウーロン茶
ボケットに気合いつかり詰めている
老いらくの恋は気合で実らせる
ゴキブリを叩く気合は並でない
やさしさに気合を込める花鉢
毎日がラストチャンスという気合
酒止める気合をいれる三回目
看取られる方にも少し要る気合
湯豆腐に気合を入れる葱生妻
作句にも鉛筆削るにも気合
立ち合いへまわしばんばん打つ気合
愛妻はソフトに気合かけてくる
立会いで妻にはいつも気合い負け
ゆつくりと生きて気合は入れてない
快音に気合がこもる逆転打
百歳のバウが気合みちあふれ
気合入れおしやれました春だから
気合入れたくてレモンの丸かじり
産声は日本一という気合

桃花 真理子 美籠 尚士 ダン吉 光久 あやめ 五月 無限 弘風 啓子 希久子 庸佑 房子 雅明 富美子 寿子 美花 保州 楓楽

佳

居酒屋の前を気合で通り抜け
あの妻に気合だけでは勝てません
気合もろとも春の鼻毛を二三本
腹の子と気合が合うて産みました
妻の気合も一杯はいきななはれ

人

退院へナース気合を入れにくる

雅文

第6回 大野風柳賞作品募集

雑詠 五句(未発表作品)

審査方法 審査 大野風柳

※選句は記名選とします。

※五句一組として総合力で賞を決めます。

※但し集句をまとめて、特選句3句、秀逸句7句、佳作80句を選んで発表します。

表彰

※大野風柳賞一名(受賞作品のミニ二句碑・賞状・表彰式交通宿泊費) 準賞三名

(大野風柳表装半切作品・賞状・副賞一万円) 奨励賞五名(大野風柳色紙作品額付・賞状) を表彰します。

※6月14日(日) 柳都全国川柳大会席上にて表彰

※締切4月25日 1000円小為替同封

956 新潟津局私書箱15号柳都川柳社宛

(全員に記念品呈) 発表誌柳都6月号

希望者は500円加算。用紙自由

除幕式石も気合を入れられる

冬木立すこい気合で立っている 西出 楓楽

天

軸

張り詰める朝草春の二月堂

地

洋

ふしやぶ

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

南大阪川柳会

吉川

寿美報

割引きは女心を並ばせる

初笑い鏡割りして福を呼び

風船が割れるとみんな走り出す

土を割る新芽地球の恩を知る

正論を吐いて冷たい目が刺る

国盗りを正当化するイスラエル

米国に正々堂々もの申す

正夢にしよう一生の平穩

正方形はきれいな顔をしているな

大根は正直白を押し通す

ハッピーだのんきに伸びる無精髭

赤ちゃんを包む家族という笑い

ラストダンス私となんてチョーハッピー

バッテリーと遭った美人に誘われる

蠟燭が足りぬハッピーバースディ

父さんの子で良かったと褒められる

麗しい行為心を和ませる

糖尿病だいく半分妻が食べ

修

タカ子

弘泰

一歩

楓楽

(吉)修

滋郎

東吉

ルイ子

太郎

志華子

とし子

弘子

柳弘

たもつ

和雄

郁夫

庸佑

修

あこがれの麗しの園宝塚

立居振舞足のさばきも裏千家

モナリザの微笑飽きない麗しさ

北風に耐え麗しい猫やなぎ

脚立には西洋猫は無理でんな

よいとこに脚立空裏がはくそ笑む

吊る棚へ脚立代わりの父の背

目標は脚立に乗って届かない

宇宙まで脚立を掛ける好奇心

スクープに脚立も並ぶ人の波

脚立立て覗いてみたい露天風呂

身の丈で暮す脚立はいりません

父からの技も脚立もゆずり受け

君の脚立になつてあげると口説かれる

サブプライムローンに脚立はずされる

降りるとき注意脚立も人生も

豊中もくせい川柳会大阪 藤井則彦報

婿養子なかなか慣れることぞなし

未だ箸で豆が持てるという自慢

スイッチオンしても燃えない尾軀骨

お浄土も梅香るらん亡夫の忌よ

じっくりと耐えてチャンスに巡り合う

大空をひたすら泳げ鯉のぼり

振り込めが慣れた口調で急ぎ立てる

レトルト食品の味がいつしか母の味

記憶力良過ぎて友に疎まれる

修

(棚)勝弘

ばつは

祥昭

柳伸

清成

克己

憲太郎

弘風

章久

更紗

忠昭

直子

千里

栄子

あや子

集一

暁子

啓生

石舟

タミ

庸佑

郁子

野鶴

玲子

則彦

修

梅三分急かせて困るスニーカー

旅慣れて風に委ねるはぐれ雲

スタミナのレンジ独りじゃはすまない

記憶から逃げだしてゆく人ばかり

幸せの足音を待つ独り待つ

末吉をひたすら信じ八十五

ところどころ消えてる記憶たぐりよせ

がっかりはもう慣れつこと妻は言う

野の花の名を知りひとつ増えた幸

深情けに叩かれ浮世意識する

ひとりがいよいよ淋しいと独り言

脳のどこかにある断片を今ほしい

雨にけふる梅のつばみの武者ぶるい

日曜も働きました壮年期

おちぶれて人の情の厚いかべ

政治家に便利な言葉記憶ない

目出し帽銀行前で脱いでおく

残り香に記憶の糸をたぐり寄せ

うす情がなじがらめになる心

読み慣れた新聞がいい旅の朝

青春の一途ささいなものはない

裏方に徹しい汗かいている

傷ついた方はしっかり覚えてる

感情のもつれを抱いた花曇り

主役から降りて舞台がよく見える

まあだだよひとり少し慣れたから

修

(永)十八娘

寅次郎

満寿巳

求芽

宇乃子

勇治

寿美子

尚士

(若)玲子

美義

夢

肋骨

佳恵

堅坊

都代子

東吉

巴子

隆

美智代

見清

(久)千代

早人

幸雀

萬的

志津子

葉子

修

サークル檸檬(大阪)

吉田あずき報

魂込めて最後に目鼻描くコケシ
 ベランダの花と魂通わせる
 魂が虫になって飛ぶ知覧
 歩幅まだ合わせるほどの愛はある
 知らないと言えずうなずく首を持ち
 まだそこに微笑む母の顔がある
 自分の魂に挑む時がある
 四面楚歌たましいだけは売りません
 たましいがゆらゆら春の蜃気楼
 たましいもとび出す程のサブライズ
 ふる里の川でたましい丸洗い
 小さい春にそこで会うウォーキング
 魂が抜け出たような顔で寝る
 今の世に大和魂ありやなし
 晴雨兼用どっちつかずに生きてます
 義子
 楓 楽
 加お里
 みつ子
 義子
 徳山みつこ報
 はびきの市民川柳会(大阪)
 行間から母の気苦労推し量る
 初恋の手紙記念にしています
 方言で書いた手紙はええもんや
 ため息もふつと吹き込み封をする
 淋しいと決して書いてない手紙
 絵に画いた鯛とえびとで酒を酌み
 弾んでる松ボツクリのネットクレス
 寄せ植える松どつしりと庭に生き
 美 籠
 いわゑ
 遠 野
 千 代
 蕉 子
 昌 紀
 扶美代
 光 久
 希久子
 房 子
 たもつ
 楓 楽
 加お里
 みつ子
 義子

松茸の匂い付くまで見て帰る
 夫婦松時代の風に倒される
 羽衣をかける松の木植えてある

さあ来いと根つこしっかり張った松
 松はつくりテロを憎んで待つ平和
 会費制パーティーだから皆んな招び
 もう少し離れて誤解招くから
 不景気が招かないのにやって来た
 正月に招かざる客どつと来る
 美女ゆえに疑惑を招くサングラス
 手招きにうっかり乗った落とし穴
 豆まいて福や鬼でもみな招く
 万札はどうぞ小銭はどつちやでも
 ミニスカに我慢がのぞく白い息
 ベランダのミニ菜園も四季がある
 春風がそつと撫でてくミニの膝

長 柳 会(大阪)

村上

直樹報

株安のショック老後が吹っ飛んだ
 春一番行つたり来たり服困る
 急ぐ旅阻む大雪足を止め
 資産家は頭が痛い贈与税
 急ぐけど回って見たい花がある
 衣食住かけの効用炭の力
 雷鳴に空を見上げて急ぎ足
 老い二人決まり文句で会話する
 あれそれで用が足りてる老い二人

一 壺
 アヤ子
 ヨシ枝
 ダン吉
 りつえ
 猿 杓
 いさお
 フジ
 真一
 耕 策
 久仁子
 光 男
 六 点
 一 知
 章 司
 泰 子
 直樹
 直樹報
 村上
 直樹
 エミ
 輝 子
 たけし
 よしお
 靖 博
 武 男
 光 弘
 和 代

佳句地十選 (3月号から)

徳 山 みつこ

自信ある返事の声がよく通る
 ふんわりと来る風だから要注意
 登山帽若いわたしを詰めておく
 無視というとても静かな仇討ち
 この街と決別をした耳ピアス
 牛の目をのぞいてご覧君がいる
 十年記買つてもしもを考える
 隠してもいつも本音が出る背中
 快晴の群青冬をラップする
 勝つて来るなどとは二度と誓わせぬ

気をつけよほろい話は裏がある
 支持率は無視して平気総理の座
 会長に寄付を期待の名を贈る
 芍薬や牡丹や百合と競う妻
 神さまに早くおいでと言われても
 こばれ種得した気分春の庭
 急ぎ足電車の中で焦れている
 持て余す時間あるのに急ぐ癖
 急ぐまい行きつく場所は皆同じ
 急ぐなと老いと言う字を撥ね返す
 急ぎもせず慌てもしないかたつむり
 時々の手抜きは主婦の骨休め
 勤勉な僕は生涯鵜で通す

奮 水
 緑 良
 義 子
 無 限
 京 子
 蘭
 集 一
 扶美代
 じゅんこ
 正 博
 正 一
 昭 信
 裕 興
 たかし
 登美子
 三和子
 幸 雄
 正 子
 明 子
 淳 子
 靖 子
 史

台所ビツビヤチンに返事する

正美

急いでた頃なつかしむ日向ぼこ

けい子

まんべんなく贈る笑顔とありがとう

富美子

愛告げる合図不得手な少年期

芳野

おいとまのサインからと見た時計

和子

川柳若葉の会(大阪)

宮崎シマ子報

薬を支えているのは大きな根

弘直

不安です老を支える人不足

香住

合格は家族絵馬にも支えられ

慶子

空を翔ぶ魔女を支えている箒

シマ子

履歷書に書けない過去に支えられ

喜美子

支えると誓いましたねプロポーズ

烈

スラングへ支えが欲しい寒の雨

加津子

しっかりと支えてくれる二本足

能子

百までは支えきれない預金帳

ますみ

川柳塔きやらぼく(鳥取) 大塚恵子報

後半はおせちの整理松の内

章江

太陽に恋したみかん極あまい

ふみ

牛歩でもいいよと夫婦手をつなぐ

日枝子

ツルツルの雪に私は勝てやせぬ

那珂子

綻びし身を糸で紡いで立ち直る

初枝

くもの糸天上界はまだ遠い

寿々子

未だ出来るつもりの見栄につけぐる

なみ

除夜の鐘さきながら書く年賀状

蘭

繰返す朝が日ごとに深くなる

千代

籐椅子はまぼろしちの影を抱く

瑞枝

年明けて私の華を追っかける

春枝

四人ものノールベル賞とは誇らしい

田鶴

大寒波家族無口にしてしまふ

晶子

寒いけど折合いつけて過ごす冬

恵子

気分良くお墓参りが雪になり

雪江

次の世も花守りさせて阿弥陀さま

ゆき

颯爽と歩いた靴よいざさらば

てい子

川柳茶はしら(愛知)

板山まみ子報

献立も子から放され残りのもの

文男

生きてるかアハハハハと厚労省

遡行

キャラ弁でハート射とめた娘の一途

幸子

カロリー表見たら献立決まらない

由美子

欠席の言訳長々と電話口

かつ子

贖作と分かり気楽になった花器

美千代

春めいて心浮き浮き髪を結う

雅美

パリは良いパリに行きたいパリに行く

まみ子

川柳ささやま(兵庫)

遠山可住報

父の樹の高さには未だ届かない

純子

老いだつてたつぷり日焼止めをする

美緒子

変人と言われても尚マイペース

美智子

たつぷりと夢ぶち込める白い画布

二英

帰省の子待つてたつぷりくみ交す

美紗子

成人の夢高々と青い天

多美子

マンションの最上階に憧れる

開子

たつぷりの野菜スープが胃にやさし

照代

作物もたまに異変が幸になり

かほる

一人っ子かけ替えなくて宝物

幸子

何よりの宝命へ受く賀状

富美

旧姓が変らぬままのクラス会

哲男

たつぷりの自信へ塩の一つまみ

可住

西宮北口川柳会(兵庫)

黒田

能子報

生きているうちは分らぬ人の価値

みつ子

老いてなお希望を乗せて豆を撒く

江美

宇宙旅行希望の橋を掛けている

順子

梅見頃隅にちんまり甘酒屋

萬的

来し方を梅一輪と語り合ふ

いわゑ

初恋の打ちあけもせぬ白い梅

松煙

梅一輪一輪毎に春の顔

比ろ志

朝一個亡母の梅にもらう活

氷筆

先陣を老樹白梅ます二輪

宏一

骨董屋机の角見て値踏みする

いたる

六Bの鉛筆の価値追いつけず

義子

リストラの息子もわたしには宝

りこ

三寒四温強く芽はえるための価値

哲子

ちよつぷりの愛にみつかる生きる価値

直

ウオーキング葉に勝る価値がある

キヨミ

出産の汗が知ってる母の価値

折杭

ほんものがいつも定まった隅にいる

富喜子

ほんもの日本一は富士山だ

穀

ほんものと信じ込ませる桐の箱

茂

はんものの金持ちきつと慎ましいい
 欲望の海ではんもの見失う
 はんものと信じ美味しく食べていた
 本物が化けるとゴミに捨てられる
 影武者の裏ではんもの糸を引く
 はんものの匂いをさせているオバマ
 道遠くまだ本物が見つからぬ
 辞令一枚雪の軽さをふと思ふ
 水仙のその凜凜しさを下さいな
 お嫁さん気立ての良い娘であつてほし
 立春の私の心に豆を撒く
 荷は軽く時間にゆとりふたり旅
 面白いい人だったねの弔辞はし
 空に舞い気ままな旅を川柳と
 はてな・茶碗一つが一万両
 上ばかり見ないで今を咲いている

川柳塔わかやま

川上

大輪報

わこ 野鶴 能子 晴美 裕康 忠 紀乃 嘉代子 鹿太 弘子 二英 愛子 てる 早加永 哲男 光子

どうしよう迷子になった脳回路
 生きている証迷いも夢もある
 真実一路迷うも迷わないもない
 欲の皮脱いで迷いを真つ二つ
 願うこと多くて神を迷わせる
 嫁が来て階段きょうもリズムミカル
 階段の一段ことにある音色
 螺旋階段登れば未来見えますか
 天国への階段今はどのあたり
 階段へ恩師の高き目標に
 階段に夢積んでゆく新社員
 階段をひたすら昇り夢掴む
 年ごとに段差が高くなつてきた
 平和だな非常階段赤錆びる
 ほやはやの朝日を拝む丸い背ナ
 ほやはやの愛を包むと繭になる
 ほやはやを訪ねてのろけ聞かされる
 ほやはやの孫の類つべにチューをする
 ほやはやの赤ちゃん皆覗き込み
 ほやはやのパンを仏と分けて食う
 ほやはやの総理饒古すぎないか
 蒸しパンがふたりの愛を深くする
 はやはやの妻も色褪せ強くなり
 泥舟の泥ははやはやいつも鬱

尼崎尾浜川柳会兵庫

田原 宏一報

富美子 英子 保州 利治 智三 輝子 大輪 よりこ 紀久子 和子 美子 小 雪 正 博 めぐみ 准一 謙 文代 三男 克子 登美代 俣子 あきこ

待合せ三時と急ぎ忘れ物
 あなたには大きな貸と妻は言う
 貸の車庫から顔を出すベンツ
 正直な立春春を連れてくる
 干柿を吊し近づく百舌鳥の声
 青と黄とみどり菜の花国の旗の色
 貸した金もどつた時はご仏前
 講談のように聴いてる恨みごと
 無一物となれば自ずと吐すわり
 やわらかい言葉貴いに羅漢さま
 針のない時計が売れる北新地
 子を衛る母の巧の愛と勘
 午前三時お帰りに言えますか
 欲しいなああなたの心開ける鍵
 妻の勘当たっているから黙秘権
 知恵貸したつもりが逆になつてくる
 定年後貸してもらえぬ膝枕
 三時間待たねばバスのない故郷
 日が暮れて勘やえてくるけもの道
 勘のいい女にいつも脅えてる
 梅一輪母のベッドに春を呼ぶ
 貸すまでは友達だった筈なのに
 ままことの所帯も給付金で揉め
 靴音で不合格知る母の勘
 菜の花は春を溶かした色で咲く
 弱点のない人といて寛げぬ

雪菜 五月 よしひさ 勝巳 イサミ 耕治 亀子 芳子 正治 孝一 奮水 キヨミ 里江 かずお 矢薫 紀乃 美義 哲男 求芽 全彦 政江 朋月 靖鬼 美代子 比志 美籠

川柳花の輪大阪

妻谷 重風報

若いねの声に思わず背筋伸び
若い頃の顔がそれかと鏡言う
若い日をいっしょに生きた鳩時計
譲られた席に若さが崩れ落つ
ピカソの絵クイズ解くより難しい
孫相手マジで口惜しいカルタ取り
私よりゲームお好きで持て余す
ばあちゃんの分かるゲームはかるたとり
マナーゲーム寡黙になったおじいちゃん

京都塔の会

都倉 求芽報

笑み浮かべ気分も運ぶ伝書鳩
エキスパート君が手馴れた電子辞書
視力では見えない人間のこころ
予定済みきつと出してね給付金
エンゼルはきつとその内現れる
美しすぎるきつとオトコに違いない
山門の辺りはきつと春の使者
生き方を変えよう黒はもう着ない
赤を着て父真ん中に撮る家族
着物には似合う男のメタボ腹
着ぶくれることも出来ずに寒の月
振袖を着てもケタイ離せない
自分の趣味で犬は洋服着ていない
着飾って歩きたいのは寂しい日

着道楽ですユニクロの色ちがい
歌会始 平安時代今にする

木の根道はずんで生若丸になる
同好の青春切符に花が咲く
木枯らしに小さき奮息の芽え
手のとく期待へジャンプまたジャンプ
期待はせぬが望みが捨てぬ夢もある
唇に期待通りの花が咲く
左遷され妻の期待に幕を引く
期待しないときには花が咲きたがる
期待からあきらめに変え五十年

ほたる川柳同好会大阪 水野 黒兎報

母さんの絵が笑つてる参観日
重文の襖絵寺を支えてる
夏過ぎて風鈴淋し風の音
さりげなくしても絵になる得な人
さすがとも何故とも思う美術展
逃げそびれ友の代りに叱られる
雨戸の音隣も元氣らしい朝
冒険から逃げて挫折も減つてくる
矢印の方へ逃げたら落し穴
母ちゃんの口が半分クレヨン画
八方でムンクの叫び聞く日本
さすが蟹うるさい妻を黙らせる
晩婚で逃げる子供に追いつけず
自慢するだけあり鯛を釣り上げる

また大麻さすが困った弟子の処置
そのない逃げ口上の憎い女

啓子 綾子 篤子 ますお
ふりこ 欣之 比ろ志 美義 克治 輝美 宏子
また大庭さすが困った弟子の処置
そのない逃げ口上の憎い女

わかあゆ川柳会鳥根 松本はるみ報

耳ふさぐ聞かせたくない嫌なこと
雪だるま歩いて歩いて春さがし
家族サービス休暇をとった思いやり
荒波へ焦る心の舵を取り
父母より歩きつづけた戦争のとき
慌てるな焦るな鍵はもっている
子と歩くこんな平和があつたのか
この焦り知っているのか月の影
老梅の一輪の花にある焦り

川柳塔唐津佐賀

仁部 四郎報

推薦者顔を貸してとやってくる
未練かな最後ひとはねしたい鯉
ずる休み鼻をつまんで電話する
さらさらと達筆で書く借用書
親切が過ぎると妻が角を出す
大臣が世論を干支で論じたて
新芽抱き裸木春をじつと待つ

高知川柳社

小川てるみ報

新築の祝い分け合う餅拾い
棟上げの情報つかむお母さん
餅うすが今は寛のかざり池

ハレの日でなくても餅のある暮し
餅をつく音で今年が暮れてゆく
大好きな餅が入れ函に嫌われる
ベッタンベッタン里の師走の風物詩
鏡餅の自負が胡坐を崩さない
あいの手の息もびったり餅の艶
来年はゆつくり歩く靴探す
来年の抱負を鬼は呵阿笑う
来年の春闘へ旗が早々身がまえる
来年のプランに影を射す不況
来年は良い年であれ除夜の鐘
身に覚えあつて頑固も折れて出る
きのこ雲第九条は忘れな
経験と実力計りにかけてみる
名工の妙経験のなせる技

川柳塔おっぱひ(吟社香川) 川崎ひかり報

振り向けば数え切れない我慢坂
受験坂越えて晴れやかVサイン
七坂を越えて学んだ渡世術
貴方にも避けて通れぬ齢い坂
長い坂手を取り合つた笑いジワ
山坂を越えた峠の太陽が温い
母の待つふる里あの山一ツ越え
俵せが待つと信じて越える坂
バアちゃんはマクドナルドにはまつてる
結び目がゆるんで転ぶ縄電車

まさ子 良雄 京子 千鳥 健 幸子 美々 三千世 三郎 和江 みどり 忠 和恵 進 八重子 くに子 いさむ 弘 賢 あきら 放任 ひかり はつ恵 よしみ

川柳らくだの会(鳥取) 岸本 宏章報

土壇場になると男が先に逃げ
酒飲むと音痴も気持よく歌う
刻々と迫る手術を待っている
逃げ足が一番早い次男坊
秒針が老いの時間を切り刻む
遠慮なく飲めとすすめる笛太鼓
野良猫の夢はいつでも逃げるこ
世の中は逢うも別れも酒の席
負けるから喧嘩になるとすぐ逃げる
口実がうまく間に合いホッとする

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

車やめ歩きなさいと足が言う
老々介護共に歩いている絆
診察日歩け歩けと無理な医者
暗闇に探りさぐりの一歩出す
古希の足歩き遍路に挑もうか
雪化粧したふる里は優しいな
まいど一号沈滞ムード追い払う
芝居打つ事も覚えて子は巣立つ
そば打つて晦日囲むか故郷よ
絶妙の一手名人がゆらく
打たれても赤提灯で立ち直る
太鼓打ち夢を沢山持つ男

孝子 仁子 邦昭 紀子 宏章 清帆 玲子 富貴子 せつ子 大鯨 秀夫 賢子 太一 風子 克己 太郎 敏子 緑 三重子 雅文 穩夫 章久

煙草ボーイ捨て道徳心の無い男
子の道と信じて今日も一歩ずつ
一本道貫き女傑と咲く
なきことは言わぬ厳しい芸の道
残照のいのち燃やして生きる道
日本国道案内は誰がする
梓外の愛に溺れて修羅の道
シルクロードらくだも象もよく歩く

岸和田川柳会(大阪) 土橋 房枝報

激動の世を喝破する変一字
夫婦喧嘩激しく動くお腹の子
激動の昭和を生きた底力
激動の戦火凌いだ自負がある
激動の時代を凌ぐ人の知恵
諦めた超えることない親父像
三浪の難関越えてサクラサク
堀越えて隣の梅が春を告げ
一流のシェフ越えている母の味
不況風街にざくざく特産品
ざくざくと学徒出陣忘れまい
ざくざくと熊手で寄せる夢を見た
自家野菜ざくざく刻み一夜漬け
ざくざくと落葉踏み締めウォーキング
唸るほど貯ったとこで目が覚める
これぞ技鯉の骨切りざくざくと
三が日都心の並木息をつく

シマ子 美子 あや子 湖風 朝子 和代 美弥子 愛論 義泰 俊昭 弘子 浅子 淳風 岩夫 守 仁緑 玄也 力子 寿海 幸子 ゆい 房枝 珠子 東吉 洋

泣きやんで赤ちゃんが観るコマーション
クレパスの青が減らない子供の絵
温暖化地球も汗をかいている
CO2食ってくれよと植える樺
密室の会議でCO2に酔い
究極は動かぬことがエコとなり

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一粹報

清 和 泰 昭 蛙 香
美 弘 城 代

不況風派遣社員をかまう気が
元旦はやさしい妻の顔でいる
手詰まりにそこから母の底力
手詰まりの間に無心の経を読む
先生をかまったことはありません
サンキユーと言つてまあく住んでいる
ふるりの風詰め込んで車去る

洋 春 一 金 善 美 菊
々 名 瑤 祥 夫 雪 香

日本の頭脳は凄腕を張れ
あくまでも白は白だと胸を張れ
この歳で五感働くありがたさ
父ちゃんが痒い背なかをかいてくれ
妻倒れ老々介護ままならぬ
手詰まりの夫励まして魚売る
太陽に恥じる事なし胸を張れ
手詰まりへばつたばつたと首切れ
胸を張れ自信は後でついて来る
川柳でのんびり過ぐす余生です
老人も税金払う胸を張れ
この田んぼは後継ぎがなく死に切れぬ

雅 昌 菊 美 善 金 一 春 洋
女 鼓 香 雪 夫 祥 名 々

手詰まりの世界オバマに期待する
手詰まりの時は歌でもうたおうか
演壇で胸を張つたが読み違え
手詰まりがすぐに樹海へ行きたがり
農民は手詰まりしたら明日はない
サンキユーと手を上げ少し若返る
サンキユーと英語じゃ言わぬ家族の輪
サンキユーとライブの舞台盛り上がる
サンキユーと夫にも言える仲が良い
かまうならジョークの分かる人がいい
スーツ着て踏み出す一歩胸を張る
手詰まって無性に人を殺したい
三日月が家までついて来てかまう

穀 一 行 秋 菖 夢 節 夢 路 子
京 男 月 稔 子 路 子 江 郎 美 子 子

川柳塔鹿野みか月鳥取 福西 茶子報

茶子報

人の道導く母のしつけ糸
余裕などどこ吹く風の娘が三人
春が来るまではゆつくり雪を掻く
何時かいつか東へ沈む陽もあろう
まあいやだ虫まで東好きらしい
カタログに載せてみようかなと思う
ちぐはぐな嘘と本音に出るくしゃみ
天地人ふたりの愛が燃え尽きる
母さんの嘘は従うことにする
興味津々脳に余裕はまだあるか
嘘でいい嘘ではないと言つてくれ
目を閉じて拝めば見える仏さま

彩 盛 宣 菊 孔 睦
子 桜 子 乃 美 子 子

カタログのハワイ眺めてひとやすみ
通帳を眺めるよりも庭の土
山陰沖と言われる蟹がソ連もの
抱きぐせがつき嘘泣きを覚えた児
少子化の進む日本が気にかかる
笑おうか泣こうか夢のような報
カタログを囲み桜の話する
人となる仏ともなる妻しだい
東向き西日のことも気にかかる
生きている証東の空に手を合わす
車窓太陽のぞきあたりがたい
雪積もり余裕たっぷり寝てくらす
少年の心が嘘をつき通す
食品偽装うなぎお前は悪くない
嘘つけぬそんなあなたに妻でいる
嘘でいい治ると言つて欲しかった
余裕ある庭で寒椿が笑う
カタログに出番を告げる春の風
嘘かもねありがたすぎて嘘のよう
あれこれとカタログの中迷い込む
反戦のちから大嘘には負けぬ
晴れ曇り開く日記に嘘はない
お化粧の乗らぬ女のカタログだ

完 弘 蟹 忠 幸 茶 き
司 子 郎 良 枝 子 子

川柳クラブわたの花大邸 西川 義明報

痛み有るスタートこらえ花が咲く
華やかにそして寂しき冬花火

克 美
い づ ぶ み

始めての花束もらう定年日

通勤地獄ほとと困る手のやり場

麻生さんまず川柳で読み方を

地獄より怖い所がある世相

神の名を騙る世界のエゴイズム

愛憎の世界も月日消して行く

昭和時代に青春の夢おいたまま

百均は消費税の広報マン

働かず一日終えるああ感謝

旧姓を知ってるアナタ誰だっけ

勘当と言いたい言えぬニート族

居酒屋の仲間に貰う明日の糧

地獄でもケイタイだけは持つていく

掴み合えば足らず分ち合えば余る

まいど一号宇宙打ち上げ二〇〇九

銀婚で愛はすっきり軽くなり

硝煙と飢餓に泣いてる世界地図

絵手紙の蕾も春を待っている

国境線世界の吹き矢も忍ばせる

人生の針を狂わす世界危機

健やかに心新たに初日の出

しわ伸ばし明るく歌う晴舞台

春を呼ぶ夢や希望を待つ蕾

これからはだんだん細る自己主張

スタートで逆方向に走る孫

キッチンに姑にまかせてジャズダンス

ばろ過ぎる話は蹴って汗を積む

義明 宏

正春

欣子

妙子

俊子

晴美

浩三

孝子

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじむ

たえ子

美代子

耀一

知佐子

民

君江

博子

愛子

宏至

幸枝

莊司

美はる

一風

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

おでん煮る母が待つてる家路かな

笑つても泣いても我が家暖かい

猫も犬もいるばあちゃんの家が好き

嫁の笑顔クルクルと回る家

ただいまを待つて下さる仏さま

原点は父母といった故郷の家

丸かじりリング一個の小宇宙

九十五歳義母はかわいい小宇宙人

山畑の空の青さにある宇宙

読み聞かす孫と至福の小宇宙

書き初めを宇宙へ送るとんどの火

雪舟の庭の遥かな宇宙感

マイカーのお守り鈴と揺れている

鈴鳴らし夜半に猫のお帰りが

招福の破魔矢の鈴は金と銀

お正月家中母の鈴響く

茶髪にピアスそろそろ鈴もつけますか

寒行の鈴は寒さを切り開く

政治家につけたい鈴は売ってない

まだ明日が有るから靴を磨いとく

うたた寝のどこか遠くで母の声

朝風呂におかり浮かんで初春の夢

雪の日暮おほるに句う想夫恋

笑つても泣いても明日は来るんだね

おかえりとシチューの湯気でお迎え

千代美

現代

規幸

蘭幸

幸子

房子

貞子

比呂子

敬子

栄恵

慶恵

輝恵

淑子

節生

年子

半徳

汎美

力

笑子

笹舟

笹路

栄香

厚子

太虚

史子

ロース川柳会(大阪)

山崎 君子報

国境も日の丸信じひとり旅

星条旗すこうし威張りすぎないか

その昔各戸に有った国旗竿

よく延びる餅に笑いの沸く炬燵

日本の祝い事には餅が付く

お餅搗き祖父の臼にはかなわない

様々のドラマ背負っている国旗

日の丸に生木さかれたことがある

ぶくつと餅笑うわたしも笑います

孫曾孫の餅つき賑やかに

松露川柳会(鳥取)

小西 雄々報

牛の声水車の音も遠くなり

初夢の虹のかけ橋渡りたい

初夢は果てない宇宙ロマン追う

初夢は豪華客船波の上

初夢を大風に乗せ青空へ

牛耕の長閑な景色父母もいた

牛と馬仲良く歩く三馬力

ポリーナスのように仔牛を売りに出す

昔から人につくした牛である

赤いリボンつけてお嫁に行った牛

給付金で松阪牛を堪能す

牛のいる風景平和だと思う

てる

みつ子

藍

哲子

トミエ

貴代子

いわゑ

年代

義子

君子

久子

澄江

裕

香音

美穂

美枝子

豊枝

公美枝

鈴枝

信雄

智恵子

和代

正光

— 106 —

無学でも母に教わる人の道

無口になればお前理想の妻なのに

告知され人も空気もみな無口

母さんの傘は黙って広げられ

賽の目を吉に好転させた靴

難問をじっくり包む父の辞書

先ずは乾杯あいつは後まわし

飢えている国の子供の瞳が清い

思つての半分位も言えません

春近し時を待たずに芽吹く庭

少子化でお墓造りを止めました

喜怒哀楽みんなあなたと半分こ

着ぶくれたダルマが転ぶ冬の坂

ブライドも見栄も着ぶくれして渴く

川柳さんだ(兵庫)

北野

哲男報

合コンをすれば私が残りそう

あの日からまた春ですな五十年

電子辞書おもちやのようにもち歩く

使い捨てされた道具が自問する

百均の消しゴムあつさり過去を消し

小道具をうまく使つてくる詐欺師

留守番に道具はいらぬチン料理

温い部屋で心の冷えるニュース聞く

よう冷える言つても昔ほどでない

興奮が冷えると粗が見えて来る

考える輩二本の足でけつまつく

一風

耀一

寿鶴

あかり

柳伸

秋子

欣之

賢子

紀雄

榮子

浩三

いさお

扶美代

弥生

介護の手軽む一言ありがとう

へこまして測りなおすもメタボ腹

ありがとうと言える間は生きられる

生かされていること知った古稀間近

ネンネコの温み知らない児を育て

伸び伸びと大地で生きた鉢の梅

どちらが先に起きるかもめている

翠洋 会大版

安土 理恵報

雪吊りが冬の兼六風物詩

議事堂の屋根を清めよぼたん雪

本棚であくびをしてる丹羽文雄

本棚で父のマルクス干涸びる

本棚の文学全集眠つてゐる

立ち読みの続きが売れて棚にない

本棚の自分中背文字光つてゐる

青春の蹉跎へ本棚軋み出す

夢に見た卓上ピアノとママ人形

やわらかなピアノの音色風に乗る

味のある奏者を視つ聴くピアノ

釣書にピアノ教授と書いてあり

明日嫁ぐ娘へピアノよく喋る

遠くなる耳にささやくピアノ曲

古傷の痛みを誘うピアノソロ

お隣のピアノ聴いてる茹玉子

胸底のピアノがひびきやがて恋

連発のクシヤミに乗つて春が来る

好文

一泉

順子

婦美子

哲男

章子

正和

浩二

志華子

れんげ

石舟

水昇

尚士

正雄

富子

観子

久峰

すみ子

千梢

集一

日の出

理恵

義

みつ子

弘子

子は巣立ち犬を相手に豆をまく

まなざしの優しき介護癒される

呆けツツコミトンチンカンの老夫婦

考えが皆おんなじで混む役所

行き摺りの赤ちゃんの笑みもらう春

覚悟して写した遺影胸を刺す

もてぬ子に母からぬくチョコレート

ストレスを捨てに花屋に足を向け

よかつたねいつものように今日が来た

白黒は曖昧のまま後ずさり

簡単に出来るものには味が無い

糊しろを食い潰しつつ老いてゆく

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

宿無しにならなきや名句生まれ

朝風呂は旅の醍醐味至福時

三日目の宿は我が家の床がよい

好きですと言つたランプの宿恋し

楽しそう田舎に泊まろう宿探し

一人居て宿泊気分ビール呑む

六十歳祝いにくれた宿の券

冬野菜渡して今日も距離保つ

二世代の渡り廊下にある掟

本音はな渡したくない台所

本命のチョコ渡すには遅すぎる

手におえぬ家計渡され四苦八苦

引導を渡されるまで酒を飲む

げんえい

満作

舞夢

桃花

知之

茶々

恭昌

捷也

照子

千歩

蕉子

昭

完司

龍枝

和枝

きみ子

瑞子

美津恵

英子

賀寿恵

茶子

萩江

由紀子

日出子

泰輔

年金を頂き夫にお小遣い
世渡りがうまい友でもリストラダ
葛橋渡る二人は添いて揺れ
親鸞の座像宝にして生きる
銅像が銅の洋服着ています
等身大の五百羅漢に父の顔
雪がとけ鼻水たらすコナン像
銅像が兵器にされた暗い過去
写メールで来た母の像なつかしい
災害は想像絶する爪のあと
白画像はうんと欲目に書いておく
家中の障子を全部貼り替えた
誰も彼もやがて白紙となる命
泥沼を白紙に見せる雪景色
ふん切りがついて白紙になれた朝
すべて白紙に帰しましたと白い骨
高らかに白紙のデビュー囁々の声
赤ちゃんの白紙を染めるのはあなた
罪と罰白紙にするか雪が降る
貧乏を刻んだ像は芸術だ

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

穀報

和子 風露 恭子 螢 けいこ 京子 重忠 鬼一 いさお 貞子 悠子 石花菜 節子 喜美子 睦子 克枝 よしえ 康子 次男 照彦

握手した温もりずっと覚えてる
口下手でずっと握手をして回る
こたわりを捨てて握手で丸くなり
グモンネと出す手に心丸くなる
握手して別れた君が今も好き
病んでいてる友を励まし手を握る
手を出され握るか蹴るか思案する
握手した人が味方と限らない
ライバルの握手に謎が多過ぎる
人並みでいいと言いつつ欲が出る
知らん間に記念写真はいつも端
ひびのある夫婦茶碗を並べてる
なが話理屈ばかりを並べ立て
不況でもわけあり品に人並ぶ
紅梅と白梅並び競い合う
箱根路を並び抜きさる青春譜
寒風に並ぶみくじの白い花
ふるさとの村に別れを告げる橋
明石大橋見える住宅値が上る
喜寿迎え年の数ほどあつた橋
匠の技ローマ時代の橋づくり
春まじかカモメが一羽橋の上
おおかでちよつと太めの彼が好き
春を待つ窓べの日さしやわらかく
殺伐と悲しい世でも日は昇る
しゃれた紳士と酌み交したの幻
みどりこの頬ほんわかと春の色

(早)孝子 政一 美恵子 千賀子 史郎 勤 義行 無限 淳子 茂 礼甫 弘子 希本子 幸美 忠貞 寛子 美穂 利子 繁義 基輔 悦子 (小)弘子 (小)孝子 順子 いわゑ みつ子

まいど一号握手しました青い空 武彦
米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報
釣り天狗困んで漁のおすそ分け
どの池も北極星が光ってる
目が合つてねずみ壁へと後ずさり
気分転換忘れたものが甦る
八十の峠に立つて先見えす
すばらしい今日の天気元気づく
時々バケた振りして聞き流す
トリカブトきれいな花に謎がある
雪江
城北川柳会(大坂) 伊達 郁夫報
正体がばれて女のうす笑い
こわい異渋谷新宿夜の貌
苦心した祝電なのに以下同文
ぬるま湯の中で奇策が浮かばない
壁一重正体知らぬ人が住み
張り込んで正体つかむ点と線
正体を失うほどに飲みたい日
野も山も装い凝らし春の色
昭和一桁邪魔な物でも捨てられぬ
商品の置き場所変えて客を呼び
一生にリハ一サルなど無いドラマ
身の錆を磨くつもりで窓を拭く
給付金両手を受けて待つてます
湯タンポや自転車うけるエコライフ
東吉
萬的 あやめ 千歩 妻子 ひさ乃 喜美子 美智子 ルイ子 弘風 桂作 章久 郁夫 とし子

イケメンの誘いが酔わす赤ワイン
あの人騒ぐと風がさわぎ出す
派遣より我が身大事の労組たち
浅間山噴火以前に火の車

水仙の正体見たり一本気

マンネリを止めて鬼らも入れてやる

何もかも老化老化と医者笑い

そこまでは辛抱するなど医者も言う

命まであげるほどには惚れてない

肘つきの椅子は知ってる裏のウラ

マンネリの暮し大事と老夫婦

逆転の発想マンネリを抜ける

九条のたとえマンネリ言われても

本命のチョコはハートで装われる

最高の装い純白のウェディング

成人式今日は大人になる晴れ着

装えばやさしい顔になつてくる

削除キー打って正体残さない

ざりざりで息止めてみる試着室

マンネリの暮しにいてた青い鳥

燃ゆる思い酔いにまかせて打ちあける

川柳塔まつえ吟社島根 三島

家計簿に衝動買いの跡がある

家計簿の他にありますへそくり帳

家計簿が赤い顔して愚痴つてる

家計にはひびかぬ程度遊んでる

柳弘

典子

和夫

正

千里

明子

昭子

求芽

かずお

直樹

順三

野鶴

一步

修

倫子

たもつ

志華子

集一

麗

朝子

賢子

沁丘報

紫晃

知恵子

邦代

玲子

おおらかで家計気にせぬ妻と居る
台所家計の動きみんな見せ

中庸をゆけず白黒つけたがる

中間で右や左の愚痴を聞く

真ん中の引き出しにある皮財布

中に立ちどころもつけず貝になる

中間の僕に探りを入れに来る

ほどほどの中間保ち生きている

アメリカが探した人の名はオバマ

ほろ酔いで自分探しと言うのれん

閉店にはぐれて探す嫁姑

古い手紙古い男の名を探す

よもぎの香探し早春丸くもむ

真実を探し珈琲かきまぜる

頬紅もすんなり乗った初鏡

音痴ですんなり唄う梯子酒

すんなりと決まった話持ちいい

すんなりと行つても不安残してる

すんなりと伸びた息子に嫁がない

赤椿すんなり落ちたわけじゃない

鬼瓦平和を願う天をつく

牛の目に宗教入れた鬼才の碑

身を殺し鬼の心で子を叱る

鬼は外女房も外ひとり食う

心底の鬼を追いつ豆を撒く

輪の中の鬼で孤独に耐えている

薫

蘭水

昌枝

政子

螢

和歌子

蘭

多喜

茂美

幸子

英子

桂子

房子

畔

スズコ

たけし

静江

禮子

治代

喜美子

ちえこ

日出子

幸

注湖

叮紅

沁丘

むらくも川柳会(島根)

毛利

幸報

無事祈り後姿を目で送る

拍手はうつけど神にまだ逢わぬ

たまさかに人来て笑う掘炬燵

無関心装い耳だけ伸ばしてる

めまぐるしい世に生きたい船の旅

下手くそな字だが温もりある賀状

邪念未だ強く仏に近付けぬ

一年生背丈に余るランドセル

お正月ひ孫がくれた知恵袋

すつきりと攻める駒には打つ手なし

好きな人割こむ孫等炬燵かな

健やかに家族で祝うお正月

ストレスを上手に捨てて来た長寿

そわそわと愛大車聞き分ける

そわそわと我落ち着かず夢の中

信じ合う母娘内緒のない会話

ドカ雪に裸の万両立っている

神様を梯子で祈り嫁頼み

いずも川柳会(島根)

佐藤

治代報

苦労して建てた家には子が住まぬ

デカイのか鈍か分らぬ器持ち

お見合いのマンナ一にして顔も見ず

大笑いできる小さな家建てる

考えが浅くて渦に巻き込まれ

幸

蘭水

かずこ

愛子

瑞枝

俊夫

秀夫

美保

定子

彰

喜美

恵美子

ます美

久子

清子

秀子

信夫

注湖

孝亮

たえこ

玲子

しげる

満江

地球と言う器の中で生かされる
言わ猿守り友とは睦まじく

丁寧に暮らす器の欠けたまま

身についた行儀作法が身を助け

本音吐き切り取り線の外にいる

洋食のマナーに疎い主婦である

森に来て森のマナーに縛られる

切れ味のよさ味方まで切りつける

それなりの器に添って生きている

七転びする度大きくなる器

結び目を切らずゆつくり解いてやる

浅い瀬の底で危険が揺れている

あつさりと鎖を切つて縁を切る

糸切つてからの私が歩み出す

浅はかな女心を覗かれる

切り捨てて四捨五入して生きている

お茶席のマナーに足が拘ねている

床の間に赤い器が座ってる

善悪が切れる鉄は胸の中

宇宙に立てる夢を見ている団子虫

マナーまで飲んでしまったウオッカ

遠慮しているから話浅くなる

花結び浅い縁とは思われず

お茶の間のマナー座布団裏返す

神様の死角で赤い糸が切れ

てのひらに建て増しをする水回り

影を切るまだ前進をしなければ

治代

嘉寿恵

佳子

煩悩児

テル子

敬子

久枝

左余

多喜

寿美

徳子

放舟

幸子

歌子

房子

弘子

桂子

健柳

幸子

絢子

蘭水

町紅

芙佐子

喜子

浜丘

章峰

文子

手に馴染む器と会話して満ちる
背なの子に浅瀬教えてもらつてる
夢うつつ浅い眠りの走馬燈

富柳 会大阪 池

バラバラの意見を活る縄がない
十人十色生きたドラマの運不運
詰め込んだ知識へ雪崩多発中
嫁さんが若くて時効にしてくれぬ
美しい夢を見てたと知る別れ
手袋は淡い妬心を知っている
時効でもお天道さまが許さない
知つても今は黙つて風を読む
幸せは指の隙間が好きらしい
太陽に恥じぬ雑巾日向ぼこ
不整脈楽しいニュース欲しくなる
鐘一つ鳴らせば消える過去がある
時効まで黙つて待った落し物
時効なし心が記憶する限り
万札がすぐバラ銭になる家計
コンバクトに彩が深まる秋のバラ
バラバラの人生自分史まだ途中
一輪の侘助が知る思い込み
母逝つて求心力の落ちた家
ひと時のときめき求め未知の舞
何もかも白く晒してゆく雪よ
古傷が乾くと風が笑わない

ちかし

茂美

まこと

森子報

佳子

伸雄

和子

晴美

鐘造

アキ

深雪

彦次

寿之

澄子

登子

よしみ

恵子

未知

壽峰

よりこ

紅紫朗

千華

ひろし

七朗

信子

鬼焼

手に残る感時効などはない
バラバラの技を束ねるきび団子
無理をして笑顔を作る父哀れ
人々の善意で続くルミナリエ
生い立ちの傷が時効をむしかえす
木枯しに愛の余白を埋められる

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

わたくしが近づくと思止める薔薇
過疎の山酸素いっぱい息をする
酒臭い息を鎮めて礼をいう
仏さままだ息してもいいですか
息のあるうちに秘伝を聞いておく
一息をついてあたりを見えています
溜息を洩らすたんびにしほむ夢
息を吹きガラスを試いて春を待つ
溜息はつかぬ私の処世術
呼吸する昼寝の夫を確かめる
どぶろくはじつくり寝かす方がよい
丹田にじつくり力溜めている
ポケットに打算じつくり指弾く
じつくりと膝合わせれば和解でき
無駄なこと辞めろと笑う辻地蔵
指十本からだの肢々に無駄はない
一言が無駄であったと悔い残る
老人も無駄に生きてるわけじゃない
人生は無駄があるからおもしろい

奏子

武人

高鷲

糺

欣之

森子

幸安

秘

茶子

主一郎

清帆

菖子

雅女

和子

はるお

一瑤

忠良

幸枝

孝男

蟹郎

節子

公乃

一粹

無駄金も使い楽しむ老いの趣味
手配済み高跳びしても無駄だろう
うみなりは蟹や魚の泣き声だ
機関銃の砲身がくつき泣いた肩
親だもの児の泣く声に乳も張る
満天の星だ泣くのは明日にする
杉花粉私泣かせる春がくる
死者に遠くなるほど涙薄くなる
屠殺場へ向う和牛は低く泣く
ハアハアと撫でて治った母の息

川柳塔打吹(鳥取)

野口

節子報

母さんの魔法赤ん坊泣きやんだ
たくらみし魔法かけてはお金取る
オバマさん魔法の杖を振り給え
杖を振り魔法で五億手にしたい
焼酎の魔法の効き目三時間
春が来る魔法のように花が咲く
うな重は土用平日味一緒
正直にしゃべり重ねて支持低下
座ぶとんを五枚重ねてかくれんぼ
顔のしわ苦労重ねて深くなり
総理どの重ね重ねの大失言
重ね着をしてもふところ温くない
札束を重ねて老いの後始末
やれやれと四十年の重ねジワ
人間も中味の良いのが一番だ

幸子 かつみ 石花菜 重忠 睦子 きみ子 たぬ 美雪 和枝 美恵子 節子報 公恵 富枝 孝恵 紀美恵 完司 玲坊 たかこ 義人 楨元 久芽代 照彦 美美子 三津子 勝誉 克枝

うまい中味最中の皮の頼りなさ
菓子だなとあけたら吃驚箱だった
女文字中味惚の字が妬けてくる
先生と呼ばれ中味は伽藍洞
好婦さんよくも八つの命抱き
闇僚は月夜の蟹だ空っぽだ
行く先の選べる鍵を持って往く
嬢天下鍵と財布は離しやせぬ
やさしさに触れて心の鍵を開け
蔵の鍵あけて昔と語り合う
鍵しめて仁王になった山の神
留守なのに玄関が開く里の家
鍵付きの日記に本書書いておく
九条の鍵を開けてはなりません
天国の鍵を探して老いてゆく
春を盗まれないようにロックする

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

愛されて愛して夫婦丸く生き
格差は正進まず不満つものてる
親の格差世襲となつて引継がれ
首切りの刀が迷う人事室
母さんの膝では涙拭かない
おだやかな子に円満な父母がいる
不景気で格差益益広がった
悲しみを女は咬んで紅を引く
カルテには恋の炎は見えてない

和子 和枝 清 螢 貴恵 石花菜 京子 勝憲 たけ代 美代子 重忠 龍枝 滋 美ツ千 芳光 節子 恵子報 一風 美智子 銀杏 寿子 弘一 茜 さち子 鈍甲 ルイ子

お日様の愛は格差のない光
頑張れと格差の海へ背なを押す
順調な老化和書いてあるカルテ
退院のカルテに感謝ありがとう
こっそりと遺書を書いている冬の夜
格差など知恵と努力が埋め立てる
カルテには七〇歳に五十肩
これだけは格差がないと知る寿命
ああ奇跡命拾いをしたカルテ
歴然たる格差生みだす国の罪
円満な時を食べてる日向ぼこ
生活の乱れカルテに叱られる
凜然と咲く蠟梅に気を貰う
円満にきつちり底をつくサイフ
下には下と思う心にある格差
一筋の光にどん底よみがえり

川柳大阪

長井

善純報

初孫のくしゃみ一つが和ませる
紅よりも丸い笑顔が和を招く
寒さにも梅一輪に和む顔
水仙の香で和む冬の居間
赤ちゃんの澄んだ瞳に和む僕
老婆の和やかな声年金日
和ませて明るさ運ぶ議員待つ
順風に幸あれ願う初もうで
この不況風見鶏では治らない

集一 麗 たもつ 三郎 郁夫 弘風 かすみ 栄二 朝子 賢子 柳弘 仁清 野鶴 博泉 恵子 頂留子 川童 一步 功 かよこ 和 彦太 喜楽 笑歩 紀雄

戎っさん不況の風を飛ばしてや

決断力ニヤリと試す向い風

金力で走って受ける向かい風

信じてるきつと優しい風は吹く

塾カバンかかえ風の子いちもくさん

窓開けて幸せの風呼び入れる

風の音夢ふつくと春を待つ

良い事もあるよと風のメッセージ

未来への命育くむマタニティ

オバマさんイラク撤退出来るかな

九条で未来ある子を守りたい

無形文化未来に残せ村祭り

リストラに未来予想図たてられぬ

永劫に九条光る世にしたい

果てるまで未来見据えて生きている

冬枯れの大木秘めている新芽

過去を捨てて未来の夢に舵を切る

真剣に未来の地球考える

武力のない世界を夢に見る未来

堺川柳会(大阪)

河内

月子報

地雷など埋めて地球よすみません
早合点引つ込みつかぬことになり
一言に二倍返してくる女

解散へ名前と顔を派手に売る
腹立てた時はいつもの倍疲れ
折角のお誘い夫おりますの

照月

柳昌

章久

信醉

一風

五月

芳香

まつお

柳弘

勝弘

すがお

珠生

花笑

ダン吉

東吉

美花

鉄心

楽子

善純

好子

公誠

朋月

日出

みつこ

好子

早い目に目覚め一日良く回る

あきらめの早さはわたくしの長所

ダブってるチョコは私が食べてます

早い目に行って一人を持て余す

ハードルを跳べた自分へバラを買う

すみませんで済まぬ愚者の取り違え

飛び乗ってあやまる女性専用車

早い目に白旗あげた方が楽

のびのびとダブルベッド独り寝る

怪我病気ダブルパンチに沈められ

病床の妻へ悔悟の罪ひとつ

呑助にダブって嬉し酒ビール

早い目の対策欲しい派遣切り

産院の予約済ませてハネムーン

手違いでぎゅつと握ってすみません

はよ言えば中国産は大キライ

酔ってますチークばかりですみません

心入れ替える顔してすみません

婚礼にダブルが似合う皮下脂肪

すみませんねえの語尾だけ上げる妻

すみません言つたばかりに上つけ込まれ

すまんすまん気づかう母を介護した

はにかみが棘を秘めてるバラの花

弾けたらとことん荒れるバブル風

早期発見でした神様お医者様

だだだぶのダブル親分覇気がない

半銭

扶美代

さくら

梓

五月

鐘造

像山

玄也

雅明

のん子

恵勇

りつえ

八千代

時雄

冬虹

としお

山彦

天笑

唯教

愿

世紀子

雅子

童之介

健吾

清晋

月子

川柳塔すみよし(大阪)

岩崎

公誠報

見つめ合うだけで幸せだった頃

五歳児に狸寝入りを見やぶられ

経済界見る影空し地に陥る

いい夢の続き見たくて目を閉じる

見抜いても見逃している母の慈悲

かくれんぼそと影から見る背中

見過しにできない介護する背中

まだかなと明日を見つめている冬芽

見た目よりずっとやさしい妻がいる

バラの棘いつも見ているかすみ草

じつと見ているまだまだ見る子供の日

ばーとして毎日テレビ見てばかり

見るからに怖そうな人笑ってる

現実のきびしさを見るお給料

時々古いアルバム出して見る

九条が見たのは硝煙の世界

悠久を見せる平山郁夫の絵

見終わってまたうなだれるジャンボくじ

この国の総理はどこを見てるやら

頑張れば何時か光も見えてくる

潜在力見抜けなかったのが誤算

大空を見上げて春を呼んでいる

三月月さん細目で見る露天風呂

見る度に貯金増える白昼夢

萌

温子

末吉

定子

りつえ

章久

美籠

かりん

克博

岳人

正太郎

幸子

裕之

日の出

ヒロ

ダン吉

蕉子

遠野

まつお

(奥)五月

庸佑

芳香

ばつは

舞夢

真心が透ける眼鏡が今欲しい
銀行で見た札束を夢で見る
手のひらをじっと占い師の吐息
児が見てる赤信号で渡らない
朝青龍好きじゃないけど見てしまおう
一人よりふたりで見たい雪景色
迂闊にも何を見てたか今までに
見た目では違い分からねえうなぎ

ノン子
(矢)五 月
柳 好
シマ子
明 江
桃 花
半 銭
公 誠

第10回記念大会

大根島ぼたん句会

とき 4月29日(祝) 開場10時
ところ 八束町中央公民館

兼題・選者(各2句・締切12時・席題なし)

「商 い」 但見石花菜選
「配 る」 門脇かずお選
「だんだん」 金築 雨学選
「葉」 佐々木 裕選
「もんぺ」 銭山 昌枝選
「走 る」 渋谷由紀子選
「貝」 長谷川博子選

会 費 1500円

欠席投句料 1000円 投句締切4月20日

投句先 〒890 松江市八束町波人5225

門脇波留子宛(0852-7616112)

第4回松江市川柳大会

日時 6月7日(日) 10時30分開場
場所 松江テルサ4階

(JR松江駅前西)

兼題と選者「勇 気」長谷川博子選

「踏 む」内田 久枝選

「破 る」松本 文子選

「すれすれ」佐々木 裕選

「芝 居」金築 雨学選

「幻」政岡日枝子選

「響 く」土橋 螢選

参加費 1500円
各題2句、締切12時、開会13時

(記念品・発表誌呈)

弁 当 600円

60個準備(先着希望者)

欠席投句投句先

〒690 0015 松江市上乃木9-23-22

三島 浜丘宛

投句締切 5月20日(厳守)

投句料 1000円(小為替)

主催 松江川柳会

高鷲垂鈍 没後20年記念句会

寝屋川句会の祖高鷲垂鈍(平成元年4月15日没享年82歳)没後20年を記念し、五月の川柳寝屋川例会は故人を偲ぶ記念句会とし、遺作、著作物、色紙、原稿、写真等を展示します。

とき 5月17日(日) 12時開場

ところ 寝屋川市民会館

(TEL 072-823-1221)

挨拶 川柳ねやがわ会長 山本 三郎

おはなし 阿萬 萬的

題と選者(各題2句、締切1時半)

「勇 気」 吉村 一風 選

「混 乱」 岩内 外吉 選

「純 粋」 板尾 岳人 選

「酒」 住田英比古 選

「愛」 河内 天笑 選

会 費 千円

投句料 切手400円分同封5月12日必着

投句先 〒572 0033 寝屋川市春日町9-9

高田博泉方 川柳ねやがわ事務局

TEL 072-827-92204

主催 川柳ねやがわ

後援 寝屋川川柳協会

第24回 国民文化祭・しずおか2009 川柳作品募集要項 (概要)

愛鷹に響け川柳 躍動するまち ながいずみ

- 1、応募受付期間 平成21年4月1日(水)～6月30日(火) (当日消印有効)
- 2、応募規定

作品 一人各題二句詠 (未発表作品に限る)

- (1) 応募料 一人につき1,000円(但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。)
- (2) 所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。
- (3) 応募先 第24回国民文化祭長泉町実行委員会事務局 文芸祭「川柳」係
- (4) 〒411・0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩821-1 長泉町文化センター内

- 3、宿題・選者へ事前投句 高校生・一般の部

「お茶」 〓 長江 時子 (大阪) 「生き生き」 〓 竹本瓢太郎 (東京)
 「空港」 〓 三浦 宏 (広島) 「麓」 〓 石井 有人 (北海道)

「ゴミ」 〓 佐藤 純一 (兵庫) 「生き生き」 〓 西來 みわ (東京) 「自由吟」 〓 松川多賀男 (静岡)
 〓 当日投句

「派手」 〓 零石 隆子 (宮城) 「誤解」 〓 村上 氷筆 (兵庫) 「根」 〓 成田 孤舟 (東京)

第二次選者

- 4、賞 (予定) 今川 乱魚 (千葉) 塩見 草映 (愛媛) 大野 風柳 (新潟) 大木 俊秀 (神奈川) 奈倉 楽甫 (愛知)

静岡県教育委員会教育長賞・長泉町長賞・第24回国民文化祭長泉町実行委員会会長賞・静岡県静岡県実行委員会会長賞
 (社)全日本川柳協会会長賞・静岡県川柳協会会長賞

- 5、発表会場 川柳大会 (当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成21年11月1日(日) 10時30分～16時00分 長泉町文化センター ベルフォーレ
 入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方(小・中・高校生は入選者)に無料で配布。

- 6、問い合わせ先と募集要項の依頼先

〒411・0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩821-1 長泉町文化センター内
 第24回国民文化祭長泉町実行委員会事務局 TEL 055(989)0001 FAX 055(989)0500

- 7、主催者 文化庁・静岡県・静岡県教育委員会・長泉町・長泉町教育委員会 (社)全日本川柳協会・静岡県川柳協会

柳界展望

○尼崎ザ川柳、20年11月22日(土)尼崎ビッコロシアターにて開催。出席85名、同人の秀句は次の通り。

公園の松の根っこに小キノコ 堀 正和

雑音の中でしつかり生きている 長浜 美籠

○59回広島新年交歓川柳大会は1月10日、広島中央公民館に於て開催、74名参加特選句

牛の絵の中に家族を遊ば

本社句会は4月から開催時間がvari午後5時半からとなります。お間違いないようにお越し下さい。

せる 小島 蘭幸
栄転も左遷も紙コップで祝う 小島 蘭幸

○川柳塔わかやま平成20年度葵水賞として

何ほでも入る大きな欲の壺 川上 大輪

課題吟賞第一位

おろそかにせぬ下敷のうらおもて 武本 碧

▽出版 版△

○朝日カルチャーセンター「初めての川柳」講座(講師板尾岳人)は合同句集『ひこばし』Ⅱを出版。会

員20名の句を掲載。B6判80頁。

▽同人動向△

○奥田みつ子さん(相談役西宮市)は20年末、東京の美研インターナショナル本

社に於て、2009年川柳カレンダーの合同製作者、芹川英子木彫人形作家と対談を行い、川柳・木彫人形

それぞれの作品への想いを語り合った。

○播本充子さん(理事・八王子市)は2月25日、都立南多摩高校創立百周年記念事業総合学習Ⅱ先輩に学

ぶⅡの中で「人間が好き・川柳が好き」と題して70分

間の講演を行った。

○小島蘭幸氏(副主幹・竹原市)は、3月8日第58回西大寺会陽川柳大会出席の

為、岡山県西大寺行。

○榎本宏子さん(同人・京都市)は、同年の女性三人グループと、昨年二月から今年三月までの間に延べ27日間をかけて東海道五十三

次を歩いて踏破、京都新聞に写真入りで掲載された。

▽訂正とお詫び△

三月号表3面、本社4月句会7日(火)午後1時から↓午後5時半から

▽新誌友紹介△

新同人紹介

(前月承認) 松まつ 尾お 美智代よ

楓楽・尚士・見清・黒兎推薦

岡おか 本もと 昇のぼる

天笑・保州・朱夏・和子推薦

奈良県 中尾 勇 事項⑤各部報告事項⑥その他⑦次月審議事項。

紹介者 穴吹 尚士 次回4月7日(火)午後1時30

堺市 吉田 史郎 分、

紹介者 両川 無限

鳥取県 吉野 勇雄

紹介者 竹信 照彦

鳥取市 下田茂登子

常任理事会Ⅱ3月9日(月)出席20名①川柳塔85周年及び

1000号記念行事について②常任理事の各地句会担

当制について③後半本社句会開催日の変更④定例確認

会開催日の変更④定例確認

編集部からお願い

この欄への掲載記事、情報川柳塔事務所へお送り下さい。

記事の採否と掲載号については編集部一任とさせていただきます。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 ねやがわ	19日(日)午後1時半締切 締切り・イメージ・うっかり 自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半締切 残照・冗談・片手落ち	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 藤 井 寺	19日(日)午後2時締切 若い・髭・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時50分締切 散る・喜劇・さすが・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	21日(火)午後1時から 役・薄情・つなぐ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前9時半から ガイド・笑顔・月給・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川 柳 塔 すみよし	25日(土)午後2時半締切 電話・赤・遠い	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和 歌 山 三 幸 川 柳 会	25日(土)午後1時から いよいよ・チャンス・忘れる	和歌山市商工会議所4F 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後7時締切 掴む・本気・うどん・花	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日)午後2時締切 走る・コンビニ・によきにょき きのう	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日) 吟 行 会 あきらめろ・メロメロ・空白	〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原 美雪 ☎0857-53-1185
南 大 阪 川 柳 会	25日(土)午後6時から 穴・ぴったり・一瞬・雑詠	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松 露 川 柳 会	27日(月)午後7時半締切 ポケット・満足・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京 都 塔 の 会	27日(月)午後2時締切 ばかり・向く・気分	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木)午後 1 時開場 溜める・徳・欠伸	奈良市立中部公民館 4 F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町 2-1-24-901 安土理恵
富 柳 会	4 日(土)午後 1 時から 試・ぎっしり・自由吟	富田林市中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城 北 川 柳 会	4 日(土)午後 1 時開場 番犬・遊ぶ・のんき・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉 吉 川 柳 会	4 日(土)午後 2 時締切 普通・静か・ほる(掘る・彫る)	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
堺川柳会	11日(土)午後 1 時から 溺れる・あいつ 「つばさ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 ま つ え	11日(土)午後 2 時締切 ジョーク・職・浮く・ずばずば	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川 柳 塔 打 吹	11日(土)午後 1 時から 役・観光・呼ぶ	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳大阪	11日(土)午後 1 時から そこそこ・図・誤解	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 みちのく	12日(日) 締切 1 時 現役・菌軋り・傘	波多野五楽庵寿寿記念句会 弘前プリンスホテル 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 わかやま 吟 社	12日(日)午後 1 時開会 被る・街角・ぼろぼろ・家具	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後 1 時開場 姿・なげる・きらめき・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	14日(火)午後 2 時締切 心配・そうや・ななめ・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町 2-45-8 山田耕治
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後 1 時半締切 時代・頼む・ほどほど	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
八尾市民 川 柳 会	15日(水)午後 2 時締切 光る・唸る・のんびり・雑詠	八尾市民活動支援センターネットワーク TEL 072-928-3848 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
岸 和 田 川 柳 会	19日(日)午後 1 時半締切 結束・試みる・ざっくばらん システム	いよやかの郷 南海岸和田駅 10時集合 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉

編集後記

☆今月号には、ごまをテーマの川柳入選句を発表しています。番号処理による厳正な選の結果です。

☆2月はじめのこと、ある民放テレビの番組中、となりの人間国宝なる人物を探すというコーナーがありました。田広志が大阪天王寺近くの商店街を歩き、理容「男まえ」の看板に目が止まり、店主で川柳塔社参との津守柳伸さんにインタビューをしました。

三代目として店を任された35年、その間多くの弟子を育てて店を持たせた者もいるという話を聞いて、となりの人間国宝に認定。

仕事に、川柳に地道にこつこつと歩いてこられた柳伸さんにライトの当たったひとときでした。

「有り難い技術喜寿を生かされる」柳伸さんのコメントです。

トです。

☆川柳塔誌を一人でも多くの方に読んでもらいたい。これまでは波屋書房だけであった委託販売店を昨秋より増やしていただきました。板尾岳人氏、加川靖鬼氏の尽力により新しくそれぞれ天神書店、西宮ジュンク堂書店に川柳塔誌を置かせていただいています。販売成果も出始め大変励みになっていきます。(希)

★新しい辞書・辞典が書店に並ぶ季節。わが身辺を見回す。百科事典、国語辞典、英和辞典、川柳関係の事典その他諸々。毛色が変わったところでは「アメリカ俗語辞典」。なぜこれが私の書棚にあるのか？である。

★作家、開高健は明治時代の「大言海」を好んで読んだというが、辞書と遊ぶのは楽しい。「一知半解辞典」(開拓社・郡司外史著)は解説に古川柳なども添えら

ひとこと

素朴な疑問

子供の頃、農村雑誌『家の光』から何となく川柳が好きになり小学校の綴り方の時間に、川柳のよなものを作り先生から「綴り方は文章を書きなさい」と注意をされた。先生に「この作品は駄目ですか」と聞くと「駄目ではない」と言う。

その後、新聞投句に挑戦したところ選者から誘われ初めて句会に出席。昭和四十年頃だったと思う。

従ってそれまでは独学であった。

その初めての句会で先生から「川柳は辞書にある言葉でやれ、自分の人造語は止めよ」と指導を受けた。例をあげて「病窓とは何のことか。どうしてこれが病院の窓になるのか。もうひとつ「まなうら(目裏)」は辞書にはない。ところが私の川柳の雑誌には「目裏」も「病窓」もしばしば出ている。皆さんの知恵で悩める私の疑問を解き明かしてください。

(原 煩悩児)

れた「生かじり、半可通の、知ったかぶり」の知識を振りかざした面白い辞書。

★辞書の使用上の注意に曰く○小、中学生には無益なり○大学受験にも益なかるべし○書に倦みしとき開きて効あり○食後、就寝前に服用すべし○一家に一冊常備の事○『迷解・笑辞苑』と併用して特効あり。抱腹絶倒、暇潰しにはもってこいの辞典。

(朱)

▽春の光りを感じる頃になると、一枚の絵を飾るのを楽しみにしている。徳岡神泉の「鯉」のコピーだ。解説には苔寺心字池の鯉とある。もやとした神泉の描き方から鯉の鼓動を感じるのだ。私には春先に動き出す寒鯉に思えてならない。

▽あれから三、四十年鳥肌が立つほどの絵には出会って無いが、神泉の絵を通して命を見つめている自分を感じた時の感激は忘れられない。蓮のうえを転がる露の

玉に鳥肌が立ったのだ。それから何年かして神泉展が京都であり、本物を見ることが出来もともとと感激した。主人に内緒で三日ほど通ったものだ。

▽昔「日本画家全集」の中から神泉の「蓮」を見つけ、その感激は忘れられない。蓮のうえを転がる露の

(恵)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(6月号)

地名

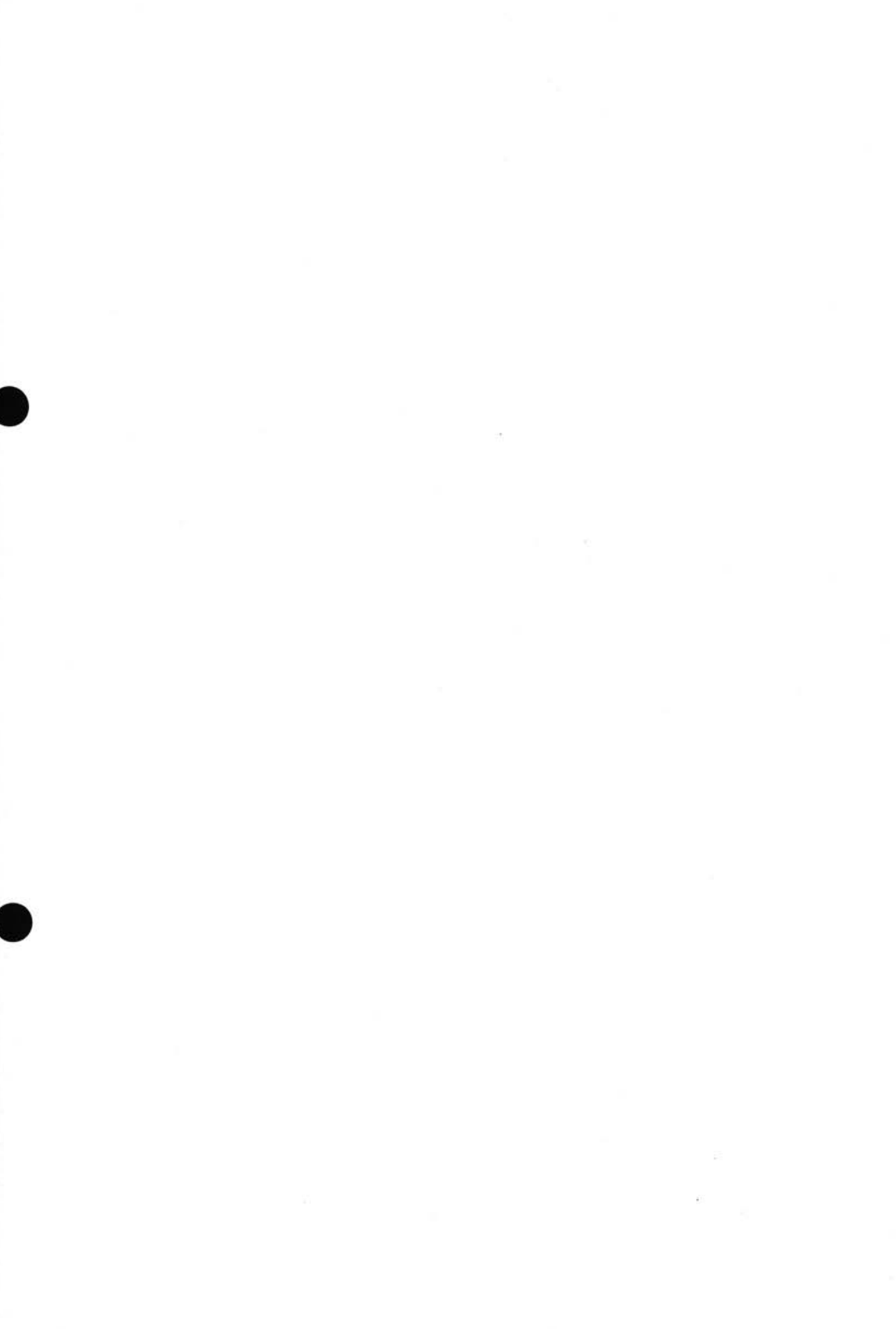
都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「ゼ口」 (4月15日締切)

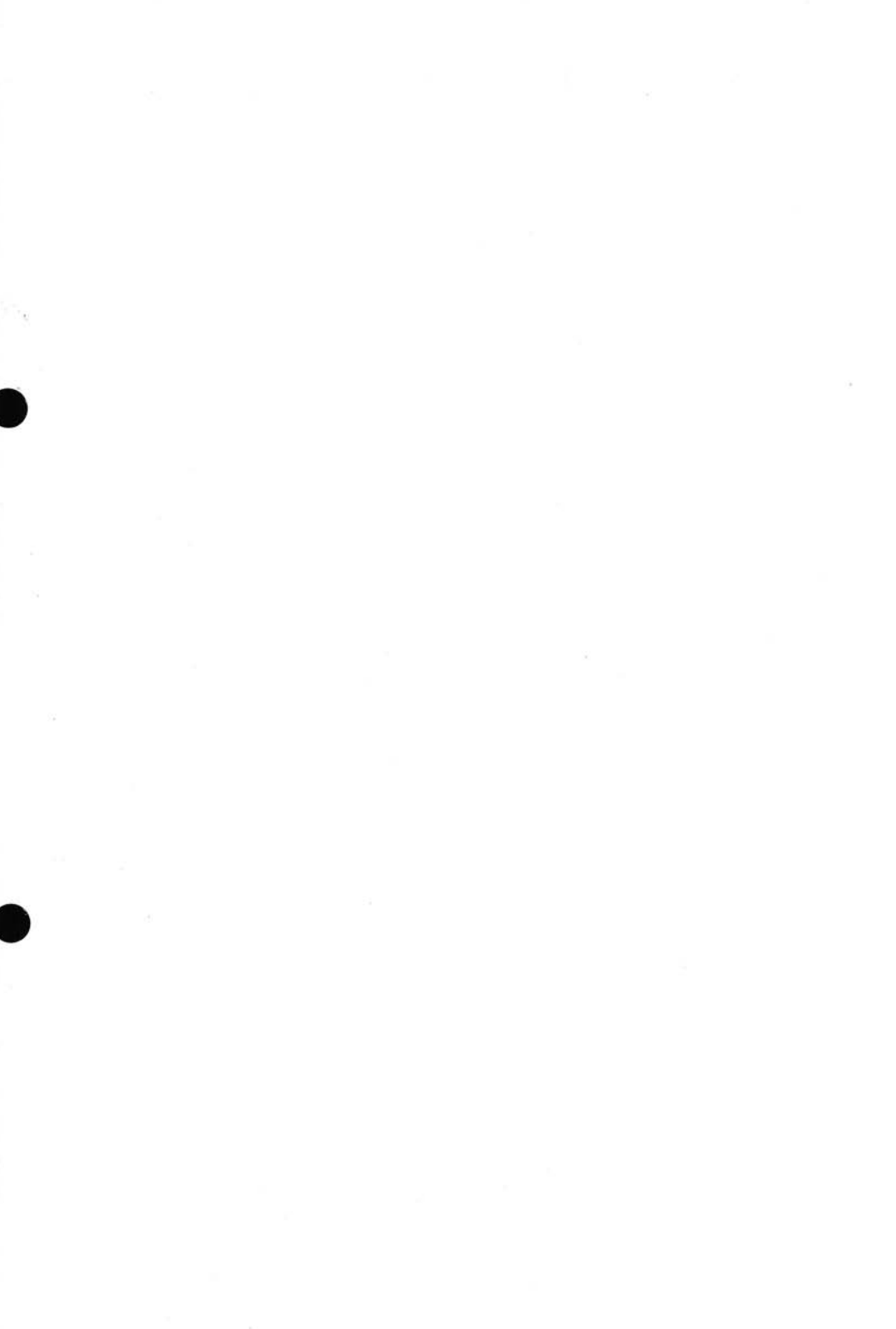
6月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

B		A	
地名 市都 県道府 姓雅号		地名 市都 県道府 姓雅号	

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	—	
		—	

○ ○

年 年

月 月
から 半
一 年

9 5
8 0
0 0
0 円 円

該当の方に○をつけて下さい

〒543
-0052

川柳塔社

(電話 06-6779-3490)

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル 201

振替 009804-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

初歩教室 「涙」(3句) 鈴木公弘担当
一路集 (3句) 「細い」 「レンズ」 山本玉恵選
檸檬抄「ゼロ」(2句) 木本夏共選
愛染帖(3句) 新家完司選
水煙抄(8句) 小島蘭幸選
川柳塔(8句) 河内天笑選

6月号発表(4月15日締切)

7月号
檸檬抄「裁く」
一路集「回る」「傘」
「シャツ」
初歩教室「遊ぶ」

本社4月句会

とき 4月7日(火) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間が変わりましたので、注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし 「楽しいオノマトペ」
兼題 「黄」
「吊る」
「気まずい」
「知恵」
「無料」
会費 1000円
投句料 500円(各題2句以内)(切手可)
川柳塔 黒田 近藤 籠島 木本 朱夏
川端 田能 藤正 恵子
内天笑 歩選

本社5月句会

7日(火) 午後5時半から
兼題 「暇」「迷う」「ロマンス」
「火元」「昭和」

第27年度 夜市川柳募集

第11回「芸」大野風柳選
ハガキに3句 4月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇九年(平成二十一年)四月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@wonder.ocn.ne.jp